

NEPAL HIMALAYA  
EXPEDITION 1996

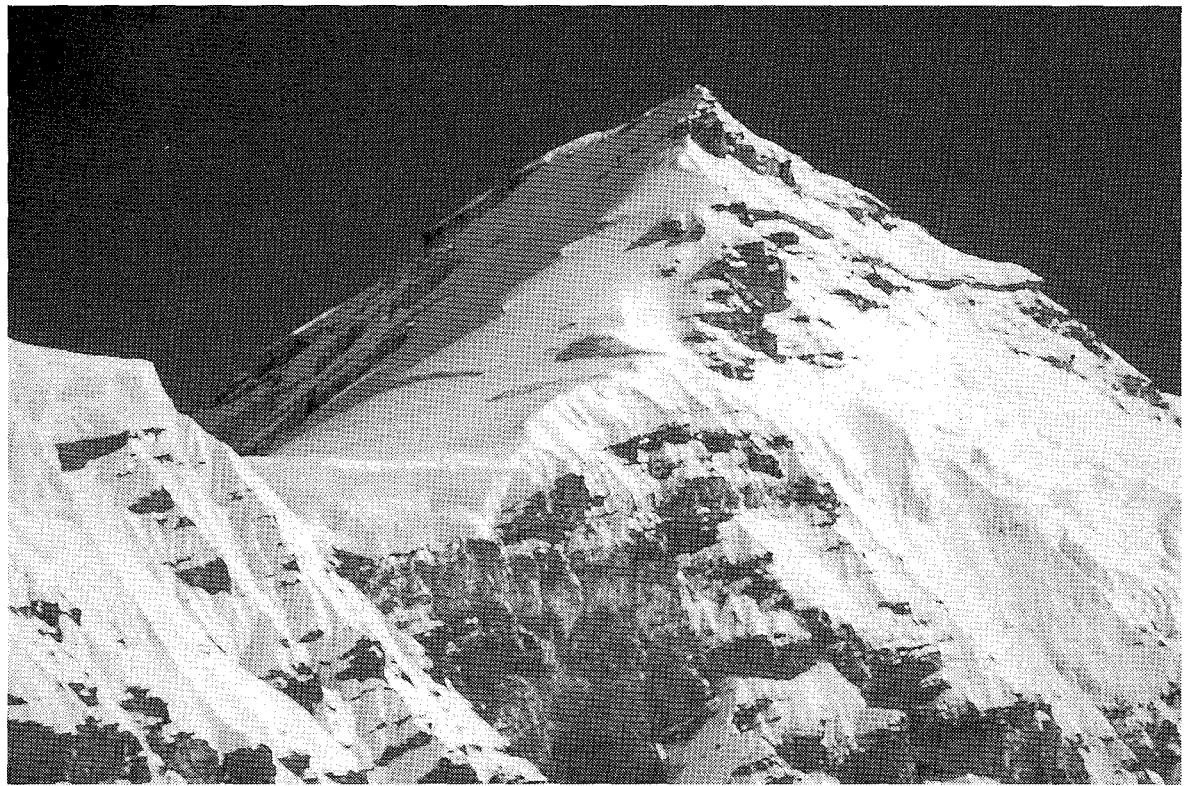
RATNACHULI

SHINSHU UNIVERSITY

1996年  
**信州大学・ネパール警察合同  
ヒマラヤ遠征隊**

**ラトナチュリ初登頂報告書**

信州大学山岳会  
信州大学学士山岳会



ラトナチュリ [RatnaChuli] (7035m)

本書を山田哲雄先生、御子柴三男氏、二俣勇司氏に捧げます

## 序

### ラトナチュリ峰登頂を遂げて

信州大学山岳会会长

信州大学学長

小川秋實

信州大学山岳会・信州大学学士山岳会は、30年間にわたって数年ごとに外国の高峰への挑戦を続け、大きな成果を挙げています。大学の社会における使命の一つに未知への挑戦があります。未踏峰への挑戦は、信州大学が山岳地帯にあるという立地条件からもふさわしいものと思います。

今回、同山岳会はネパールと中国の国境稜線上にそびえるラトナチュリ峰(7035m)の登山を企画しました。

ラトナチュリ峰は、地球上に残された数少ない7000m以上の未踏峰の一つです。信州大学とネパール警察との合同登山隊が組織され、1996年10月14日、同峰の初登頂に成功しました。モンスーンによる天候不順と降雪のため予定より遅れましたが、信州大学の学士会員6名、学生2名の全員が頂上に達し、遭難事故もなく、全員無事帰国できました。

この快挙は、信州大学山岳会の歴史に新たな記録を加えたことになります。

全国の大学山岳部の活動をみると、1995年の東京農業大学隊によるトウインズ峰登頂以外に目立ったものはありません。今回の成功は、信州大学山岳会・信州大学学士山岳会の長年の実績と日頃の訓練に基づくものです。また、信州大学とネパール警察との合同登山隊の結成は、1994年のギャジカン峰(7038m)の初登頂に次ぐもので、この相次ぐ成功は、ネパールと日本の友好を深め、学術文化交流の契機になるものと思います。

未踏峰を初登頂した高度な技術を単に隊員だけのものとすることなく、その詳細を世界中に発信することが、特に大学の山岳会にとって大切だと思います。日頃の登山訓練はもとより、この面でも信州大学が評価されることを願っています。

最後になりましたが、この登山隊結成に多大なご尽力をいただいたネパール警察登山探検財団とネパール警察庁の方々に感謝申し上げると共に、この遠征計画に物心両面でご支援をいただいた横河工事株式会社、信濃毎日新聞社、信越放送株式会社、その他関係各位に心から御礼申し上げます。

---

## 目 次

---

**序 ラトナチュリ峰登頂を遂げて** (信州大学山岳会会长・信州大学学長 小川秋實) 3

---

### 1 はじめに

---

ラトナチュリ登頂を祝して (前信州大学学士山岳会会长 堀 勝彦) 8

ラトナチュリ遠征隊ご挨拶 (信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊ラトナチュリ

登山隊総隊長 野村昌男) 9

ラトナチュリ峰登頂を祝して (ネパール警察学校・登山探検財団ラトナチュリ登山隊  
ネパール側隊長 グプタ・バハドゥール・ラナ) ネパール語 11・訳 13

---

### 2 登山報告

---

行動記録 (渡部光則) 17

涉 外 (渡部光則) 41

タクティクス (田辺 治) 45

梱包、輸送 (田辺 治) 50

装 備 (金子鉄男) 54

食 料 (内田健一) 62

ネパールの食物 (澤田克彦) 69

医 療 (金子鉄男 澤田克彦) 74

環境保全 (内田健一) 82

気 象 (澤田克彦) 85

記録、通信 (澤田克彦) 92

会 計 (澤田克彦) 99

---

### 3 ラトナチュリへの道程 (実行委員会報告)

---

実行委員会事務局報告 (渡部光則 藤松太一) 110

1. 1994年ギャジカン遠征 (実行委員会事務局 渡部光則) 111

2. 1996年ラトナチュリ遠征 (実行委員会事務局 藤松太一) 117

アンナプルナⅡ峰北稜偵察登山 (吉田秀樹) 122

ギャジカン信州大学・ネパール警察合同隊 (田辺 治) 131

## 4 雜人・雑感

---

- ヒマラヤ遠征と私（ラトナチュリ登山隊総隊長 野村昌男）136  
ティルマンに寄せて（ラトナチュリ登山隊日本側隊長 渡部光則）138  
ラトナチュリ登山隊に参加して（ネパール警察登山探検財団山岳部  
ギタ・バハドゥール・ジョシ）ネパール語 140・訳141  
初登頂後のクライマックス・帰りのキャラバン（田辺 治）142  
雑 感（金子鉄男）144  
信州大学学士山岳会へ（リエゾンオフィサー・国立警察学校警部  
ジャヤ・ビシュヌ・ネパリ） 英文 147・訳 148  
登山日誌より（澤田克彦）149  
歌（アルジュン・バハドゥール・グルン） ネパール語 154・訳 155  
雑 感（内田健一）156  
これからの自分を考える（花谷泰広）158  
ラトナチュリ・パーソナルバランスシート（小林茂幹）160

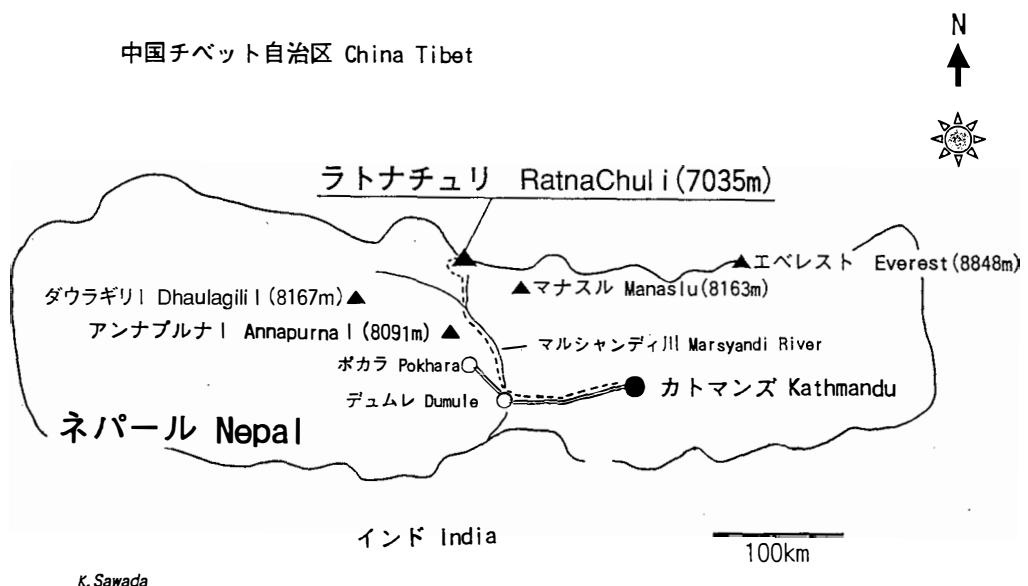
## 5 おわりに

---

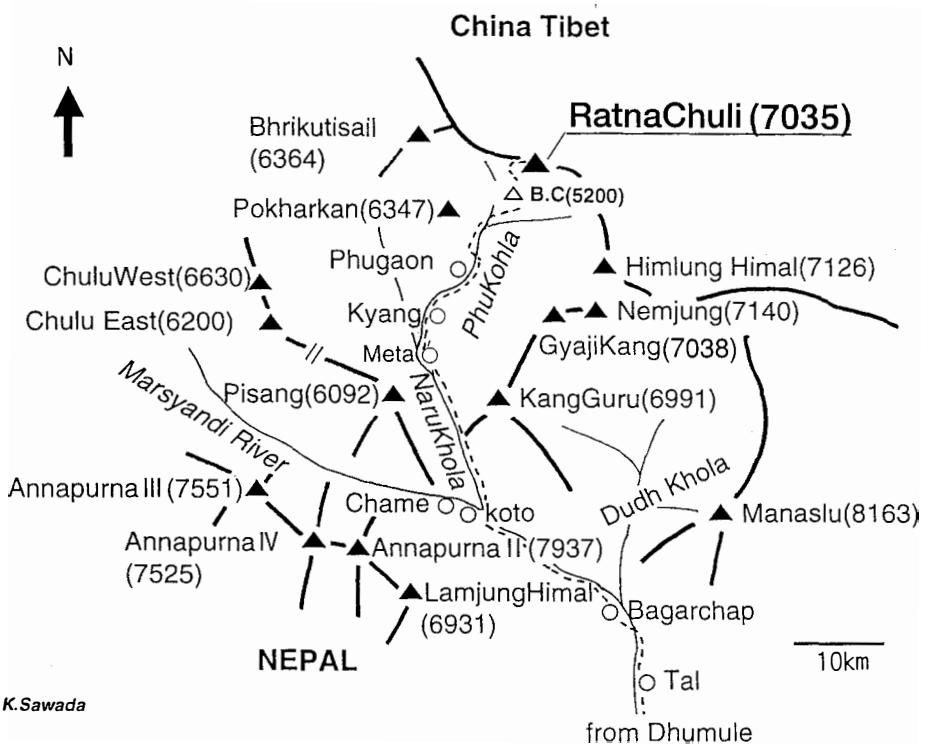
- 実行委員を代表しての謝辞ならびに今後の展望（信州大学学士山岳会会长・  
信州大学ヒマラヤ遠征実行委員長・信州大学農学部助教授 宮崎敏孝）164  
寄付、寄贈、ご協力いただいた方々 166  
信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊'96実行委員会組織 168  
遠征隊員紹介 169

## 6 Summary（渡部光則）

---

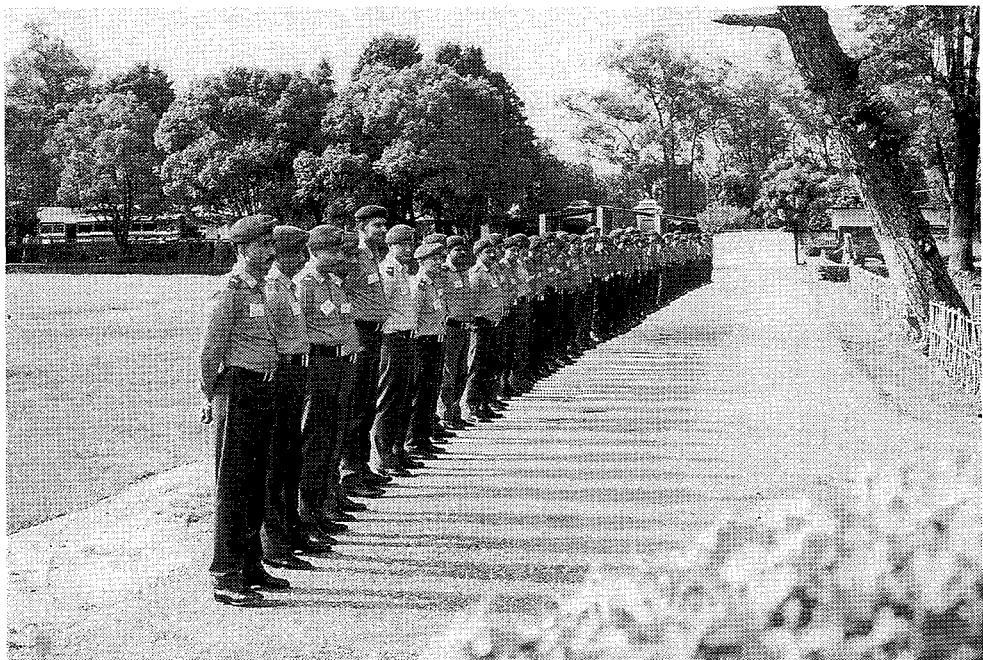


ネパール王国 概念図



ラトナチュリ周辺 概念図

# 1 はじめに



遠征開始式典を終え、出発する登山隊を見送るネパール警察学校職員

## ラトナチュリ登頂を祝して

前信州大学学士山岳会会长

堀 勝彦

山に憧れ、登山にのめり込んでいく人たちの究極の夢は、遠いヒマラヤの高峰を自分の手と足で登ることであろうか。若き日、私も熱い瞳をヒマラヤに送りつづけた一人でした。

旧制松本高等学校のあとを継いで、信州大学が発足しました。

当然、山の都、松本市を中心とした大学へ、登山を目的に入学してくる人が多く、戦後、山岳部は大勢の学士会員（O B）を輩出してきました。

1967年以降、信州大学学士山岳会と信州大学山岳会は度々、ヒマラヤへ遠征隊を送り出しております。ある時は遭難を起こして登頂を諦め、ある時は天候に屈して敗退し、あるいはまた、晴々とその頂を踏むこともありました。

ラトナチュリは、1994年に信州大学の遠征隊がネパール警察との合同で初登頂に成功したギャジカンの眼前に、ネパール・中国の国境線上にそびえる名峰で、古くから当山岳会のO Bの間で注目されておりました。

今回も幸運なことに、ネパール警察との合同登山ということで許可を受けました。

遠征隊は慎重に行動し見事なチームワークを展開して、天候を見計らい初登頂の栄誉をかち取りました。

遠征隊を組織し隊員をつのり、計画を進めていくという事は、忍耐強く、かつ、チームワークが固くなければ不可能です。

実際に遠征隊員として出かける人も、それらを送り出す側にも、実に粘り強いものがありました。それらの結集が良い成果をおさめたと確信しております。

信州大学の大学関係者、学士山岳会会員、登山に賛同された多くの企業の皆さん、ネパールの政府関係者およびネパール警察登山探検財団、ネパール在住の日本関係者の皆様のご協力によって、この遠征はなされました。

関係者各位に心より厚く御礼申し上げます。

この登山を新しい一歩として、次なる目標へ向けて力を貯えていきたいものです。

信州大学・ネパール合同登山隊に与えられました皆様の御支援に対しまして、心より感謝申し上げます。

## ラトナチュリ遠征隊 ご挨拶

信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊  
ラトナチュリ登山隊総隊長

野 村 昌 男

この度、ラトナチュリ峰（7035m）全員登頂の快挙を成し遂げることができ、心より感謝申し上げます。これも一重に皆様方のご支援の賜物と深く感謝する次第であります。

日本山岳協会や長野県山岳協会、ご支援いただいた企業や報道関係、信州大学関係者、信州大学OB、実行委員会委員、そして隊員家族等の方々の熱い応援のおかげで、日本人隊員8名、ネパール警察隊員3名、高所ポーター5名の計16名が頂上を踏むことができました。

ご承知のとおり、ラトナチュリは、1994年のギャジカン遠征の際、登り残した山であります。

中国（チベット）とネパールの国境に位置している関係で登山許可をいただくのにずいぶん骨を折りました。

ネパール政府の方々に度々お願いし、ギャジカン遠征の実績をもとに得たゆえの登山許可がありました。今回かぎりのワンチャンスを与えていただいたネパール政府関係者にも深く感謝申し上げます。

ネパール警察登山隊の実力は良く知られたところで、隊長のグプタ・パハドゥール・ラナ氏の際立った統率力の下、ネパール隊員の献身的な活躍により我々全員の登頂を果たすことができました。

現地警察学校での梱包作業から出発式・キャラバン・登山活動・撤収・下山・復路キャラバン・祝賀パーティと慌ただしい3カ月でしたが、すべて順調に遂行できましたことは、ネパール隊員のご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

さて、実際の登山活動は、この報告書に書かれたとおりでありますので、そちらを参考にしていただき、もう一つの目的の、ネパールの方々との親睦・友好を深め、日本とネパールの国際友好の一助となることが出来たと確信しています。

特にネパール警察隊員と日本人隊員の親睦・友好・協力については、同じ釜の飯を食べた仲間として十分に發揮され共通の目的に向かって邁進することができました。

登頂後のカトマンズでの祝賀パーティには内務大臣はじめ多くの方々にご出席いた

## 1 はじめに

だきお祝いの言葉を頂きましたが、今でもその時の感激を忘れません。

登山をやっていてよかった、人生最高の出来事だなと思い返しております。

今回の遠征には大変多くの方々のご支援をいただき、本当にありがとうございます。

## रत्नयुली हिमाल सफल आरोहणको अभिनन्दन गर्दै।

प्र.ना.उ.गुप्त बहादुर राना  
नेपाल पुलिस माउण्टेनियरीज़  
एडम्बेन्चर फाउण्डेशन

जापानको शिन्स्यु यूनिभरसिटीसंग मिलेर हिमाल आरोहण गर्ने नेपाल प्रहरीको सम्बन्ध कसरी भयो भन्ने कुरा गर्दा मलाई सम्झना छ कि १ डिसेम्बर १९९२ सालमा शिन्स्यु यूनिभरसिटी हिमा लयन कमिटीका अध्यक्ष(Chairman) प्रो.डा. तेचुओ यामाडाजीको पत्र प्राप्त हुन आएको थियो। जस्ता त्यस यूनिभरसिटीको १९९४ सालमा हुने ४५ औं यूनिभरसिटीको अवसरमा एउटा नेपालको भजियन पिक चढने अभिलाषा व्यक्त भएको थियो। यसै पत्रमा संयुक्त सम्पमा हिमाल आरोहण गरी नेपाल र जापानको बिचको सुमधुर सम्बन्ध अङ्ग बढि प्रगाढ हुने अभिव्यक्ति उल्लेख भएको छ।

यस प्रकारको सुनौलो अवसरलाई साकारस्य दिने पत्राचार प्रारम्भ भयो। दुबै तर्फबाट आ-आफ्नो धारणा राखिए। र १९९४ सालमा संयुक्तसम्पमा पश्चिम नेपालको फू गाउँ नजिकको ७०३८ मी. अग्लो ग्याजिकाङ्ग हिमाल आरोहण गर्ने निधो गरियो।

तत्पश्चात नितीगत कुराहरुमा कुनै प्रकारको त्रुटी नहोस भन्ने कुरालाई मनन गरि नियमित प्रकारले श्री ५ को सरकार सम्बन्धित मन्त्रालय कार्यालयहरुमा पत्राचार गरियो। तदनुसार २३ अगस्ट १९९४ सालको पत्रद्वारा हामीलाई उक्त हिमाल आरोहण गर्न स्वीकृत प्राप्त भई ७ सेप्टेम्बर १९९४ का दिन काठमाडौंबाट हिमाल आरोहण गर्न प्रस्थान गरी ७ अक्टुबर १९९४ का दिन ४ जना नेपाली र ९ जना जापानी गरी १३ जना आरोही सदस्य र ४ जना सहयोगी शेपाहिरु गरि १७ जना सदस्यले ग्याजिकाङ्ग हिमालको सफल आरोहण गरेका थिए।

दुबै देशका राष्ट्रिय झण्डा चुचुरोमा पुन्याउन अभिलाषा पुरा भएटा पनि तेसै भेगको अर्को चुचुरो रत्नयुली आरोहण गर्ने अभिलाषा भने बाँकि नै थियो।

श्री ५ को सरकारबाट आरोहणको निमित्त हाल सम्म नखुलेको हिमाल भएको हुनाले पत्राचार केहि लम्बीन गएता पनि पछि आएर स्वीकृती प्रदान भएकोमा हामी श्री ५ को सरकार प्रति आभार व्यक्त गर्द छौं।

ग्याजिकाङ्ग आरोहण गर्न जाँदा ७ सेप्टेम्बरमा प्रस्थान भएको मिति फाफेको हुँदा यस पटक पनि ७ सेप्टेम्बरका दिन प्रस्थान हुने लक्ष्य राखिएको थियो तर शिन्स्यु यूनिभरसीटी हिमालयन कमिटी जापानका वर्तमान अध्यक्ष प्रो.डा. तोशिताका मियाजाकी ज्यूको कार्यव्यवस्थाको कारण यसपाली ६ सेप्टेम्बरका दिन काठमाडौं देखि हिमाल आरोहण गर्न प्रस्थान भएका थियौं।

मौसम खराब भएको कारण खोला नाला तर्न नसकि सवारी साधन लक्ष्य अनुसार प्रयोग गर्न सकेनौं। फलस्वरूप राजमार्ग अवस्थित डुम्पे देखिनै कुल्ली चलाउनु पच्यो। जस्ते गर्दा

एकै दिनमा लम्जुड बेशी शहर पुगीनेमा ३ दिन लाग्न गयो। यसले गर्दा अर्थिक भार बढ़न गयो। जे होस १५ औं दिनमा कुल्लीद्वारा माल-सामान आधार शिविर सम्म सफल भयौं।

हिमाल आरोहण तेसै पनि जोखिम काम भएकोमा ज्ञानै प्रकृतिसित सम्झौता गर्न नसकिने हुँदा हामी आ-आफ्नै पारामा सजग थियौं। तर हामी मानसिक स्पमा सजग थियौं। प्रकृति सित मुकाबिला गर्ने साहस गर्ने अठौट लिएका थियौं।

हाम्रा जापानी मित्रहरु एकलीमटाइजेशन गर्ने काममा कति पनि बिचलित थिएनन। श्री मासाव नोमुराजी र वातानाबेजीले फु गाउँ देखि नै आफ्नो एकलीमटाइजेशन काम प्रारम्भ गर्न भएको थियो। जस्ले गर्दा वहाँहरुलाई हिमाल आरोहण गर्न मदतप्रणेको थियो।

समष्टिगत स्पमा दुबै तर्फका सबै सदस्यहरु जोशीला जोगरीला देखिन्थ्ये।

१४ अक्टोबर १९९६ का दिन हामी ७०३५ मी. अग्लो रत्नघुली हिमाल आरोहण सफल भयौं। दोस्रो र तेश्रो समूह गरी यसपालि १६ जना चुचुरोमा पुग्न सफल भए।

यसरी दोस्रो पटक पनि शिन्स्यू यूनिपरसीटी जापानका साथीहरु सित हिमाल आरोहण गर्न पाएकोमा हार्दिक खुशी व्यक्त गर्दै आउदो दिनहरुमा पनि हाम्रो मित्रता अमर रहने छ भन्ने विश्वास लिएको छु।

## ラトナチュリ峰登頂を祝して

ネパール警察学校・登山探検財団

ラトナチュリ登山隊ネパール側隊長

グプタ・バハドゥール・ラナ

ネパール警察・信州大学合同でヒマラヤ登山を行う計画が始まったのは、1992年12月1日に前信州大学山岳会ヒマラヤ委員会委員長、理学部教授・山田哲雄先生からいただいた手紙からでした。その内容は、1994年の信州大学創立45周年記念として、ネパールの未踏峰を登山したいとの趣旨でした。また、この手紙にネパール警察と合同登山を行い、ネパールと日本の間の交流を深めてゆく方針も述べてありました。

このような素晴らしい機会をきっかけに登山に関する手続き等が始まりました。

双方からそれぞれの提案を交わし、1994年にはネパールの西方近くにあるプー村の近くのギャジカンヒマール（7038m）へ合同登山することを決定しました。以後、法律、規則に則り必要な手続きをネパール政府機関で行いました。1994年8月23日にギャジカンヒマールの登山許可を得て同年9月7日にカトマンズからキャラバンに出発しました。そして、10月7日に、ネパール隊員4名、日本隊員9名、シェルパ4名の計17名全員がギャジカンヒマールの初登頂に成功いたしました。

しかし、ギャジカンヒマールの頂上に両国の国旗を立てた時も、15km北方の国境稜線上にある未踏峰ラトナチュリ（7035m）の登頂を達成する気持ちは、まだ心の底に秘めたままでした。

未踏峰であるラトナチュリ（7035m）の登山許可については、ネパール政府内での承認に時間がかかりましたが、最終的に許可を得ることが出来ました。許可を出してくれたネパール政府に心から感謝しています。

キャラバンにつきましては、前回のギャジカン峰遠征同様、9月7日に出発し成功を収めたので今回も同日に出発する予定でしたが、カトマンズに来られた信州大学山岳会ヒマラヤ委員会委員長の宮崎敏孝先生のご都合のため、1日早く9月6日に出発いたしました。

今回は悪天候のため川の水位が高く、計画通りに自動車を利用することが出来ず、デュムレからポーターを依頼しなければならず、そのためラムジュングまで1日のところを3日間かかり予算にも大きな負担がかかってしまいました。その他、様々な苦労の末、15日目にやっとポーター達のおかげでベースキャンプまで荷物を運搬する事

## 1 はじめに

が出来ました。

ヒマラヤを登山することは大変危険で難しい作業であり、また、恵まれなかつた天候と戦いながらも隊員達はラトナチュリ峰に登る勇気を持っていました。

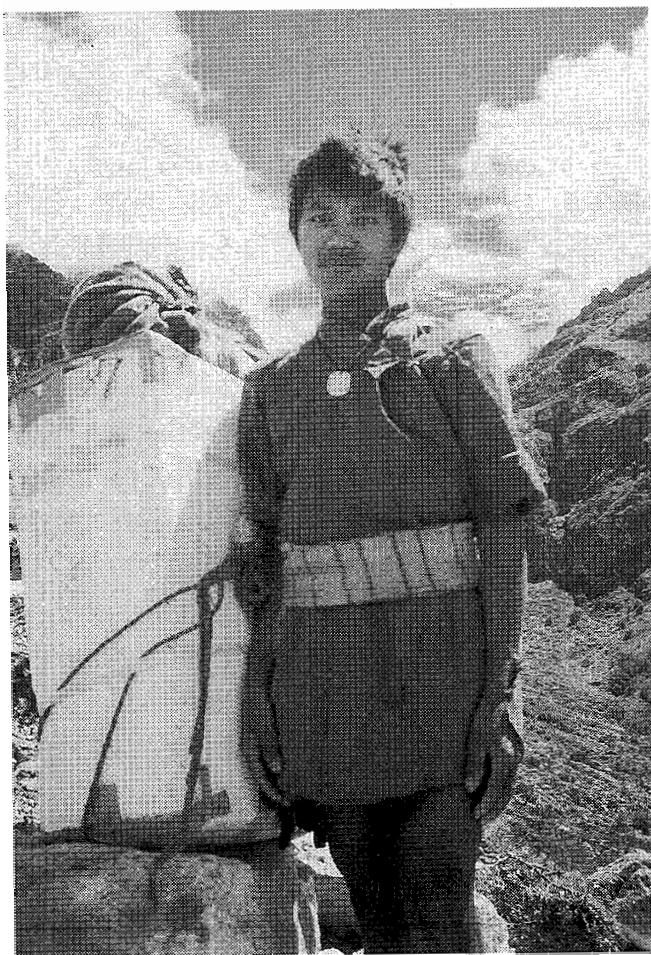
日本側の隊員達は高山病防止のため十分、高度順化を行い、特に野村総隊長と渡部隊長達はプー村から高度順化を行いながら登山を遂行されました。

このように、両国の隊員達は情熱を持ち、体調気力共十分で登山を行い、遂に、1996年10月14日、ラトナチュリ峰（7035m）の第1次登頂に成功しました。更に第2次、第3次隊が登頂し、16名の登山隊全メンバーの登頂に成功いたしました。

このように、2度にわたり信州大学山岳会の皆さんと未踏峰のネパールヒマールを登山できた事を大変嬉しく思っています。今後も我々の友情関係が永遠に継続してゆくことを信じております。

（訳：信州大学農学部 マドウ・スダン・シュレスタ）

## 2 登山報告



ナル・コーラ峡谷にて、ポーターの少年

## 2 登山報告



カトマンズの街角

ジャ（祈祷）を受ける。

9月6日 雨期の最中にすがすがしく晴れた朝、ポリスアカデミーに於いて警察庁長官以下多くの将官臨席の中、合同隊の結団式と壮行式を行う。国旗の交換、長官、警察学校長、宮崎実行委員長の各挨拶、お茶会と滞りなく式を済ませた後、多数の警察官、生徒に見送られて、バス3台（内2台はポーター用）、トラック2台で出発。今年のモンスーンは少々異常で降水量が多く、各地で道路が寸断されているとの情報に心配していたとおり、河の増水と道路決壊のため、車輛はデュムレ止まり。ギャジカン遠征時に泊まったというホテル・ムスタンに投宿。豚小屋の隣のトイレの壁にうごめく巨大なゴキブリと悪臭に皆驚き、コックローチホテルと命名した。カトマンズから1000mも下って標高450m気温34℃と大変蒸し暑く、加えてポカラに向かう幹線国道に面しており、一晩中車のクラクションと、相部屋となったラナさんの鼾で寝苦しい夜となった。

7日 デュムレ（450m）→トゥルトゥレ（485m）

本日より、ポーター178名によるキャラバン開始。向後利彦OBが出発を見送ってくれる。夕食は向後OBのお饅頭をありがたく使って、ビール、ロキシーでキャラバン出発を祝う。

8日 トゥルトゥレ→ボテオラ（625m）

亜熱帯の土地、モンスーンの中、極めて暑く消耗。それでも、稻田と周囲の丘陵全

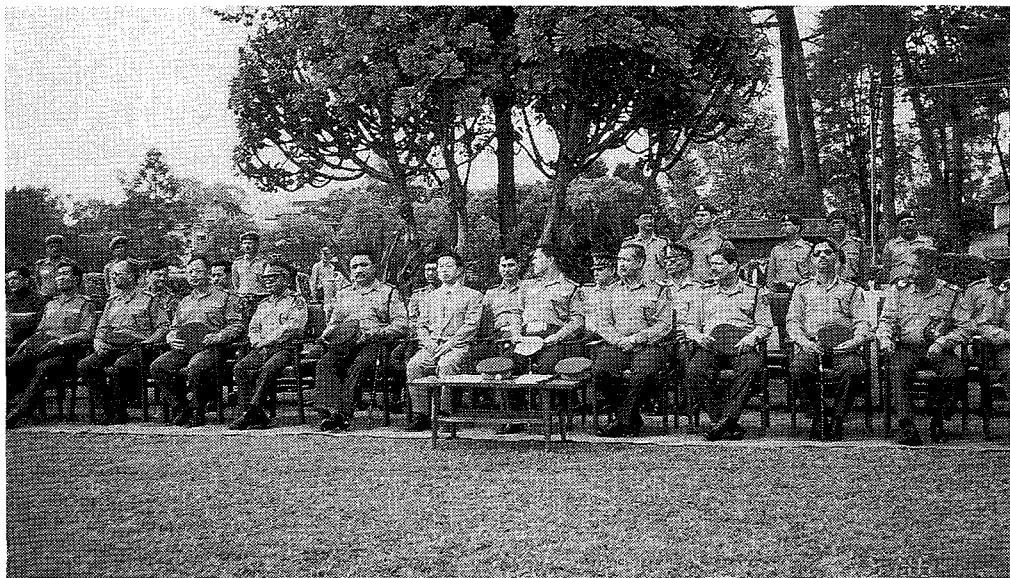
てが緑一色で、自分の体までが緑に染まるよう。モンスーンの晴れ間、田の草取りや、畦を歩く女たちの赤や青の原色の着物が、緑の中で揺れて、まるで絵を見るように美しく、夜はホタルが舞う。あらゆる生物が躍動している季節で、やはりヒマラヤは生命感溢れるモンスーンの季節が最高だと再認識した。雨の時は無論、暑い日差しの中も傘とショーツで歩く。汗だくで歩いた後は、川で水牛のように水浴びを楽しんだ。

9日 ボテオラ→ベシ・サハール (820m)

内田が発熱 (39℃)。日本語の上手なメイルランナーのオンディシェルパとキッチンスタッフ1名付けて残留。おかゆを炊き、澤田の母上からの梅干と、扇能OB夫人に贈っていただいたシソの実の塩漬けが早速役立つ。所々で道路の復旧工事が行われており、丁張り出しの測量をしているネパール人技師と出会い、設計図を見せてもらう。いたるところ地すべりで、土質の悪さと自然の力の大きさに、彼等の悪戦苦闘が偲ばれる。谷を横断する暗渠による盛土はやはり被災著しく、桁下のクリアランスを十分とった橋梁が望まれる。フトン籠工法も見受けられ、施工中の薄い断面の玉石コンクリート擁壁よりは有効だと話しておいた。ベシ・サハールは、ラムジン県の県庁所在地で、街は大きくホテルもピンからキリまでたくさんあるが、小綺麗な並を選ぶ。冷蔵庫には冷たいツボルクビールが待っていた。

10日 ベシ・サハール→クディ→ガディ (930m)

花谷が発熱。キッチンスタッフ1名付けて残留。内田、花谷と発病し、カトマンズでの疲れと風邪が完全に回復していないようだ。ドクターに診てもらい投薬、休養回復後に本隊を追ってもらうことになり、本人には焦りと心細い思いをさせたが、他に



出発式に臨む宮崎実行委員長とネパール警察庁幹部

## 2 登山報告

方法がない。クディから先は23年前、現役の時、高橋と歩いた道。4分の1世紀近く過ぎたのが夢のようだ。クディの吊橋を渡るとマルシャンディ・コーラもいよいよ峡谷となり、雲間にヒマールチュリが望める。7000mの標高差は素晴らしい、力がみなぎってくるのを感じる。

### 11日 ガディ→サンジェ (1095m)

内田回復後、ボテオラを出発し、ベシ・サハールの花谷と合流したことを電話連絡。花谷回復後、一緒に本隊を追うように指示。電話が使えるとは時代は変わった。

### 12日 サンジェ→タル (1650m)

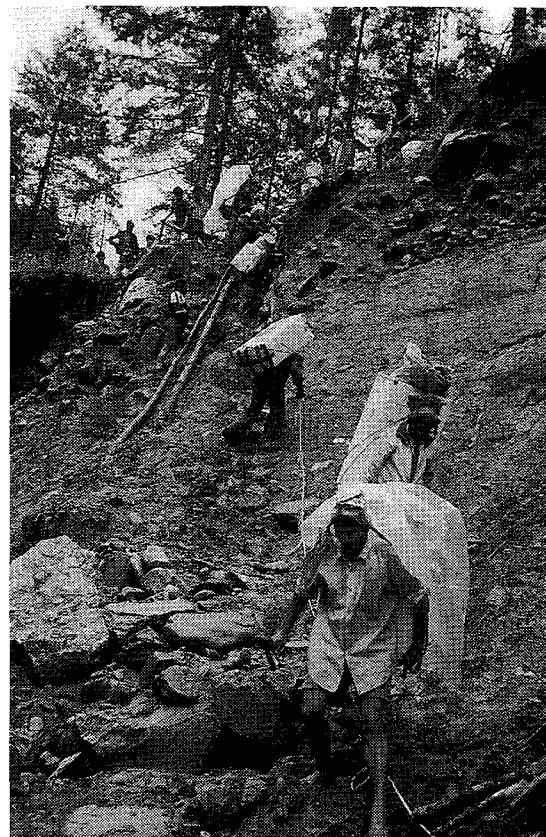
ナル・コーラの偵察のため、田辺、小林、アレ、ダンバルを先行させる。彼等はタルを経てダラパニまで。サンジェから先は、グレートヒマラヤを断ち切った屈曲部の深い大峡谷を歩く。タルは深い峡谷の中のオアシスのような開けた所。昔は湖だったのかもしれない。岸辺の草原に馬が遊んでいるのは、23年前と同じ。あの時は、左岸の岩小舎に仮寝したのだが、現在は街道筋の宿が何軒もある。夕刻、無線によりベシ・サハールの内田と連絡がつく。内田は13日、本隊を追い、花谷にはオンディを付き添わせ、療養に努める。必要経費と本隊の様子、指示等の手紙をシヴァコティ隊員に託して、内田と合流するべくタルに残留させる。

### 13日 タル→ダラパニ (1920m)

うろこ雲あらわれ、秋の空を感じる。ダラパニの宿の電話で花谷回復、今度はオンディが発病したことを知る。内田はサンジェ着。

### 14日 ダラパニ→バガルチャップ→コト (2590m)

一部ポーターの入替えを行う。今回はドゥード・コーラのティリジエ村からの応援体制がとれて、休むことなくキャラバンを進めることができる。途中のバガルチャップは、昨年11月の土石流で家屋、耕地の被災著しい。今後の防災に前途多難。偵察隊の田辺達と合流。入口付近の崩壊地は固定ロープのルート工作が必要だが、何とかナル・コーラの道が通れることが判りほっとした。偵察隊は朝から宿のツルハシ、斧、ククリ等を借りて、崩壊地の道造りや仮橋設置に従事。一部隊員の不調に加えて、カン・ラ越えとなると日数的にも金銭的にもちょっと厳しいことになると、頭の痛い毎日だった。徒歩20分先のチャーメはマナン県の県庁所在地、ラナ氏と一緒に県警本部に挨拶に出向く。チャーメの電話局でダラパニ到着の内田と交信して、元気な様子に安心する。花谷と交信を試みるも、宿の主人によると、花谷は病気のオンディとともに、今朝、ベシ・サハールの宿を発ったとのことで、その先は行方不明。こちらに向かったのか、カトマンズに帰ったのか、次々と情報が変化し、対応に苦慮する。連絡と花谷の動向把握のため、メイルランナーのアルジュンをタルへ走らせる。宿では相部屋のラナ氏が「リーダーは頭が痛くなりますね」と慰めてくれる。



►コトから崩壊した河原を下り、ナル・コーラへ降りる

▼ナル・コーラの崩壊した川岸をへつって進むキャラバン



## 2 登山報告

「駄なき物を思はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし」

(万葉集 卷三一三三八 大伴旅人)

こここの宿にはうまいアップルロキシーがある。

15日 コト→チャチャ (2825m)

夜半からの強い雨は朝になんでも止まず、出発を一時見合わせる。その間、隊員達はコトのチェックポストの警官の助けも借りて、昨日に引き続き崩壊地に固定ロープを張り、丸太で道造り。ナル・コーラ下部は深い廊下帯で、峡谷、入口は岩盤崩壊と地滑りにより道が途絶えており、落石の危険もあって、緊張させられた。最近、入口部の崩壊で地元の人が数人遭難したため、ここで強行すればポーターの大半が引上げともなり、慎重な対応が必要であったが、雨も上がり何とか全ポーターが出発できた。本日からテント生活が始まったが、やはり街道筋の旅籠泊まりと違って快適だ。警察無線が活躍し、下方の様子が判る。内田はコトに到着するも、ポーターがナル・コーラ入りを承諾せず、止むなく本日はコト止まり。内田のためにガレをコトに向かわせる。

16日 チャチャ→メタ (3500m)

深い峡谷を歩き、開けたカルカに到着。高山植物が咲き、古い砦跡のような石積みの廃屋が残る美しい所。北は荒涼としたチベット的世界が広がり、南には一瞬アンナブルナⅡ峰の一角が真白く望めた。先輩達の夢の跡。本日より露営地到着後、付近の斜面で高所順応のために標高差200m位の上下運動を始める。内田が元気に合流。にぎやかになった。

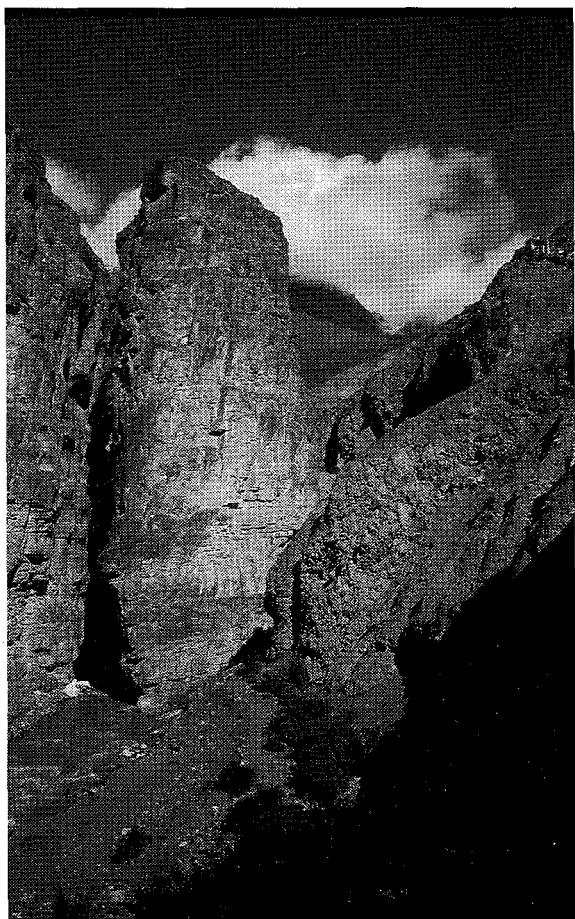
17日 メタ→キャン (3800m)

チェックポストとの無線連絡で花谷の行動が判明。今朝7時ダラパニ通過を知って、ほっとした。ラナ氏と協議し、花谷の応援のため薬、設営具等を持たせて、ツムルクと人一倍強くて信頼のおけるポーターのゴパールの両名をコトに向かわせる。また、ベースキャンプ位置選定のため、偵察隊として田辺、アレ、ドゥルガ、ペンバ、ポーター1名が先行し、プー着。夕刻の交信で花谷、オンディ、シヴァコティ一行は無事コト到着を知る。

18日 キャン→プー・ガオン (4000m)

夜半激しく雨が降ったが、一夜明けると快晴。背後にアンナブルナⅡ峰の全貌が現われる。8000m近いジャイアンツに声も出ない。頂稜から雪煙たなびき、風の強さと遙かな高みを想う。プーまでの道程、あの尾根の端を回って、あの峡谷の先にどんな世界が広がるのか、わくわくするような道であった。深い峡谷の周囲は凄まじい大岩壁と荒涼とした斜面が続き、その上を鷹が上昇気流にのって滑空している。段丘にわずかに植生が見られ、灌木に赤く実が色づき、秋が来たことを感じる。プーの村では、麦の刈入れの真っ最中。ポーター達は隊荷を置くと、早速刈入れの手伝いをして、今

►ナル・コーラ上流、プー・ガオン入り口の大岩峰



▼馬を連れてベースキャンプへ来た  
プー・ガオンの女性ポーター



ポーター達の昼食

## 2 登山報告

宵、一宿一飯に与るのだろうか、村人と一緒に働いている。集落は右岸の岬のように張り出した尾根の末端部、崖の上にあり、城塞のような特異な風景に驚嘆する。村の対岸の高台にあるタシ・ゴンパに全員で参拝する。ニンマ派の僧院で、僧侶の一家はギャジカン遠征を懐かしがり歓迎してくれ、お守りまでいただいた。僧院内を案内してくれたが、一室にはたくさんの種類の薬草が保管されていた。その後、迷路のようなプーの村を散策する。チェックポストがある。偵察隊はプーよりベースキャンプ予定地を往復。その結果、当初予定地はかなり遠く、標高も5500m以上ため、ポーターによる荷上げは不可。標高5200mの位置にベースキャンプを置き、プーより2日かけて隊荷を運ぶことにする。日本側隊員の大半はプー村より、ゆっくりと順応活動を行い、ベースキャンプ入りを図る事とする。



◀ベースキャンプ開きの祈祷に来たプー・ガオン村  
タシ・ゴンパ（寺）の僧と弟（左）

▼プー・ガオン村の石造りのチベット風住居



19日 プー・ガオン→パングリ・カルカ (4500m)

1983年秋期に弘前大隊により南東面のドゥード・コーラ側から初登頂されたヒムルンヒマール主峰ネムジュン (7139m) と、ギャジカンより流れ出るパングリ氷河末端部を横断し、左岸にある標高4500mのパングリ・カルカ着。野村、渡部、金子、小林の4名は昼食後、プーのキャンプに戻る。

20日 パングリ・カルカ→ベースキャンプ (5200m)

パングリ・カルカから橋を右岸に渡り、本流のサイドモレーン跡や側谷を辿ってプー・コーラ左俣右岸の台地にベースキャンプ建設。隊荷はベースキャンプに集結した。3人のナイケのマネージメントは素晴らしい、ベースキャンプでポーターに賃金の支払を済ませると、キャラバンは無事終了した。澤田、ラナ隊長、リエゾンオフィサーのジャヤ氏、無線技師のパウダル氏、ドクターのシュレスタ氏の5名はパングリ・カルカに戻る。プーの野村以下4名とラジュマン、一部キッチンスタッフはパングリ・カルカに移動。花谷、オンディはプーから順応のためパングリ・カルカ往復に上がってきて、懐かしい再会を喜ぶ。パングリ・カルカは風が強く、テントの中は埃と砂だらけ。夜はテントの周りを犬が吠えまくって散々である。

21日 ベースキャンプの整備。

パングリ・カルカ組はベースキャンプ往復。左手の急峻な斜面上部をトラバースしている、野生のナウル (バーラル、ブルーシープ又はヒマラヤアオヒツジ) の群れに何度か出会った。ベースキャンプ付近でも時々見られた。花谷、オンディついに合流する。初めてのヒマラヤで発病し、ネパール側スタッフとの一人旅は随分心細い思いをしたであろうが、何だか一回りたくましくなったようにも見える。それ故か、マッスルブレイン花谷はネパール食に異常に適応しており驚く。

22日 昨日同様、パングリ・カルカ組はベースキャンプ往復。タシ・ゴンパの僧侶 (ロプサン・ドルジェ師) にベースキャンプに来てもらい、ラマ教によるブジャを行った。たくさんのタルチョウを張り巡らし、日・ネ両国旗と両山岳会旗のポールの基部に石を積んで祭壇を設けた。線香とシュッパ (高山性灌木の香木) の煙の中、読経で登山の安全を祈った。

23日 ベースキャンプ→前進ベースキャンプ (5500m) →ベースキャンプ (B C)

田辺、ヨシ、シヴァコティ、アレ、ヌル、フル、ドゥルガ、ダンバル、ツルで前進ベースキャンプ (A B C) までの偵察と荷上げ。パングリ・カルカ組はレスト。

24日 内田、金子、ヨシ、シヴァコティ、アレ、ヌル、フル、ドゥルガ、ダンバル、ツルでA B Cへ荷上げ。田辺はB Cレスト。パングリ・カルカ組はB C往復。

25日 田辺、内田、ヨシ、シヴァコティ、アレ、ヌル、フル、ドゥルガ、ダンバル、ツル、アルジュンでA B Cへ荷上げ。パングリ・カルカを引き払い、全員が元気

## 2 登山報告

にB Cに集結した。夕食前に日・ネ全員でミーティングを開き、田辺よりタクティクスの説明と各係からの報告をして、明日からの登山活動に備えた。

### 2. 登山活動

ベースキャンプ対岸真近に北大隊により初登頂されたヒムルンヒマールがそびえ、ベースキャンプ上部 (5400m) のモレーンの頂に上がって、初めて秀麗なラトナチュリの全容が望まれた。我々の背後遙か南にはグレートヒマラヤの主脈アンナプルナが連なり、前方北は中国国境であるチベットとの分水嶺山脈が真近に横たわっている。ケニス・メイスン博士著『Abode of Snow』の日本語版序文に「そこでは、ガンジス河が、蓮の花のか細い糸のように、ヴィシヌの足元から流れ落ちている。………」とあるが、ここは正にそのとおりの地であった。

ラトナチュリに関しては、技術的には難しくなく、高所順応が鍵だと思われた。左俣氷河右岸のモレーンと側谷を辿り、ラトナチュリ西峰の南稜鞍部からの支氷河出合 (5500m) の地点を前進ベースキャンプとした。既に田辺、ネパール側隊員達によつて、23日から25日までに前進ベースキャンプ建設と大半の荷上げが完了している。日・ネ隊員、高所シェルパ計16名をA、B、Cの3パーティに分け、ルート工作、荷上げと順応活動を各々協力しあつて行動することとした。

Aパーティ：L・田辺、内田、アレ、ヌル、ドゥルガ、ツル

Bパーティ：L・澤田、金子、小林、ヨシ、フル

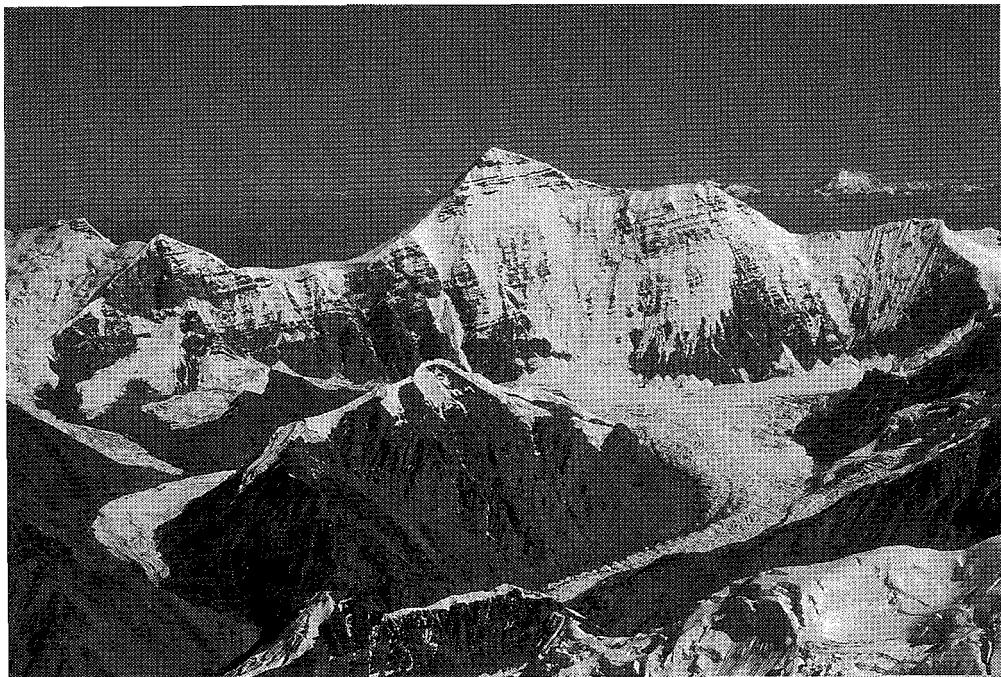
Cパーティ：L・渡部、野村、花谷、シヴァコティ、ダンバル。(L：リーダー)

9月26日 Aパーティ：高所キャンプ1 (C 1) のルート偵察。B、Cパーティは前進ベースキャンプ (A B C) への順応活動。

27日より29日まで降雪が続いた。ラジオのニュースでは「カトマンズでも27mmの降雨」と伝えており、全国的に悪天のようだ。この間もB CからA B Cへの順応活動を続けたが、上部 (5400m) のモレーンの頂付近では化石がたくさん見つかり、順応活動を兼ねた化石採集 (宝さがし?) が盛んで、異常に熱心な隊員もいる。

29日 雪降りの日曜日の正しい過ごし方として、カセットテープでクラシックを聴きながら、渡部と澤田はプラパールで百葉箱を作り、なかなかの出来栄えと自画自賛する。B Cでキッチンボーイのベンバ・ツエリンが右半身不随の症状を訴え、脳血栓の疑いがあることから大事をとってヘリコプターの救助要請をした。取り敢えず酸素吸入をさせ、暖かくして安静に努めた。悪天のため10月1日に飛来し搬送した。大事には至らなかったようで、我々がカトマンズに戻ったときには元気に出迎えてくれた。

30日 1回目のアタックを開始した。第1次アタック隊Aパーティは、西峰南稜鞍部の広い雪原のC 1予定地 (6000m) を経て南稜にルート工作後、A B C帰着。A B C～C 1



ギャジカン (7038m) より望むラトナチュリ (7035m) 南面、右手  
後方はトランシヒマラヤ (チベット) のルンポカンリ (7095m)

間の氷河上に、5ピッチ固定ロープを張る。B、CパーティはABC、C1への荷上げ。

10月1日 第1次アタック隊はC1建設後、昨日に引き続き南稜のルート工作。B、Cパーティは前日と同様。金子は足首捻挫のためBCで休養。

2日 第1次アタック隊は西峰 (6600m) に登頂。南稜は19ピッチの固定ロープを要した。西稜を主峰に向かって3ピッチ固定ロープを張って下り、高所キャンプ2 (C2) 予定地に達した後、C1帰着。支点はすべてスノーパーを使用。BパーティはABC入り。

3日 悪天のためアタックを中止し、C1よりBCに戻る。5日まで悪天が続いた。BパーティはC1往復。

4日 ABCで好天待ちを粘ったBパーティは、ついに諦め、ABCからBCに下山。

5日 BCでも大雪で、喜んだ内田が巨大な雪だるまを作った。夕食後、日・ネ歌舞合戦、ネパール側の圧倒的な勝利。

6日 やっと天候は回復するも、大雪の後なので大事をとって停滞する。

7日 前回のメンバーにより2回目のアタックを開始した。ABCを経てC1入り。Bパーティは、C1往復してABC入り。CパーティはABCの上部までBCから往復。

8日 C2建設 (6550m)。Bパーティは、C1入り。Cパーティは、C1往復してABC入り。

## 2 登山報告

9日 快晴ではあるが強風のため様子待ちをして、7時C2発。主峰との鞍部(6400m)までの降りは、急峻な箇所に3ピッチ固定ロープを張った。鞍部は広いプラトード、そこより主峰への登りは、硬くクラストした雪壁に固定ロープを延ばしていった。しかしながら、頂上直下100mの地点で内田隊員が不調を訴え、固定ロープが尽きたことから、ネパール側メンバーはスタカットによる登攀をきらって下山を主張し、13時20分、やむなく引き返した。内田、アレ、ヌルはC2泊。田辺、ツル、ドゥルガは一気にBCまで下山。BパーティはC1よりC2往復後、BCに下山。CパーティはABCよりC1の上部まで往復。

10日 C2の内田以下3名はBCに下山。Cパーティは、C1入り。

11日 CパーティはC1よりC2往復後、BCに下山。天候は6日以来晴天が続き、C2に於いて、鶴の渡りに遭遇した。次々と編隊を組んで、頭上の光輝く群青の空を飛翔する渡り鳥の姿に感激した。

3回目のアタックについては、残された登山可能日数も切迫し、失敗は許されない状況となった。このため、今まで3パーティに分けて各々行動していたメンバーを一部入れ替え、第1次アタック隊はL・田辺、アレ、ツルの3名にしほり、6名のサポートを配した。この6名のサポート要員のうち、澤田、ドゥルガの2名はC2から上部のサポートを担ってアタック隊と同行したが、特に問題が生じなかつたため、第1次アタック隊と一緒に登頂した。この間に他のメンバーもすべてC2まで達しており、すかさず2次、3次の波状攻撃をかける全員登頂の態勢を整えた。

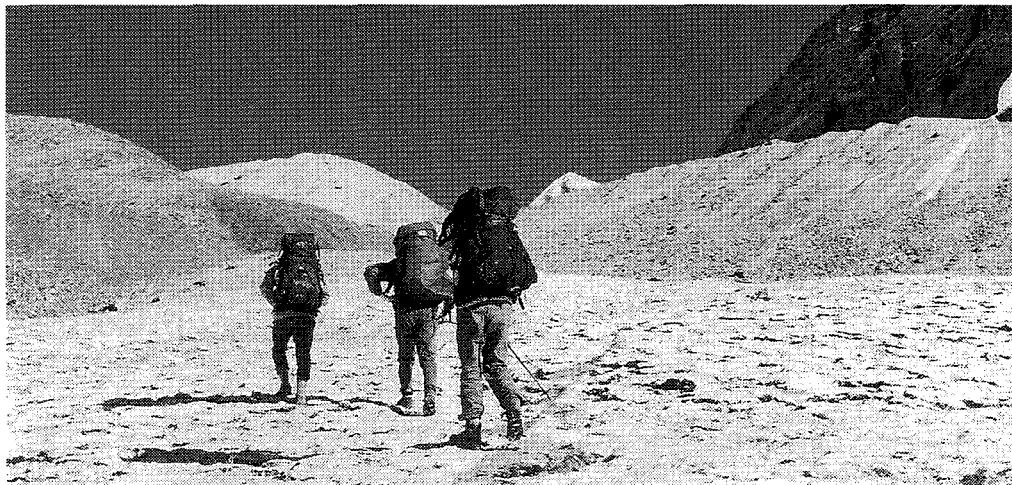
12日 第1次アタック隊とサポート隊、BCを出発しC1入り。

13日 同、C2入り。

14日 田辺、アレ、ツルと澤田、ドゥルガの5名が天候待ち後、午前7時、強風の中C2発。12時10分、初登頂に成功。前回引き返した地点から更に3ピッチ固定ロープを延ばすと(C2～頂上間、計18ピッチ)、そこは長い間憧れ続けてきた、遙かなる宝石の峰、ラトナチュリの頂であった。強風止まず地吹雪の中、15時30分、C2帰着。第2次アタック隊(L・渡部、野村、花谷、ジョシ、ヌル、フル)、BCを出発しC1入り。

15日 第1次アタック隊と澤田、ドゥルガはC2からBCに帰着。第2次アタック隊C2入り。

16日 第2次アタック隊登頂。この日は快晴で風も穏やかであり、遙か北にはトランシヒマラヤのルンポカシリが望まれ、南はプー・コーラの谷を隔ててヒムルンヒマール山群の四山と、その背後に一段と高くグレートヒマラヤがマナスルからアンナプルナ、ダウラギリまで遠く連なって聳えていた。第3次アタック隊(L・内田、金子、小林、シヴァコティ、ダンバル)、BCを出発しC1入り。



ベースキャンプから第三次登頂へ向かう小林、内田、金子

17日 第2次アタック隊C2からBCに帰着。ヌルはサポートのため、C2ステイ。  
第3次アタック隊C2入り。

18日 第3次アタック隊登頂。このことにより、16名全員登頂することができた。

19日 C2を撤収しBCに集結。

20日 C1及びABCの撤収と不要なロープ、食料、ゴミ等をBCへ荷降ろしをして登山活動を終了した。

### 3. 帰路

10月22日 BC撤収。高層を雲が速く流れて不安を感じる。プー・ガオンのヤクと馬（27頭）を主体にポーター15名で帰路のキャラバン開始。延々と半日近くの交渉の末、出発は午後4時近く。出発するやいなや、背の隊荷を散乱させてヤクが暴走し、つられて馬も狂走し、呆然となる。散乱した荷物を拾い集めながら、どうにか日暮れ前にパングリカルカ着。

23日 恐れていた悪天、降雪が始まり、難渋することとなる。雪化粧のプー着。不用の装備類と交換したチャンを痛飲する。焚火用のヤクの糞の何と高価なこと。おまけに「畑にキャンプすると土壤が固くなる」と言って場所代まで要求された。

24日 降雪の中、キャンまで。プーのポーター、ヤク使いには連日の交渉にほとほと手を焼く。ここでは警察という国家権力もまったく無力。積雪でカン・ラの峠越えは不可能となり、ホンデから飛行機でひとつ飛びの計画はご破算、往路下山となる。下流のナル・コーラは廊下帯の道のため駄獣は使えず、厳しい状況となるが、それでもこの頃流行った言葉「カン・ラの裁き」「何とかナル・ガオン」などと呑気なことを言っていた。

## 2 登山報告

25日 ひどい降雪で、ポーター、ヤク使いは動かず、やむなく停滞。食糧が乏しく、昼食は抜き。口に出るのは腹一杯のダルバートの話ばかり。こんな中で、ヘーゲルの『歴史哲学講義』を平然と読む隊員がいる。圧倒的な食欲を誇る一青少年は、何とプーのポーターから食糧を恵んでもらったとか、「プーに人質に出してやるから、文化人類学専攻なんだし越冬して調査しろ。大丈夫、生きていけるよ」等、残りの隊員はかまびすしい。

26日 今日も降雪。ストライキにより食料と燃料が切れ、隊荷は後発することとし、隊員の大半は個人装備を持って、コトに向かう。出発直後、ドクターのシュレスタ氏（警察病院医師）は雪道で転んで足首を複雑骨折。苦痛にうめくドクター自身の指示で降雪の中、ギプスで固定し、雪の中担いで下ろす。田辺を除く日本側隊員とナワン、オンディの9名は、口減らしのため、3日行程を1日でコトまで駆け下る。悪天の中、昼食なし、夜までかかってそれでも無事コトにたどり着く。ヘトヘトになりアタック以上に疲れた。隊荷は動きだし、ダラムサラまで。マルシャンディの街道筋までほとんど脱出行の有様となった。

27日 渡部は朝一番にチャーメの県警本部に出かけ、署長に事情を話し、レスキューヘリコプターの依頼と、未だにナル・コーラにいる本隊のラナ氏と無線連絡をお願いする。渡部は直接警察無線を使うことは出来ないが、無線技師の背後から勝手にしゃべることによって、ラナ氏と打合せることが出来た。こここの署長は、過去に慶応大のスリンギヒマール遠征隊のリエゾンオフィサーを務めた由、大変親切に対応して下さった。署長の話だと、プー・コーラ奥の国境（コンギュー・ラ？）を越境してきたチベット難民の保護で、チャーメの刑務所は満員とか。夕刻、ドクターは背負われて、コト着。隊荷の一部は相変わらずプーのポーターのストライキにあって山の中。ダン



チャーメ (2590m) からヘリコプターでカトマンズへ向かうシュレスタ医師

バル、ラジマンが付いてビバーク。

28日 ドクターはオンディに付き添われ、チャーメより救助要請したヘリコプターでカトマンズに搬送。残りの隊荷もすべてコトに到着。ポーターへの賃金の支払は、もめにもめたが、ここは既に常識の通用する街道筋、ヌルの奮闘もあって終了。

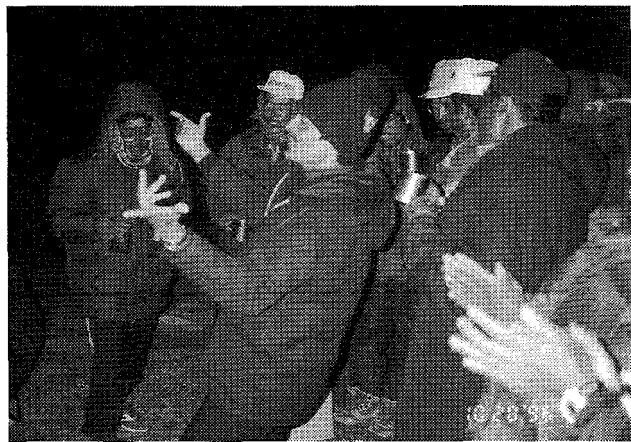
29日 ポーター替えをし、ロバ（25頭）によるキャラバンに再編成。うって変わった快適な旅を続けることになった。ダラパニ泊。

30日 ジャガット泊。夜はダンスショーをする地元の母親クラブから、道普請や学校整備のための寄付金を求められ快諾したが、ショーの最後はネパールポリス舞踏団に変身した。

31日 ガディ泊。往路と同じ宿の若主人（テジュ・グルン氏）は、ハルカ・グルン博士の甥。グルン博士の長兄の息子で、博士の父親が1955年に創設した小学校の教師をしている。1962年、パンジャブヒマラヤのインドラサンに初登頂した京大山岳部の宮木靖雅氏が遠征終了後ネパール入りし、当時外務省の研修生としてカトマンズ在住の神原達氏夫妻とグルン博士に同行し、「アルゲン」というグルン族の珍しい祭を見物するため、博士の故郷に出かけた記録（「京大山岳部 報告11」）を記憶していた。その事を話したら、宿の女将さんは覚えていて、びっくりしていた。翌日宿を辞するとき、彼はグルン博士著『Vignettes of Nepal』という本に記念の署名をして、プレゼントしてくれた。ネパール寸描とでもいうのであろうか、ナルやプーも記載されているが、経済地理学者である博士がネパール全土を歩いた各地の地誌で、興味深くありがたく頂戴した。

11月1日 ベシ・サハール着。キャラバン終了。街が大きく見える。

2日 これより、バス、トラックをチャーターし、7時間近くかかってデュムレ着。往路のコックローチホテルは敬遠して、国道反対側の小綺麗なホテルに泊。ホットシャワーが快適だ。スンタラが甘く、うまい。ビールを痛飲したいのだが、渡部はスピー



ベースキャンプ撤収前夜のキャンプ  
ファイアで踊るパウダル隊員

## 2 登山報告

チをネパール語でやるべく、リエゾンオフィサーのジャヤさんから指導を受けねばならず、我慢して明日のスピーチ作りに奮闘する。

3日 カトマンズ盆地の入口の峠、ナーグドゥンガでは音楽隊が演奏する中、警察学校長の出迎えを受ける。音楽隊を先導に市内パレードの後、マヘンドラ・ポリスクラブ講堂で歓迎会が開催された。入口では澤田の山の神が、チベッタンドレスを着て微笑んでいた。ラナ氏の遠征報告の後、渡部、野村、カレル警察庁副長官、バンタワ警察学校長、運動局長とスピーチが続いた。長官は海外主張中で未だ帰国されていない。宿泊先は全員の希望もあり、ターメルのホテル・テンキに格上げ。マネージャーの澤田は「金がない」と言いながら渋々承諾。バスタブにお湯、ファクシミリもあり、金子、渡部、澤田には早速職場から帰国の催促が届く。

隊荷の整理梱包に御礼と報告、礼状出し、支払い、挨拶回り、ドクターのお見舞いとあわただしい日々の中、7日、ホテルシャンカールで祝賀ディナーパーティを開催したところ、内務大臣、警察庁長官はじめ約150名の方々がご出席下さり、盛会であった。すべての行事を終え、9日、野村、澤田、小林、10日、金子、渡部、内田、花谷、13日、入国時通関の際のデポジットマネー受け取りのため残った田辺をしんがりに、各々帰国の途についた。

### ＜略語、他＞

B C : ベースキャンプ (5200m)

A B C : 前進ベースキャンプ (5500m)

C 1 : 高所キャンプ1 (6000m)

C 2 : 高所キャンプ2 (6550m)

L : パーティリーダー

コーラ : ネパール語で「川」

カルカ : ネパール語で「放牧地、放牧小屋」

### ＜外部報告＞

1)『山と渓谷』 1997年2月号

2)『岳人』 1997年2月号

3) 日山協第35回海外登山技術研究会資料集 (1997)

4) 日本山岳会「山岳」第九十二号 (1997)

5) The Himalayan Club 「The Himalayan Journal」(投稿中)



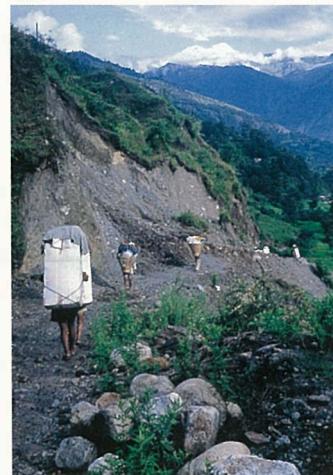
カングルー(6981m)北西面—ナル・コーラ左岸のチャコの廃村付近より [Mt. Kang Guru]



バングリ氷河末端からのネムジュン(7140m) [Mt. Nemjung]



出発式での見送り風景  
(ネパールのポリス・アカデミーにて)  
[Send-off ceremony]



雨期のキャラバン  
[Caravan]



ソバ畠(コトにて)  
[Buckwheat at Koro]



ウスバシロチョウ(ベースキャンプ付  
近にて) [Butterfly at B.C.]



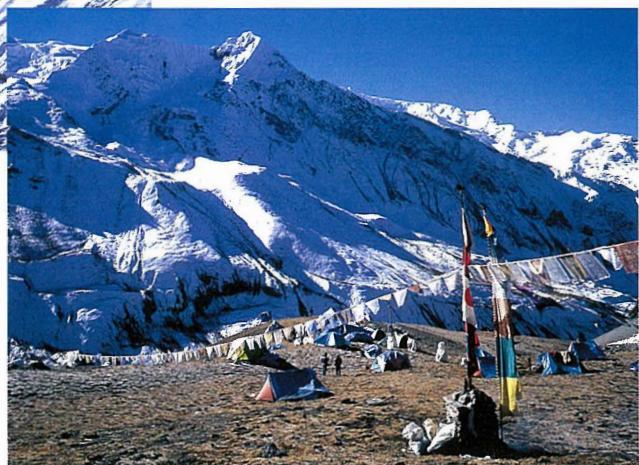
ウスユキソウ(タルにて)  
[Edelweiss at Tall]



ベースキャンプ上部サイドモレーンから望むラトナチュリ(7035m)と西峰(6600m、写真左側のピーク)  
[Mt. Ratna Chuli and west peak]



ベースキャンプから望むヒムルンヒマール(7126m)  
[Mt. Himglung Himal]



ベースキャンプ(5200m)とギャジカン(7038m)  
[Base camp and Mt. Gyaji Kang]



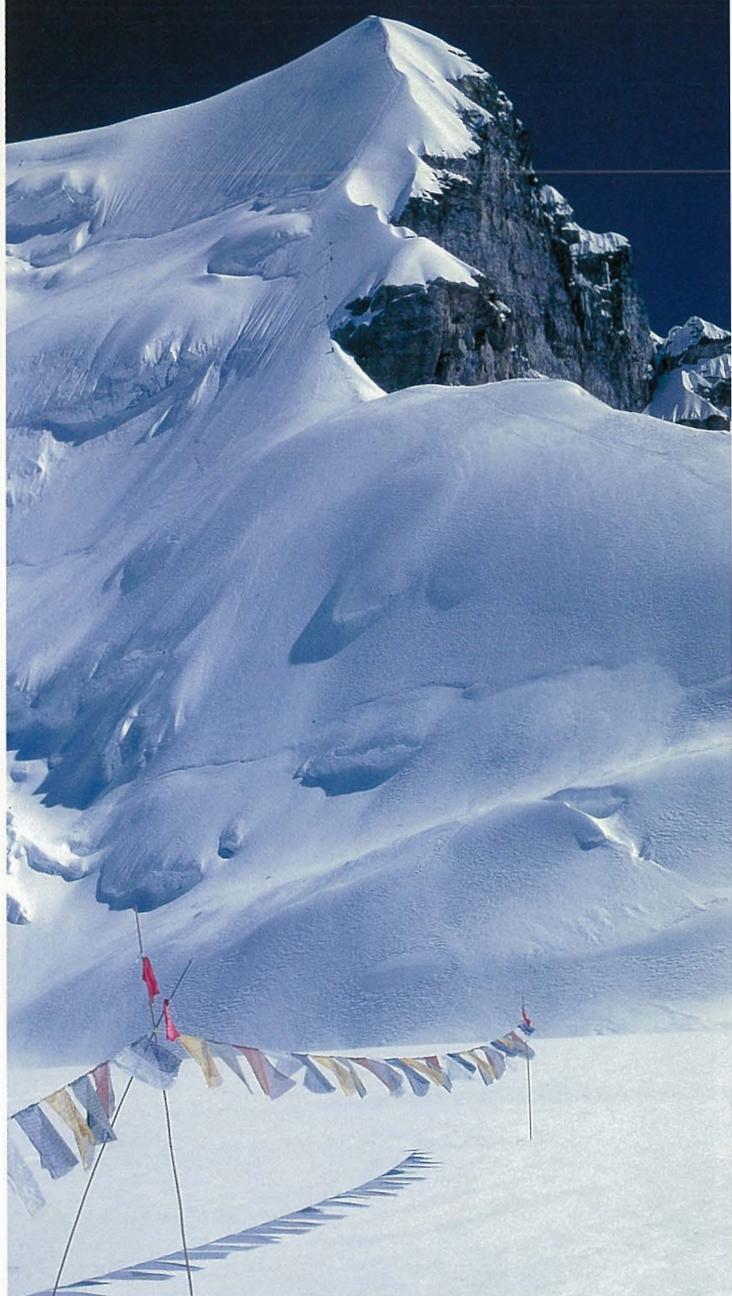
西峰へのルート工作  
[Climbing to the west peak]



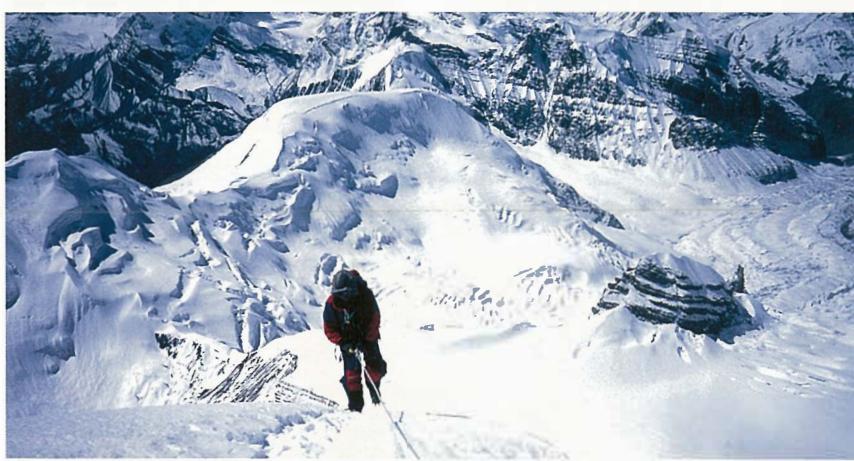
頂上直下の登攀  
[Climbing to the top]



荷揚げを終えてC1で休息する隊員  
[Rest at C1]



C1から望むラトナチュリ西峰(6600m)と登攀中の5名の隊員 [The west peak]



C2への急登 [Climbing to C2]



C2(6550m)とラトナチュリ本峰(7035m)  
[C2 and top of Mt. Ratna Chuli]



第一次登頂隊(左よりアレ、田辺、ドゥルガ、ツル)



第一次登頂隊(左よりアレ、澤田)



第二次登頂隊(左より渡部、ジョシ、ヌル、フル、野村)



第二次登頂隊(左よりジョシ、花谷、フル)



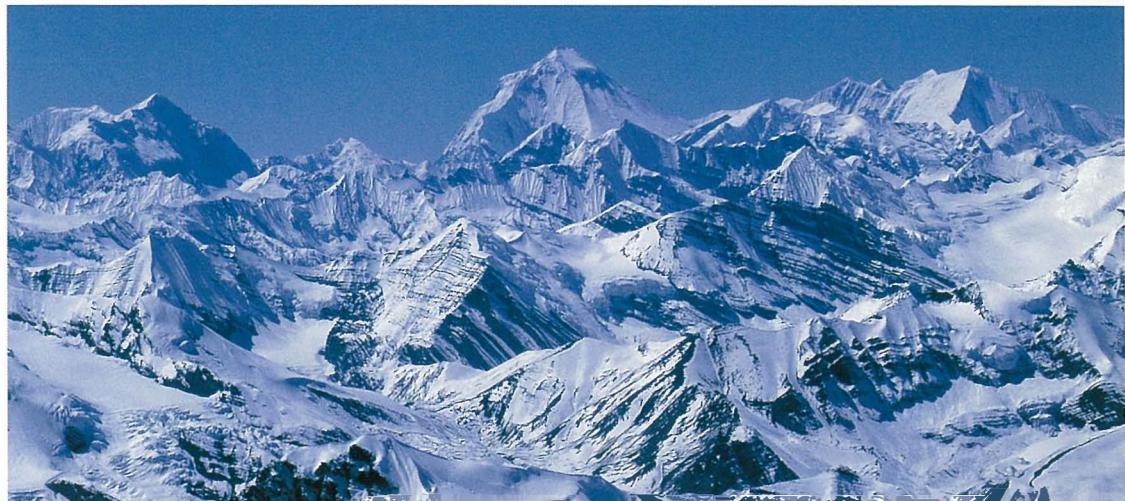
第三次登頂隊(左よりシバコティ、ダンバル、小林、内田)



第三次登頂隊(左より金子、シバコティ、ダンバル、小林)



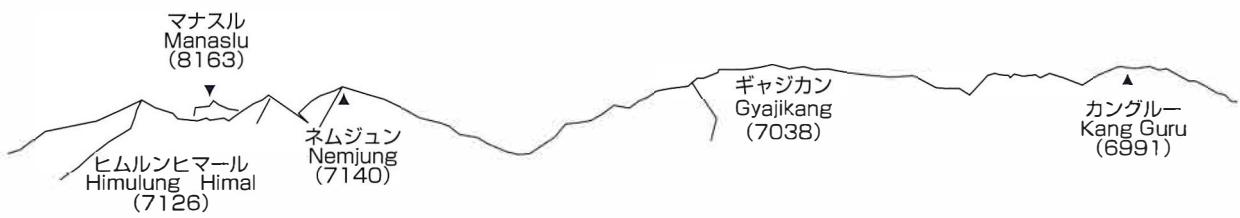
ラトナチュリ西峰(6600m)からー左よりヒムルンヒマール(7126m)、マナスル(8163m)、無名峰(7098m)、ネムジュン(7140m) [Mt. Himlung Himal, Mt. Manaslu, Unnamed peak, Mt. Nemjung]

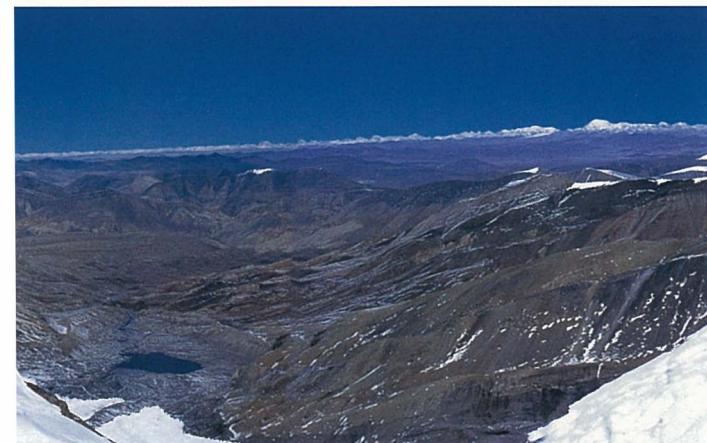
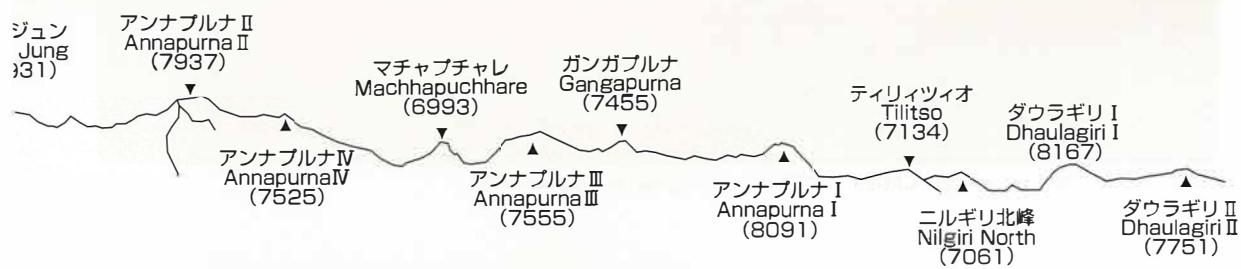


ラトナチュリ西峰(6600m)からーニルギリ北峰(7061m)、ダウラギリ I 峰(8167m)、ダウラギリ II 峰(7751m) [Mt. Nil Giri North, Mt. Dhaulagili I, Mt. Dhaulagili II]



ラトナチュリ西峰(6600m)からーチベット高原とトランシヒマラヤ・ルンポカンリ(7095m) [Tibet plateau, Trans Himalaya and Mt. Loinbo Kangri]





ラトナチュリ西峰(6600m)から東～南～西方面の展望(ネパール側)  
Panorama of Nepal Himalaya from the Ratna Chuli West Peak

チベット高原  
Tibet Plateau

ルンポカンリ  
Loinbo Kangri  
(7095)

ラトナチュリ西峰(6600m)から西～北方面の展望(ネパール～チベット側)  
Panorama of Nepal Himalaya and Tibet Plateau from the Ratna Chuli West Peak



C2(6550m)上空をインドに向けて飛翔するアネハヅル [Flying crane to India above C2]



すべての登攀を終了し、ベースキャンプを撤収した遠征隊員(10月22日) [Expedition members at Base camp]

## 涉 外

### 渡 部 光 則

許可申請、合同遠征に関する交渉等の涉外は、実行委員会報告に委ね、本稿では隊のネパール滞在中に限って報告する。

#### 1. 現地エージェントについて

今回は合同隊であり、相手先のネパール警察登山探検財団(N P M A F)と取り交わした議定書に基づき、現地エージェント業務はN P M A Fが行った。即ち通関業務、高所シェルパ等現地スタッフ及びポーター並びに輸送車輌等の手配、ネパール側隊員、スタッフ等の保険、あらかじめリストを提出して依頼をしておいた装備類、ガスボンベ等の購入である。また、隊到着後の装備、食糧の購入手配と、宿泊先のホテルの交渉を依頼した。こちらの希望どおり進めてくれ、満足している。

実行委員会あて報告のファクシミリ転送、及び信濃毎日新聞社あてフィルムのD H L送付、各隊員の郵便物の引き受けに関しては、コスモ・トレックにお願いし、帰国前に実費清算させていただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

#### 2. カトマンズにて(出発時)

当初計画では、後発の渡部、澤田を除く本隊6名の先発予定であったが、各自の都合から4名となり、先発の負担が大きくなってしまった。特に合同隊のような場合、総隊長か隊長のどちらか1人は先発したほうが、挨拶等の面からも望ましく、以後の活動がスムーズに行われると思う。ネパール警察幹部への訪問は、宮崎実行委員長がネパールに出張中であり、後発隊到着後一緒に出かけた。お世話になった方々への挨拶、ブリーフィング等は野村、渡部であった。日本と同様に訪問は、アポイントメントを取る必要があり、時間がかかる。雨期の最中、スーツを着て一日中タクシーを使い、街中を走り回るのは、気ばかりあせって疲れるが、何とか出発までの短期間に終えることができた。ネ側隊員、スタッフの装備代、日給等、渡部がラナ氏と協議し決定した。こちらの懐具合を理解してくれたのか、まずまずの線で妥結した。

### 3. キャラバン、登山中

遠征期間中は必要に応じて、経験豊富な田辺の考えを基に、日・ネ隊員全員でミーティングをもち意思の疎通を図った。今回の日本人隊員はある程度英会話ができ、不自由することはなかったが、一部ネ側隊員に英語がしゃべれない者がいて、ベースキャンプより上では、渡部、田辺がいない場合、日本側隊員は少々不自由した。ある程度の簡単なネパール語会話は日本で勉強したほうが良い。渡部は、ラナ氏との日常会話はネパール語で可能であり、上部キャンプに上がっていた際も、毎日トランシーバーで報告しあっていたので、お互い隊長どうしの意思疎通は十分に為されていたと考える。往路のキャラバンでは、日本側隊員2名が途中で発病し、本隊から遅れた。各地の警察無線と電話をフルに活用して情報収集に努め、連絡、サポートにスタッフを派遣し、出来うる限りの対策を施した。往路のポーターに関しては、3人の優れたナイケにより、問題となるようなトラブルはなかった。

ベースキャンプではキッチンスタッフのベンバシェルパが右半身不隨を訴え、その処置に関して日本側は今後の万一の後遺症を心配し、ヘリコプターでカトマンズへ搬送する事を主張した。

しかし、ネパール側隊長ラナ氏の意見は、ベースキャンプで養生すれば大丈夫であるとして意見の食い違いを見た。いろいろ協議したが平行線のまま結論が出ず、議定書の覚え書きに則して総隊長の野村氏の決断によりヘリコプターで搬送する事になった。

帰路のポータートラブルに関しては、豊かな街道筋から数日奥に入っているだけなのに、トレッキングに開放されていないことからくるマルシャンディ筋との著しい経済格差や差別を考えれば、我々遠征隊は彼等にとって千載一遇のチャンスであったろう。このような特殊性を考えても、ひどく消耗させられたが、我々日本側には交渉の術もなく、ネパール側に任せるよりほかはなかった。

ドクターの骨折事故に対しては、地元県警本部にヘリコプターの要請等協力を求めたが、同じ警察メンバーということもあって、大変、親切に対応して下さった。

### 4. カトマンズにて(帰着後)

帰路のキャラバンが遅れたため、カトマンズでの仕事は多忙を極めた。隊荷の整理、梱包と並行して、各関係機関等への挨拶、連絡、ディ・ブリーフィング、祝賀パーティの準備と実行、ご支援下さった方々への礼状作成と投函、各種請求元への支払い、ネパール側隊員とスタッフへの給与とボーナスの支払い、日・ネ遠征隊員のみの打ち上げ、ドクターのお見舞いと、全員協力しあって短期間で終えることが出来た。祝賀

パーティについては、大津氏にいろいろお手伝いをしていただいたが、最終的に会場をホテルシャンカールに決定した。英文招待状の印刷依頼、ネパール人及び報道機関100名、在ネパール日本人50名への配布については、ネパール警察と日本人会、コスモ・トレックに協力して頂いた。心より御礼申し上げる。旧ラナ家の宮殿を改造した、格調高い古くからのホテルシャンカールのパーティ会場は豪華で、多数の方々が御出席下さり、成功したと思う。アルコール類の持ち込みを交渉したところ認めてくれ、料理も大変美味であった。このようなパーティのホスト役を務めるのは、慣れておらず難しいが、若い隊員たちには、パーティ前に腹一杯夕食を食べさせ、パーティでは一人ずつ分かれて散らばるように指示した。挨拶は簡単にし、日・ネお互いの隊員紹介にとどめた。下山に合わせてカトマンズに来られた澤田夫人が盛装して、唯一人、我々のパーティのホスティス役を務めてくれた事に感謝いたします。

## 5. 蛇足的あとがき

松本における出発前の隊荷梱包作業のミーティングで私は隊の行動規範として以下の如くありたいと話した。

即ち「スマートで目先が利いて几帳面」をモットーに行動したいと。

この後に、「負けじ魂、これぞ船乗り」と繰り返し、船乗りの精神になるのだろうが、



ネパール警察学校パンタワ校長に挨拶する宮崎実行委員長と野村総隊長

Mr.R.Bantwa (D.I.G of Nepal Police), Mr.T.Miyazaki (Chairman of Shinshu univ. Himalyan Committee) and Mr.M.Nomura (Genral Leader of the Expedition party)

## 2 登山報告

前半部は外国に出かける遠征隊員の心得として必要と考えた。

今回の遠征は、1994年のギャジカン遠征の続きであり、ネパール側隊員とは気心も知れどおり大変友好的であった。

彼らは現地での準備、キャラバン、登山と好意的に接してくれたが、礼を失しないよう配慮する事も必要と考える。

私的な旅ならば、どんなに自由に振る舞おうと個人の勝手だが、一国の公的機関との合同ならば相手側の立場を理解する必要があろう。

服装にしても、いくら準備中とはいえ、警察学校でのショーツに素足のサンダル履きは反省すべきであろう。

少なくとも彼の国では、外国まで登山に出かけるような人間が、ショーツにむき出しのすねで外出するような習慣はない。

出かける国の文化や習慣に対して謙虚でありたいと思う。

## タクティクス

田辺 治

### 1. 計画段階

今回のラトナチュリ登山隊は、ネパール隊員が毎年ヒマラヤ登山の経験がある者が多い反面、日本メンバーは年齢構成が19歳から55歳におよび、ヒマラヤ登山の経験者も少なく総合的にみて強力な隊とは言えなかった。

そして、より多くの隊員の登頂をめざすため、オーソドックスな極地法のタクティクスをとることにした。

ルート工作は、1パーティにしほり、大多数のメンバーは高所順応と荷上げのみに終始することと、全員登頂を絶対的な目標としないため、登頂できない隊員もあり得る事を全員で意思統一した。

ルートはギャジカンからの写真資料により、西峰経由とした。この一帯の精密な地図が入手できなかったため、ラフなトレッキングマップから推察して、ベースキャンプ(B C) 5000m、高所キャンプ1(C 1) 5600m、高所キャンプ2(C 2) 6300m(西峰頂上)、高所キャンプ3(C 3) 6400m(主峰登り口)とした。

しかし実際は大幅に異なっていたため、現地でキャンプ展開を考え直すことになった。未踏峰の登山では、ある程度やむを得ないことであろう。

### 2. 実施段階

#### 1) 高所順応

B Cの標高が5200mと高かったため、9月20日のB C建設には、ネパール側隊員と田辺、内田のみが同行し、他のメンバーは標高4000mのプー・ガオンと、4600mのパング・リカルカに高所順応用キャンプを設けて順化運動を行った。全員がB Cに集結したのは、9月25日となったが、これにより適切な初期高所順応が得られた。

ただ、内田にはAパーティの他の隊員(田辺、アレ、ツル、ドルガ、ヌル)が毎年高所登山を行っている者ばかりだったため、負担が大きく、苦労させることになってしまった。

#### 2) キャンプ展開

計画段階では、前進キャンプを3つ出す予定であったが、現地の状況により仮キャ

## 2 登山報告

ンプとしてA B Cを5500mに作り、西峰の登り口6000mにC 1、西峰(6600m)を越えて主峰側に少し下った6550mにC 2を建設した。C 2よりアタックを行ったが、プラトーへ下って、主峰に登り返すため、やや距離が長くなかった。

### 3) 1回目のアタック失敗について

A B Cより山頂まで、標高差が1500mしかないことと、技術的な問題がないため、1次アタック隊はルート工作を含め、5日で登れると考えた。そして、10月2日、C 2までのルート工作を終え、4日に1次アタックをかける予定であったが、3日に悪天がきたため、B Cへ撤退した。この段階では、まだアタック隊員の順応が充分ではなかったため、仮に晴天であったとしても、一部の隊員によるアタックになっていたと思われる。

### 4) 2回目のアタック失敗について

10月9日に、Aパーティ 6名にて、2回目のアタックをかけたが、山頂下100mの地点で、内田が不調を訴え、ネパール隊員も、フィックスロープ不足を理由に下山を主張した。田辺、ツルの2名だけによる登頂が考えられたが、ネパール側隊員(アレ)のいない初登頂は無意味であるとして引き返すことにした。この失敗には多くの原因がひそんでいる。

まず、内田の高所順応について、10月2日にC 2までルート工作した際、彼だけが不調のため、途中で引き返していた。そのためアタック前夜の10月8日は、初めての高度で泊ることになり、負担を強いることになってしまった。

次にフィックスロープの運用について、以下のような事情があった。まず、10月2日のC 2までのルート工作時、後続するネパール側隊員に、途中にデポしてある食料、装備の荷上げを依頼した。

しかし、実際には、荷上げしてくれなかつたため、10月8日のC 2への移動の荷物が膨大になった。そしてその日ことともあろうにネパール側隊員が、C 2手前でアタック用のEPIガスを落下させてしまい、ひとつ残らず失ってしまったのである。

EPIガスなしに翌日のアタックは不可能だ。この時点で田辺はアタックを諦め、C 1にとって返してEPIガスを運び上げた。翌10月9日、田辺の疲労がある程度回復したため、アタックに同行したが、フィックスロープの運用については、すべてネパール側にまかせ、後ろからただついていくだけであった。その結果、9本用意したフィックスロープのうち、3本をプラトーへの下降で消費してしまい、また本峰への登りにも、わざわざ急なルートをとったため、フィックスロープの不足をまねくことになった。

日本側より、フィックスロープの運用について質問すると、「足りなくなったら、スタカットクライミングで登るから大丈夫」とのことであったが、実際には登高を拒否



ナル・コーラ峡谷にて、左よりジョン、金子、田辺、渡部、澤田

されてしまった。また、10月8日、田辺がC1まで引き返している間、ネパール側隊員にC2から先、プラトーへの偵察を依頼したが、これもやってはもらえなかった。これらの情況について、田辺がもっと、強力なリーダーシップを發揮してアタック隊を引っ張っていれば、また違った結果が出ただろうと悔やまれる。

##### 5) 3回目のアタックについて

もはや失敗は許されないため、1次アタックは、田辺、アレ、ツルの3名にしぼった。

そしてフィックスロープの荷上げのため、BCからC1まで小林とヨシもサポートしてもらい、C1からC2まで、金子とフルにサポートしてもらった。また、澤田とドゥルガには、C2から上部のサポートをお願いしたが、特にトラブルがなかったため、1次アタック隊と同時に登頂できた。

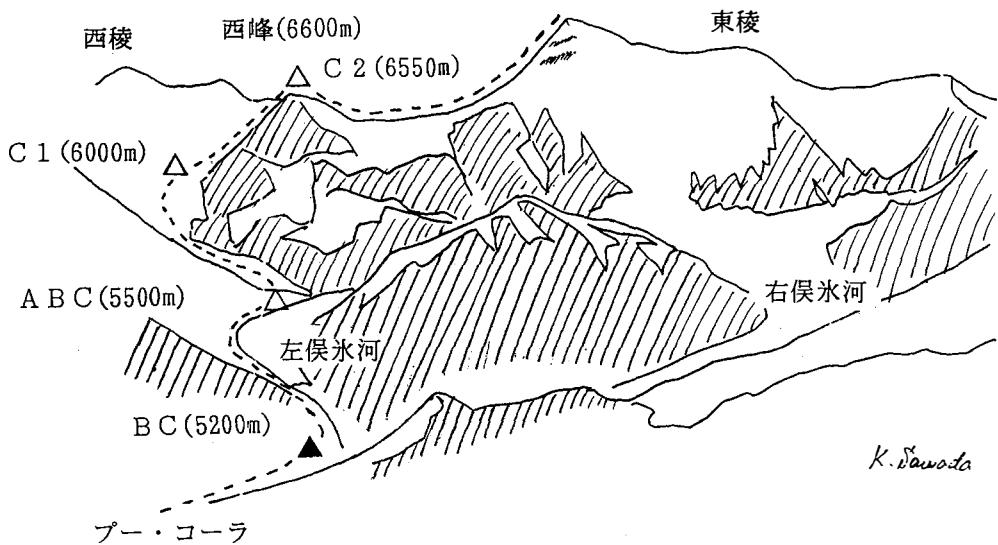
また、これによって、山頂まで、フィックスロープのベタ張り状態が完成し、すかさず2次3次の波状攻撃をかけて、全員登頂を果たせた。このタクティクスでは隊員に危機感を持たせ、特にサポート隊に負担がかかるものであったが、かえって結束力が強くなり、良い結果を生んだと思う。みなさん、御苦労様でした。

### 3. 反省

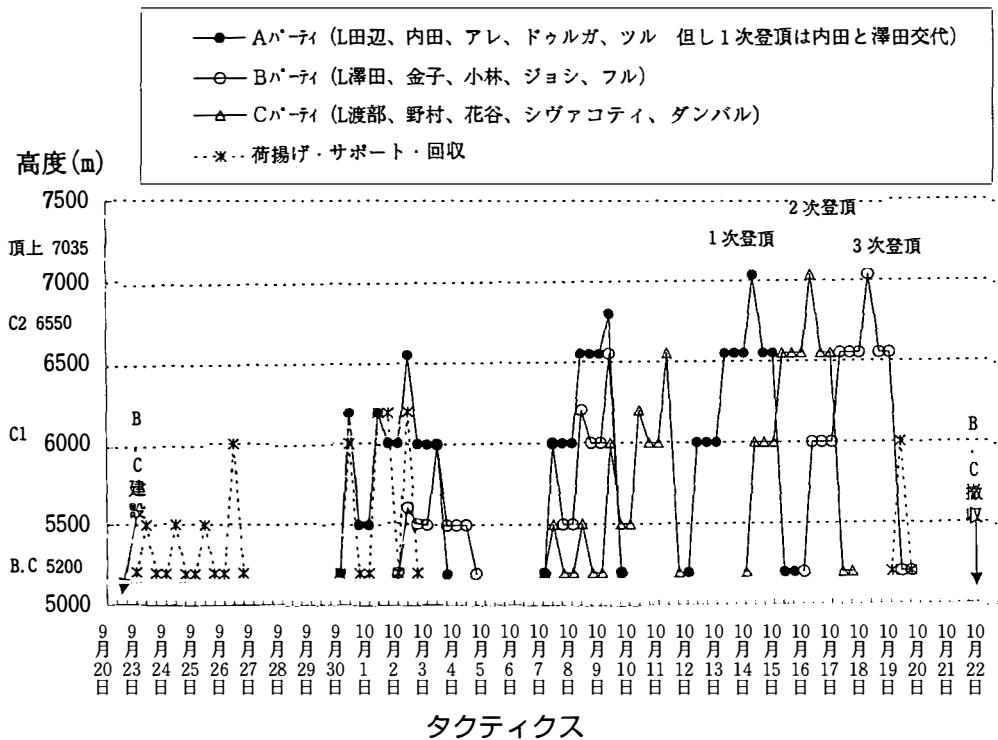
タクティクスの反省点としてC1以上のフィックスロープを回収できなかった事があげられる。これについては環境保全の項にゆずる。

## 2 登山報告

## ラトナチュリ (7035m)



## ラトナチュリ 登攀ルート



#### 4. 感想

ギャジカン遠征の時、田辺が1人ですべてを決めて指令を出したため、全員登頂は果たしたもの、チームワークに重大な問題を生じた。

その反省をもとに、今回は、すべてに於いて、全員でミーティングを行い、意思統一を行うようにした。ラナ隊長から「あなたが一番良くヒマラヤのことを知っているのだから、あなたが1人で決めて命令したらいいじゃないですか」と助言されたが、今回は全員ミーティングに固執した。

その結果、田辺と他のメンバーのコミュニケーションは、ギャジカンの時と比べものにならないほど良好だった。また、経験の少ないメンバーにも、今、隊がどのような問題をかかえ、どういう方向に進もうとしているかが分かり、人を育てる面からも有効であったと思う。

実際には、ミーティングの際、問題提起と同時に、田辺が解決案を出すことが多かったため、結局、田辺の提案する方向にもってゆかれるという印象があったかもしれない。一方、全員ミーティングを繰り返した弊害として、ネパール側から軽く見られるようになったことを少し感じる。

すでに、ネパール側との信頼関係は、ギャジカンの時にできあがっていたのだから、やはりヒマラヤ登山の現場では、ここ一番のときには、強力なリーダーシップでチームを引っ張っていくことが必要であろう。

## 梱包、輸送

田 辺 治

### 1. 国内

国内の梱包作業は、ギャジカンの時と同様、松本の百瀬斐敏先生の別邸を使わせていただいた。

7月18日(土)から21日(日)までかかって、37個口、1025.5kgの別送品を梱包した。22日にパッキングリストとインボイスを作成して、23日、日通航空に引き渡した。荷姿は、大半が30cm×50cm×90cmのプラパールボックスで、内部にクッション材としてペフマットと、防水のビニール袋を入れた。

また、カトマンズで再梱包しないものは、キャラバンに合わせて、30kgにした。これらの作業は連日、百瀬別邸に泊りこみで行い、さながら合宿所での生活のようであったが、反面、ミーティングを重ねることにより、参加メンバーの意思統一ができたことが収穫であった。

また、テークイン作業として、無駄な外装をとりはらった結果、90kgのゴミを出すことができた。

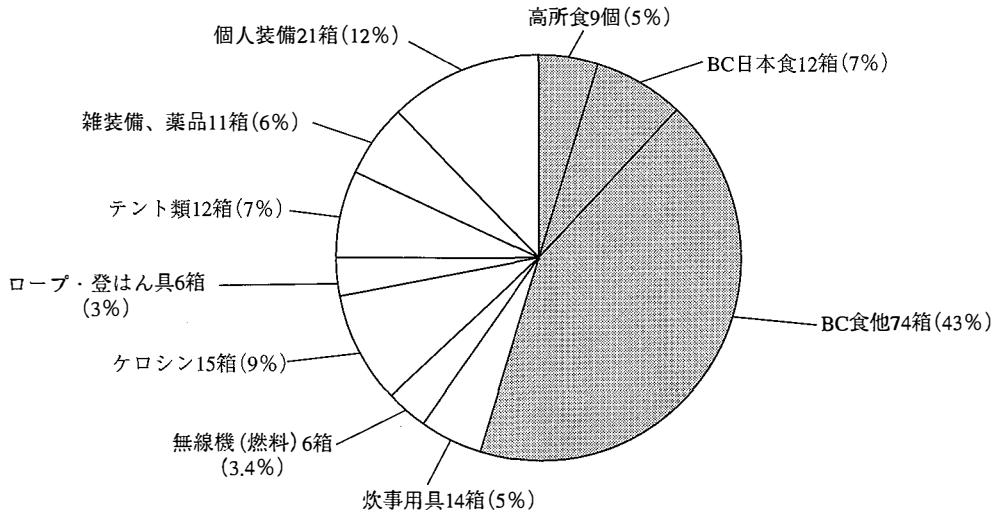
日本からカトマンズへの輸送は、日通航空名古屋支店の横地氏と小松氏に手配をお願いした。シンガポール経由のシーアンドエアーを使い、7月31日、船で名古屋港を出発した。

8月9日シンガポール港に到着。カトマンズへは、シンガポール航空を使って、8月16日着の予定であった。運賃は、4.5USドル/kg。諸費用のみで、全体で612,069円かかった。

ところが、8月10日、ラナ隊長より「カトマンズでの通関は、8月16日の荷物到着後、3日以内にやらなくてはならない」とのファクシミリがあり、「8月21日の本隊カトマンズ入りでは遅すぎるため、田辺を早くカトマンズへ送ってほしい」との依頼であった。田辺の都合もあるため、やむなく、8月16日の荷物のフライトをキャンセルし、強引に8月22日のフライトをとってもらった。しかし、実際には、「3日以内の通関」は、まったくの誤報で、ふりまわされただけだった。

このほか、ロイヤルネパール航空の協力を得て、機内預けの超過料金を8人で500

## キャラバン開始時荷数174箱の内訳(30kg/個)



kgまでフリーにしていただいた。

今回、協力していただいた多くの方々に、感謝申し上げます。

## 2. カトマンズ

8月22日にカトマンズへ到着した別送品は、翌23日に通関することができた。すべて消費物品として申告し、32,072ルピーの税金と1,110ルピーのポーター代を支払った(申告額5,082.4ドルF.O.B.)。

また、7台のトランシーバーは、8月1日にカトマンズへ到着した際、空港の税関にデポジットした。8月23日、ラストラバンクへ445ドルのデポジットマネーを払った後、通信省と税関本部へ行って、通関書類を作り、空港カスタムへ、税金18,050ルピーを支払って、トランシーバーを引き出した。

そして、その足で、通信省にて使用許可証を発行してもらった。これらの仕事が1日で終わってしまったのは、ラナ隊長の手際によるものである。

カトマンズでの梱包作業により、隊荷は174個口、5220kgとなった。

## 3. キャラバン(往路)

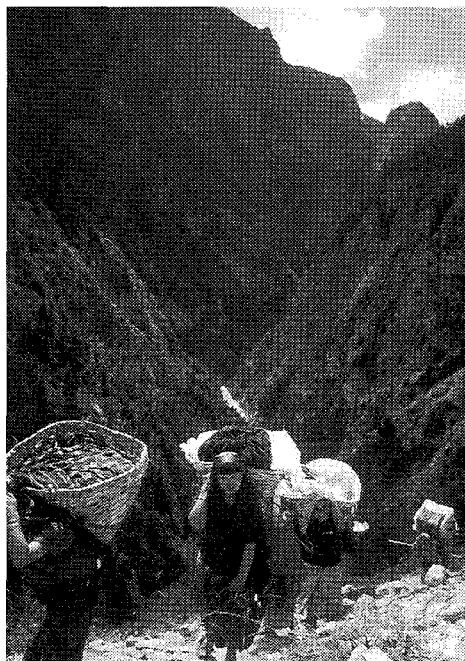
ポーター賃は、175ルピー/日で、別に600ルピー/人のリターンマネーを支払った。

1994年のギャジカン遠征の時は、ボテオラまで車が入ったが、今回はドゥムレまでしか入らなかった。そのため、2日間キャラバンが延び、ベースキャンプまで2週間を要した。キャラバン初期に、内田と花谷があいついで体調を崩してしまった。この

## 2 登山報告

ため、ネパール側スタッフのサポートをつけて、別々にキャラバンしてもらうことになった。内田はともかく、若い花谷には、一人旅は精神的にきびしかっただろうが、よくがんばってくれた。プー・ガオンで追いついた時は、一段とたくましくなったように見えた。

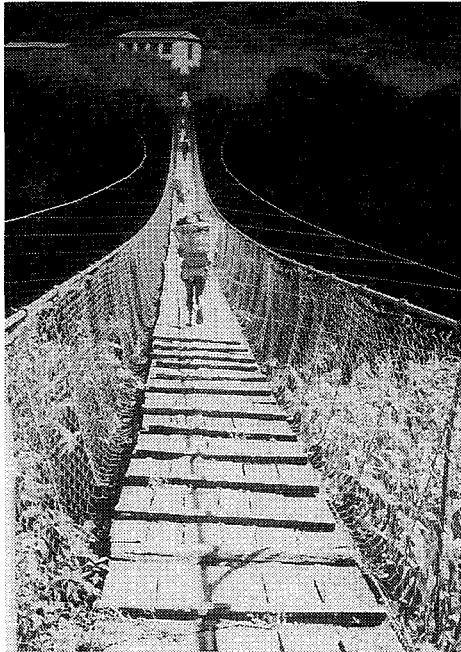
また、ポーターのうち35人が、ナル・コーラのゴルジェ帶に入ることを拒否し、コトで逃げてしまった。しかし、ギャジカンの時の友人、マンガル・グレン氏が、即座にティリジエ村のポーターを率いてかけつけてくれたため、問題は生じなかった。



◀ナル・コーラ峡谷をプー村めざして登るティリジエ村のポーター

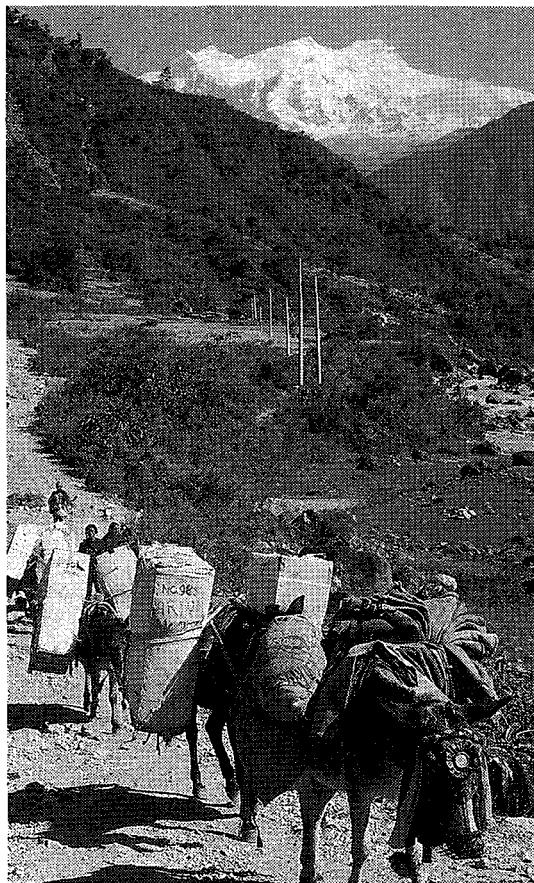
▼ドゥムレでの荷物積み卸し風景





マルシャンディ峡谷にかかるタルへ渡る吊橋

▶乾季の晴天の下、カトマンズへとロバとともに帰路を歩む。後方はヒマールチュリ



ポーター賃は、200ルピー／日だが、帰りの旅費支給が不要になったため、カトマンズからつれてきたポーターより、トータルでは安くなった。

#### 4. キャラバン(帰路)

バックキャラバンについては、ホンデから空路ポカラへ帰る計画を立てた。

そして、ベースキャンプからホンデまでは、プー・ガオンのヤクと馬を使って4日間でカン・ラを越える予定であった。

しかし実際には、大雪のため、カン・ラ越えの道を閉ざされ、ナル・コーラ沿いの道を下ることになった。その際、プー・ガオンの村人によるストライキとサボタージュにより、ベースキャンプからコトまで、8日間もかかってしまった。日当も、200ルピー／個・日の約束だったのが、最終的には500ルピー／個・日に跳ね上がった。この季節はずれの大雪は、人の弱みにつけこむことが得意なプー・ガオンの村人にとっては、天の恵みであったといえよう。コトからは、ロバを使ってキャラバンを行い、問題なかった。

## 装 備

### 金 子 鉄 男

キャラバン開始時の装備品の数量は、医薬品、個人装備を含め79個、2370kgあり、隊荷の45%を占めている。このうち団体装備は58個、1740kgで内訳は国内(日本)調達品590kg、現地(カトマンズ)調達品1150kgとなっている。

前回のギャジカン隊と大きく異なるのは、前回は群馬県山岳連盟のご厚意により大半の装備が現地で借用できたが、今回は若干の寄贈品、借用品を除き、金額にして国内120万円、国外80万円、合計200万円を超える装備類を購入した(国内調達装備リスト表参照)。

国内調達品は、寄贈品、借用品、購入品で構成される。寄贈品は、ロープ類、マット、電池、大型カメラ、パソコンなどである。借用品は、トランシーバー、高度計、デジタルビデオ、双眼鏡、GPSなどの高額製品があげられる。購入品としては、高所テント、EPIヘッド、EPIランタン、ヘッドランプ(リチウム電池使用)などカトマンズでは新品、数そろえの調達が困難と思われる装備品を調達したが、正解であった(国内調達装備リスト表参照)。

カトマンズでの調達品は、①日本製より仕様性能が勝る旧ソビエト連邦製の酸素吸入器、ポンベ(22万円)、②中古品であるが安価なカラビナ、ハーケン、スノーバーのような登攀具(18万円)、③EPIガスカートリッジのように日本からの輸送コストが高くつくもの(20万円)、④圧倒的に安いBCでの炊事用品(10万円)及び雑品(10万円)を購入した。カトマンズでの借用品は、警察学校からBCテント用品類、発電器(2KVA)、無線機器類があげられる(国外調達装備リスト表参照)。

以下の装備品についての記載は反省会の意見も含め、次のとおりである。

#### 1. ロープ類

ギャジカン隊同様、(株)テザック社のご厚意により、3種類のロープの寄贈をうけ、松本で必要数を切断加工した。フィックスロープとして、8mmのPPロープを2500m(50本)用意し、ルート上に、2100m使用した。ギャジカンからの遠望写真でフィックス区間の長さを推定した田辺隊員のタクティクスは正確だったといえる。

スノーバーとフィックス間の接続具としてカラビナを使わず、6mmダイニーマー ロープを使用した。被覆が黄色で雪上でもアンカー箇所がよく認識できた。ただ、外層の被覆のロープと内層のダイニーマーがすり抜ける性状があるので瞬間接着剤で端末処理を行う必要があった。

その他、コンテニアス用に8mmナイロン・ロープを200m(4本)用意した。

## 2. テント

高所テントとして新品のエスパースと警察学校のダンロップテントを使用した。エスパース(4人用)は新品で居住性もよく好評であった。日本隊のベースキャンプ用テントとしてネパール警察に寄贈してあったモンベルテントと一般キャンプ用の格安テントを使用した。モンベルテントは居住性がよかつたが、長年の使用による外張りの紫外線劣化、チャック部の破損と修理が多かった。帰国後、補修不能となった外張りは日本から購入し後送した。また、格安テントは上部が一部メッシュとなっていたため、気密性がなく砂塵の侵入、耐寒上問題があり、5200mの寒冷地の長期滞在には不適であった。それでも格安テントに泊まっていた澤田君、花谷君、小林君は楽しそうであった。

## 3. トランシーバー

トランシーバーは、乾電池仕様のケンウッド製を日本隊が用い、警察側は充電仕様のモトローラ社製を用いた。日本隊の機種は軽量な反面、出力が弱く実用的でないとの意見もあり、ベースキャンプでの大型アンテナの設置など、機種の選定を含めて今後の課題である。また、再充電電池は1.25V／本が最高値であり、基本的にトランシーバーでは電圧が低くて不適である。

## 4. ヘッドライト

ナショナル製の強弱切り替えができるヘッドライトと東芝(株)より寄贈された多量のリチウム電池を使用したが、明るさ、寿命、信頼性に富み、いずれも大好評であった。ただし交換球は特殊品であるので予備球は海外調達はできない。

## 5. ロールペーパー

余裕をみて、カトマンズ滞在期間を含め1巻きを1人が2日で使うとして、250巻き用意した、梱包時の緩衝剤としても使えるし軽くて安いものなので日本製が最良である。特に痔病の人には薬品以前の処置かもしれない。

## 2 登山報告

### 6. E P I ガス

日本で1缶450円のカートリッジが、ネパールでは再充填品で800円と足元をみられた価格であるが、危険物で日本から輸送できず、やむをえない。高所キャンプでは、150缶使用しており、残り100缶はベースキャンプのケロシン欠乏時に使用した。結果論だが、100缶相当の予備品はプロパンボンベからベースキャンプで充填する方法も検討に値する。

### 7. パソコン

バッテリーの持続時間が短い。消耗の大半は待ち時間であり、日本国内でソフトを作つておき現地ではデーター入力に徹するなり、機器に十分、習熟しておき手短に操作できることが大切である。これはあらゆる電子機械類にいえる。小型発電機なり、ソーラー充電器なり、日本で充電対策を対処しておく必要がある。今回は警察側の無線、照明用の電力が使用できたので大きな問題はなかった。タクティクス、会計、記録に活用した。機能的には、最近売り出されているパソコンより、より小型で乾電池でも動作するモバイル・パソコンで十分と考える。

但し、カトマンズでは変圧器(220Vを100Vに)を介して、電源をとり、会計計算などに重宝した。

東芝よりノートパソコン一式(2台)の供与を受け、1台はベースキャンプで使用した。

### 8. ハンディタイプのG P S

高度のデーターはあてにならないが、平面座標(緯度、経度)は正確であった。B Cは地図の空白地帯でありレスキューのヘリコプターを呼び寄せるときに存在を發揮した。ただし計測を1秒間隔で頻繁に行うため8時間で単3電池を4本消耗する。自動車ラリーのように速度まで知る必要はないので、登山者向きに電池の消耗の少ない機種の開発が望まれる。1.25Vの充電可能電池で作動したのでトランシーバーと異なり小型のソーラー充電器との組み合わせ使用は可能である。樹林帯、ゴルジュ帯、リュックサックの中のように受信状況の悪いところは使用はできない。

### 9. ネパール隊員の装備

ネパール隊に装備の不足から、凍傷気味の人がいた事から、隊員に装備代を渡すより、現物支給した方がよいのではとの意見もあった。

特にネパール隊員のアイゼンバンドの劣化が目についた。

## 10. 梱包箱

プラパールとドッコと称する竹の網籠が梱包材の主体であった。頻繁に出し入れする物品を入れた通称「お助け箱」は、ガムテープの世話にならない開閉自在な金属ケースやプラスチックの樽が若干あればよかつた。

## 11. ペフマット

いつも寄贈をいただいているが、手違いで1ロール(50m)しか調達できなかつた。キャラバン中はプラパールの緩衝材になるし、ベースキャンプでは各テントの下敷になるので150m程度あつたほうがよい。

## 12. 装備品の国内調達に対する御援助

今回の隊は、初めてのヒマラヤの人も多く、個人装備の購入も多く、不足の団体装備を含め、(株)モンベル社から遠征隊価格として安価に提供してもらい、団体装備10万円、個人装備30万円分を購入した。

ロープは(株)テザック社が卒業生の関係もあり、前回同様にこちらの希望に添って全量寄贈いただき登山費の縮減に大きく役立つた。松本での高価な装備の調達にあたり、信大卒業生の経営される佐山スポーツが利益度外視の御協力をいただいた。その他、(株)マミヤより中型カメラ、東芝(株)よりコンピューター、東芝電池(株)よりリチウム電池などを多数寄贈していただいた。

## 13. ネパール残置装備品

遠征終了後、エスパーステント1張り、EPIコンロ、ヘッド、スノーバー等をネパール警察側に寄贈したほか、今後の遠征のためコスモトレック社にエスパース2張りほかダッフルバック1袋分の装備類をデポした。

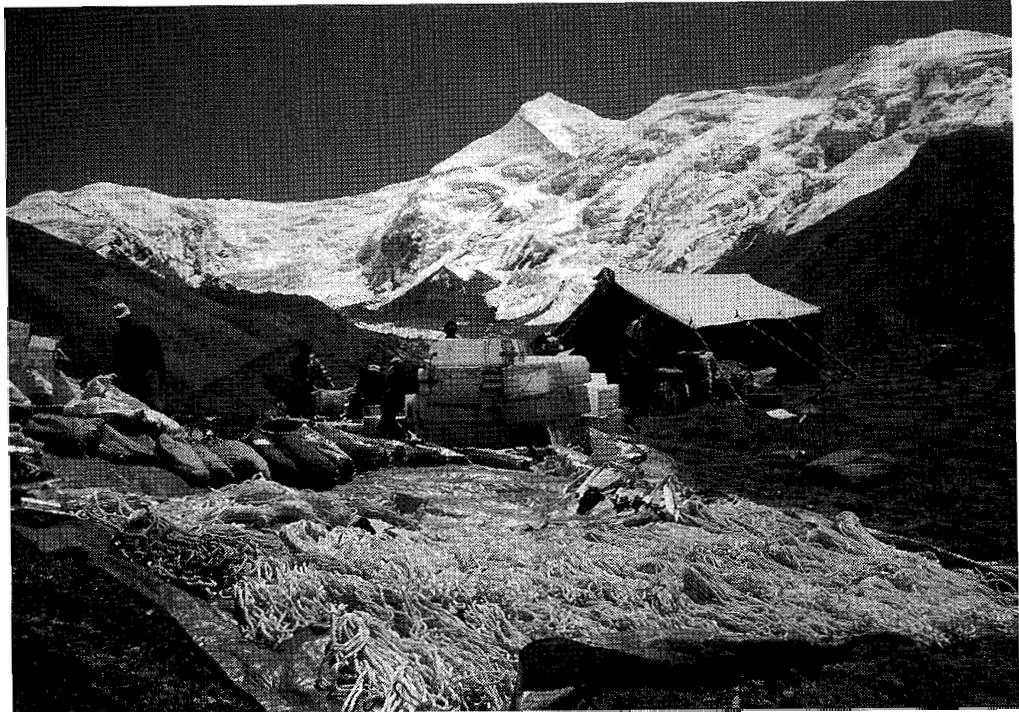
## 2. 登山報告

国内調達装備リスト表

No	使用場所	用 途	品 目	单 量 kg / 单位	数 量	重 量 (kg)
			品 名 仕 様			
1	高 所 キ ヤ ン ブ 用	登 はん 具	スリング	0.07	125本	8.75
2		登 はん 具	ロープ(8.5mm *45m)(メイン)	3.00	2本	6.00
3		登 はん 具	ロープ(ナイロン 8mm *40m)(ゴンテ)	200m	4本	16.00
4		登 はん 具	ロープ(ナイロン 8mm *50m)(FIX)	200m	5本	25.00
5		登 はん 具	ロープ(PP 8mm *50m)(FIX)	2,500m	50本	125.00
6		露 営 具	テント(エスパース 4~5人用)	内張付	5.00	8張
7		露 営 具	ツェルト		1.00	3張
8		露 営 具	マット(ペフ)	含む B.C 用	0.20	100枚
9		露 営 具	スッコブ(アルミ)		1.00	3本
10		露 営 具	雪袋	コンパイン袋	0.05	50枚
11	火 気 食 器 通 信 予 備 そ の 他	火氣・燃料	EPI ヘッド		0.50	8台
12		火氣・燃料	ランタン(EPI)		0.30	8台
13		火氣・燃料	EPI ボンベ、カトマンズで購入	170(g / day) * 人数	0.40	160函
14		食 器・炊 事	コップル(中)		1.00	8組
15		食 器・炊 事	食器		0.20	20組
16		食 器・炊 事	ブス板		0.05	8片
17		通 信・記 録	トランシーバー		0.50	7台
18		通 信・記 録	トランシーバー・アンテナ		0.20	7本
19		通 信・記 録	電池(単3 トランシーバ用)	単3 6本 *6台 *6回	0.02	1,100本
20		予 備 具	ヘッドライト ナショナル・リチウム兼用		0.20	7個購入
21	キ ヤ ン ブ 用	予 備 具	電池(単3 リチウム)	単3 4本 *9台 *4回	0.02	150本
22		予 備 具	予備テントポール	エスパース	0.50	1組
23		そ の 他	赤布		0.02	100片
24		そ の 他	国旗(日本)			1旗
25		そ の 他	旗(信大)			2旗
26		そ の 他	高度計		0.10	1個
27		そ の 他	高度計(腕時計型)	エンベックス	0.05	2個
28	露 営 具	露 営 具	テント 2~3人用		5.00	3張
29		露 営 具	タープ		4.00	3張
30		露 営 具	ブルーシート(キッチン用)		1.00	5枚
31		火 气・燃 料	EPI ヘッド	B.C 用	0.50	2台
32		火 气・燃 料	ランタン(EPI)		0.30	3台
33		火 气・燃 料	ポータブル電源(交直兼用)		11	1台
34		火 气・燃 料	ランタン(EPI)用マントル		0.30	3台
35		火 气・燃 料	EPI ボンベ	B.C 用、カトマンズで購入	0.23	90函
36		火 气・燃 料	ボリタンク(ケロシン) 10L		0.50	50個
37		火 气・燃 料	ボリタンク(ガソリン)	発電機用 10L	0.50	12個
38	ラ バ ン ・ ス キ ヤ	火 气・燃 料	ペットボトル			
39		火 气・燃 料	ハンドポンプ(ケロシン)		0	2個
40		梱 包	カートン BOX (大)		1.00	100個
41		梱 包	カートン BOX (中)		0.75	35個
42		梱 包	カートン BOX (小)		0.50	0個
43		梱 包	P・P バンド		0.01	2,000m
44		梱 包	P・P ストッパー		0.00	1,000個
45		梱 包	バネ秤	50Kg	2.00	2台
46		梱 包	番号札(ポーター用)			600枚
47		梱 包	番号札用細紐			600本
48	修 理 用	梱 包	コンパイン袋		0.01	50枚
49		梱 包	カッターナイフ		0	5個
50		梱 包	背負子		1.50	5個
51		修 理 具	工具セット		2.00	1組
52		修 理 具	コンロパーティセット		0.50	1組
53		修 理 具	ランタン用(EPI)部品・掃除針		0.20	1組
54		修 理 具	ランタン予備マントル	10台 *4回分	0.10	1組
55		修 理 具	裁縫セット			1組
56		修 理 具	鳩目セット			1組
57		修 理 具	針金			10m
58		修 理 具	ビニールテープ			10個
59		修 理 具	リペアテープ			3個
60		修 理 具	接着剤(瞬間・ボンド)			3組

## 装 備

No	使用場所	用 途	品 目		重 量 kg./単位	数 量	重 量 (kg)
			品 名	仕 様			
61	キヤラバ	通信・記録	ビデオカメラ		5.00	1台	5.00
62		通信・記録	ビデオ・テープ		0.10	10本	1.00
63		通信・記録	ラジカセ		1.00	2台	2.00
64		通信・記録	短波ラジオ		0.20	1台	0.20
65	ン・ベ	通信・記録	電池(ビデオ用)		0.33	3個	1.00
66		通信・記録	電池(ラジカセ用)		0.14	7個	1.00
67		通信・記録	双眼鏡		2.00	1台	2.00
68		通信・記録	単眼鏡		4.00	1台	4.00
69	ス	通信・記録	雪温計		0.10	1個	0.10
70		通信・記録	最高最低温度計		0.10	1個	0.10
71		通信・記録	プリントゴッコ		1.00	1台	1.00
72	キヤン	ポーター支給	靴下		0.01	140足	1.40
73		ポーター支給	軍手		0	200組	2.00
74		そ の 他	ノート			5冊	0.50
75		そ の 他	マジックインキ		0.05	10本	0.50
76	ン	そ の 他	ロールペーパー		0.05	250巻	12.50
77		そ の 他	巻き尺		0.10	1個	0.10
78		そ の 他	ビニール袋(大)			200枚	
79		そ の 他	ビニール袋(中)			100枚	2.00
80	用	そ の 他	ビニール袋(小)			800枚	
81		そ の 他	遊戯具(バドミントン等)		5.00	1組	5.00
82		そ の 他	各種ゲーム			5組	
83		そ の 他	花札			5組	
84	そ の 他	そ の 他	トランプ			5組	
85		そ の 他	ダニアース			10本	0.50
							合計重量 586.44



ベースキャンプに並べられた装備類

## 2. 登山報告

国外調達装備リスト表(カトマンズにて購入)

No	使用場所	用 途	品 目	重 量 kg／単位	数 量	重 量 (kg)
			品 名 仕 様			
1	高 所	登 はん 具	カラビナ	0.10	10枚	1.00
2		登 はん 具	スノーバー	0.30	100本	30.00
3		登 はん 具	ハーケン(アイス)	0.15	40個	6.00
4		登 はん 具	ハーケン(ロック)	0.10	15個	1.50
5	キ ャ ン	露 営 具	テント(エスバース内張付)	4.50	3張	13.50
6		露 営 具	竹ベグ	0.05	80本	4.00
7		露 営 具	雪ブラシ	0.10	8個	0.80
8		医 療	酸素ボンベ 4L 280Kg / cm <sup>3</sup>	5.00	5本	25.00
9		医 療	酸素ボンベ 3L 280Kg / cm <sup>3</sup>	4.00		
10		医 療	レギュレーター	1.00	2組	2.00
11		医 療	マスク	0	2組	0.50
12		予 備 具	予備アイゼン	1.00	2個	2.00
13		予 備 具	予備ビッケル	1.00	1本	1.00
14		予 備 具	予備サングラス	0.10	2個	0.20
15		予 備 具	予備オーバーハンド	0.20	3組	0.60
16		予 備 具	予備スパツツ	0.30	3組	0.90
17	そ の 他	赤布竹ポール		0.20	140本	28.00
18		そ の 他	国旗(ネパール)		2旗	1.00
19	キ ャ	露 営 具	テント 4~5エスバース	5.00	1張	5.00
20		露 営 具	テント 4~5モンベル	5.00	2張	10.00
21		露 営 具	テント ダイニング用	30.00	2張	60.00
22		露 営 具	ネパール隊員用テント	5.00	6張	30.00
23		露 営 具	予備テント	5.00	0張	0.00
24		露 営 具	ブルーシート(キッチン用)	1.00	2枚	2.00
25		露 営 具	3段ポール(ブルーシート用)	5.00	2本	10.00
26		露 営 具	ブルーシート(ポーター用)	5.00	3枚	15.00
27		露 営 具	スコップ	1.00	2本	2.00
28		露 営 具	ズタ袋	0.10	50枚	5.00
29	バ ン	火 気・燃 料	発電機・無線機	25.00	1式	25.00
30		火 気・燃 料	EPIボンベ B.C用	0.23	250函	57.50
31		火 気・燃 料	ケロシン(メン0.4L / day *)	1.00	500L	425.0
32		火 気・燃 料	ケロシン(ボー0.4L / day)		0L	0.00
33		火 気・燃 料	ガソリン(発電機用)	0.90	100L	76.50
34	ペ	火 気・燃 料	ケロシンコンロ(大)	2.00	6台	12.00
35		火 気・燃 料	ケロシンコンロ(小)	1.50	10台	15.00
36		火 気・燃 料	ランタン(ケロシン)	3.00	3台	9.00
37	ス キ	食 器・炊 事	圧力鍋	2.00	7個	14.00
38		食 器・炊 事	鍋(大)	2.00	9個	18.00
39		食 器・炊 事	鍋(中)	1.50	9個	13.50
40		食 器・炊 事	鍋(小)	1.00	9個	9.00
41		食 器・炊 事	フライパン(大・中)	1.50	5個	7.50
42	ブ 用	食 器・炊 事	やかん	0.30	7個	2.10
43		食 器・炊 事	コッフェル(中)	0.20	8個	1.60
44		食 器・炊 事	マホービン	0.50	3個	1.50
45		食 器・炊 事	ポリタンク(水) 10L	0.60	10個	6.00
46		食 器・炊 事	ウォーターカップ(大)	0.01	4個	0.04
47		食 器・炊 事	皿(深)	0.10	30個	3.00
48		食 器・炊 事	皿(平)	0.10	30個	3.00
49	食 器・炊 事	食 器・炊 事	ティカップ	0.10	30個	3.00
50		食 器・炊 事	カップ		4個	0.20
51		食 器・炊 事	トレイ	0.20	5個	1.00
52		食 器・炊 事	洗い桶 大	1.00	7個	7.00
53		食 器・炊 事	まな板	0.20	4個	0.80
54	食 器・炊 事	食 器・炊 事	包丁	0.25	4個	1.00
55		食 器・炊 事	フライ返し	0.20	5個	1.00
56		食 器・炊 事	じょうご	0.05	3個	0.15
57		食 器・炊 事	木べら	0.75	4個	3.00

装 備

No	使用場所	用 途	品 目	重 量 kg / 単位	数 量	重 量 (kg)
			品 名 仕 様			
58	キヤ	食器・炊事	皮むき・おろし金	0.10	2個	0.20
59		食器・炊事	お玉	0.01	4個	0.04
60		食器・炊事	茶こし	0.01	6個	0.06
61		食器・炊事	箸	0.01	30個	0.15
62		食器・炊事	フォーク・ナイフ	0.10	30個	3.00
63	ラン	食器・炊事	スプーン	0.05	30個	1.50
64		食器・炊事	缶切り	0.05	10個	0.50
65		食器・炊事	クレンザー	0.20	25個	5.00
66		食器・炊事	チャバティセット	2.50	2個	5.00
67	ベー	修 理 具	コンロバーツセット	0.50	1組	0.50
68		修 理 具	針金		10m	5.00
69		そ の 他	石鹼		20個	2.00
70		そ の 他	マッチ	1.00	1箱	1.00
71		そ の 他	ローソク	0.02	50本	1.00
72	キャンブ用	そ の 他	細紐	0.05	300本	15.00
73		そ の 他	背負い籠(ドッコ)	0.50	100籠	50.00
74		ポーター支給	タバコ	0	360箱	7.20
75		ポーター支給	サングラス	0	100個	5.00
76		ポーター支給	合羽用ビニールシート	0.10	300枚	30.00
77		ポーター支給	ポーター用靴	0	140足	42.00
78						
						合計重量 1147.54



キッチンスタッフの旅姿。左よりツムルク、ラジュマン、ナワン。ボテオラ付近にて

Kitchen staff : Mr.D.P.Tumbruk, Mr.R.Khabas, Mr.N.Gyalzen Sherpa

## 食 料

内 田 健 一

### 1. 計画

#### 1) キャラバン

基本的に現地食中心とし、嗜好品のみ日本食を用意する。食料係の立場からバッティ(宿屋)も積極的に利用したい。

#### 2) ベースキャンプ

日本隊は現地の材料を用い、日本の味付材料によって日本食を食べられるようにする。ネパール隊には彼らの好みにあった現地食を用意してもらう。

#### 3) ハイキャンプ

日本隊、ネパール両隊員分の高所用食料(アルファ米やインスタント麺類)を日本から持ち込む。ハイキャンプ食料全体の半分程度を3人×5泊分で15kgのカートンとし、残りはパーティにより自由に選択できるものとする。

### 2. 準備

#### 1) 日本で

松本での準備期間中に食料リストに基づいて買い出し、キャラバン、ベースキャンプ、高所キャンプに分けて梱包した。キャラバン、ベースキャンプ用については、そのまま出発できる30kg詰めとした。佐山スポーツ購入分(アルファ米、ジフィーズ等)については、あらかじめ注文を依頼した。

#### 2) ネパールで

カトマンズで日本側計画とネパール側計画の調整を行い、業者に来てもらって注文する形で購入となった。梱包場所の警察学校まで業者が運んできてくれた。市場をまわるのに比べて、かなり手間は省けたと思う。梱包作業は相変わらず頭(語学力か?)と体力を必要とし、重労働である。

### 3. キャラバン

今回、コトまでのアンナプルナ街道沿での宿泊はすべてバッティ泊まりとなった。

食事に対する不満は聞かれなかったように思う。昼食代は現金で支給され、各自好きな食べ物を食べた。コト以降はパックランチを用意した。チャパティ、卵、チーズ、クラッカー、ジャガイモ等であるが、適当であったと思う。バッティ泊まりの利点は食料輸送費の節約である。

#### 4. ベースキャンプ

今回はコック 2名、キッチンスタッフ 5名を雇用した。彼らが作るネパール食は非常においしく、日本側隊員にも好評であったため、結果としてネパール食の比率が多くなってしまった。日本食材料はカートンを半分に切った箱に入れて並べ、手の空いた隊員が材料を探し出して調理を指示できるようにはしていたが、調理にかかる隊員は限られていた。日本食ではうどん、もち、しるこ等や、あられ、さきイカ等のつまみ類が好評であった。

また、コックのナワンは日本食に詳しく、おいしい日本食を作ってくれた。ベースキャンプ近くのプー・ガオンやパングリ・カルカにて、ヤギ・ヤクの肉、ジャガイモ、ロキシー、チャン等が購入可能であった。

水については近くの水場が 2 週間ほどで枯れてしまい、500m 程離れた沢筋まで悪路を下って水汲みが必要となった。

#### 5. 高所キャンプ

前進ベースキャンプでは、15人日分になったカートンを数個荷上げし、あとは各パーティが各キャンプの在庫を確認してベースキャンプ、または前進ベースキャンプより好みの食料をネパール側、日本側それぞれ荷上げした。各キャンプでは基本的にネパール側隊員と日本側隊員は別々に食事をとった。

ネパール側隊員は必要に応じて圧力鍋等を荷上げし、使っていたようだ。飲み物や野菜の種類と量はたっぷりあったと思う。

なお、アルファ米を20分ほど炊くと、高所でもうまく炊きあがり、おいしくいただける。

#### 6. 総括と反省

日本から持ち込んだ食料は、質、量ともおおむね適当であったと思っている。

高所食については一部計算間違いもあり、余った物もあった。キャラバン時のバッティの有効利用は良かったと思う。

バッティ泊まりについてはポーター代、食料代、時間が節約でき、良かったと考える。

## 2 登山報告

今回一番の反省点は、バックキャラバンの食料計画の甘さにつきると思う。最低限の食料しか手元に残さずあとは売ってしまったために、結果として食料危機を招いてしまったことを反省したい。

これは本隊の計画・方針とも深くかかわっている問題であり、このあたりがヒマラヤ登山のむずかしくおもしろい所だと言えるかも知れないが、とにかく食料係として計画の甘さを反省している。人間やはり最後は食料と水が命ですね。



松本にて物資の山に囲まれ準備に奮闘する内田と花谷

ラトナチュリ遠征 食料数量一覧表

No	品 名	単位重量 (g)	購 入 先		キ ラ バ ン		ベースキャンプ		高所キャンプ		合 計	
			日 本	ネパール	数 量	重 量(kg)	数 量	重 量(kg)	数 量	重 量(kg)	数 量	重 量(kg)
1	ラーメン	100	○	○	60	6	60	6	36	3.6	156	15.6
2	焼きそば	100	○			0	30	3	36	3.6	66	6.6
3	天そば	100	○			0	30	3	36	3.6	66	6.6
4	カレーうどん	100	○				30	3	36	3.6	66	6.6
5	アルファ米	140	○			0		0	180	25.2	180	25.2
6	乾燥(FD)餅	250	○			0	8	2	12	3	20	5
7	マッシュポテト	200	○			0	10	2		0	10	2
8	ジフィーズ	120	○			0	50	6		0	50	6
9	スパゲッティ	500	○			0	20	10		0	20	10
10	乾素麺	250	○			0	40	10		0	40	10
11	乾うどん	250	○			0	40	10		0	40	10
12	乾そば	250	○			0	40	10		0	40	10
13	乾冷や麦	250	○			0	40	10		0	40	10
14	冷やし中華	100	○			0	50	5		0	50	5
15	ビーフン	300	○	○		0	5	1.5		0	5	1.5
16	餅	500	○			0	10	5		0	10	5
17	パン	300	○	○		0	10	3		0	10	3
18	マカロニ	300	○	○		0	20	6		0	20	6
19	オートミール	150	○	○		0	10	1.5		0	10	1.5
20	FD 野菜	20	○			0		0	96	1.92	96	1.92
21	FD 焼き豚	100	○			0		0	24	2.4	24	2.4
22	ソーセージ	100	○	○	100	10	100	10	72	7.2	272	27.2
23	ベーコン	200	○		100	20	100	20		0	200	40
24	FD 味噌汁	20	○		100	2	250	5	108	2.16	458	9.16
25	カレールー	200	○		10	2	10	2	12	2.4	32	6.4
26	シチューリー	200	○		10	2	10	2	12	2.4	32	6.4
27	釜飯の素	120	○		10	1.2	10	1.2	12	1.44	32	3.84
28	マーボの素	100	○			0	10	1	12	1.2	22	2.2
29	干し椎茸	50	○		5	0.25	10	0.5	12	0.6	27	1.35
30	春雨	50	○			0	10	0.5	12	0.6	22	1.1
31	五日寿司の素	100	○			0	50	5	12	1.2	62	6.2
32	FD 卵	30	○			0	50	1.5	36	1.08	86	2.58
33	大豆空揚げの素	150	○			0	20	3		0	20	3
34	ハヤシの素	150	○			0	20	3		0	20	3
35	ビスケット	150		○	300	45	30	4.5	24	3.6	354	53.1
36	ドライフルーツ	50	○	○		0		0	48	2.4	48	2.4
37	飴	100	○	○	60	6	20	2	60	6	140	14
38	チョコレート	100		○	50	5	40	4	12	1.2	102	10.2
39	胡麻煎餅	100	○			0	20	2	36	3.6	56	5.6
40	ベビーチーズ	30	○	○		0		0	36	1.08	36	1.08
41	ミニゼリー	60	○			0		0	12	0.72	12	0.72
42	ピーナツ揚げ	100	○			0	20	2	36	3.6	56	5.6
43	みすず飴	150	○			0	5	0.75	24	3.6	29	4.35
44	揚げ煎餅	100	○			0	20	2	36	3.6	56	5.6
45	カシューなツ	150	○	○	10	1.5	20	3	12	1.8	42	6.3
46	芋ケンピ	100	○			0		0	36	3.6	36	3.6
47	ビーナツ	150	○	○		0	20	3	10	1.5	30	4.5
48	アーモンド	150		○	10	1.5	20	3		0	30	4.5
49	かりん糖	100	○			0	20	2		0	20	2
50	煮干	100	○		10	1	20	2		0	30	3
51	サラミ	200	○	○	10	2	20	4		0	30	6
52	ミニサラミ	150	○			0	20	3		0	20	3
53	甘納豆	150	○			0	20	3		0	20	3
54	チーズ	300	○	○	30	9	30	9		0	60	18
55	インスタントコーヒー	200	○	○	10	2	10	2	12	2.4	32	6.4
56	紅茶	2		○	750	1.5	750	1.5	360	0.72	1860	3.72
57	緑茶	2	○		300	0.6	300	0.6	360	0.72	960	1.92
58	ボカリスエット	50	○		60	3	60	3	60	3	180	9
59	ココア	200	○	○	15	3	15	3	12	2.4	42	8.4

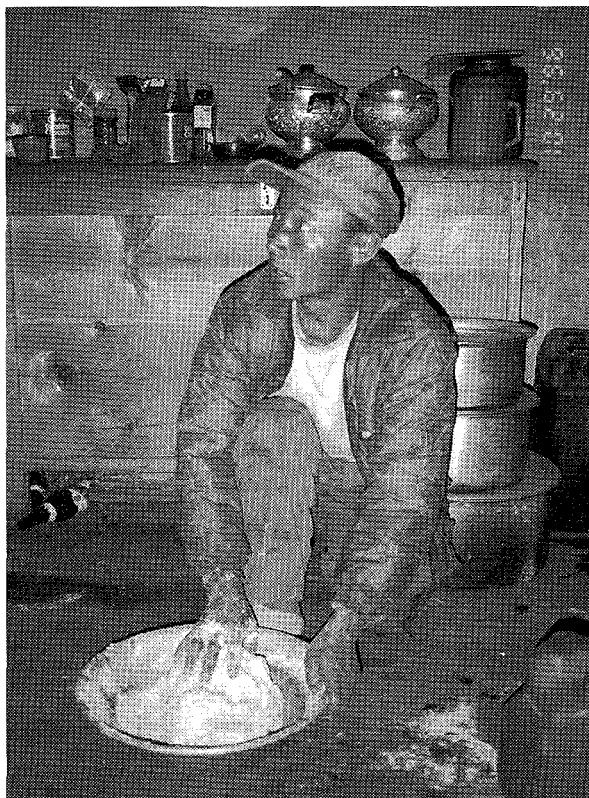
## 2. 登山報告

No	品名	単位重量 (g)	購入先		キャラバン		ベースキャンプ		高所キャンプ		合計	
			日本	ネバール	数量	重量(kg)	数量	重量(kg)	数量	重量(kg)	数量	重量(kg)
60	カップスープ	10	○		200	2	300	3	180	1.8	680	6.8
61	粉末ミルク	500	○	○	20	10	20	10	12	6	52	26
62	粉末レモンティ	200	○		15	3	15	3	12	2.4	42	8.4
63	レギュラーコーヒー	400	○		6	2.4	6	2.4		0	12	4.8
64	麦茶	12	○		100	1.2	100	1.2		0	200	2.4
65	昆布茶	120	○		0	3	0.36		0	3	0.36	
66	カルビス	400	○		3	1.2	3	1.2		0	6	2.4
67	酒	1800	○	○	20	36	20	36		0	40	72
68	ウーロン茶	100	○		10	1	10	1		0	20	2
69	ジャスミン茶	100	○	○	10	1	10	1		0	20	2
70	ボンビタ	500	○	○	4	2	4	2		0	8	4
71	粉末ジュース	200	○	○	0	10	2			0	10	2
72	さけフレーク	150	○		0	10	1.5			0	10	1.5
73	つまみ類(乾物)	500	○		10	5	20	10		0	30	15
74	わらび餅	150	○		10	1.5	20	3		0	30	4.5
75	プリンの素	200	○		10	2	20	4	12	2.4	42	8.4
76	フルーツ缶	400		○	50	20	50	20	24	9.6	124	49.6
77	寒天パバ	200	○		10	2	20	4	24	4.8	54	10.8
78	フルーチェ	200	○		10	2	20	4	12	2.4	42	8.4
79	バームクーヘン	150	○		0	20	3	12	1.8	32	4.8	
80	羊羹	50	○		80	4	60	3	72	3.6	212	10.6
81	FD 汁粉	50	○		0	20	1			0	20	1
82	ポップコーンの素	100	○	○	0	20	2			0	20	2
83	海苔煎餅	100	○		0	20	2			0	20	2
84	カロリーメイト	100	○		0	50	5			0	50	5
85	瓶ウニ	150	○		0	10	1.5			0	10	1.5
86	イカの塩辛	150	○		0	10	1.5			0	10	1.5
87	するめイカ	100	○		0	10	1			0	10	1
88	乾燥ホタテ	100	○		0	10	1			0	10	1
89	ジャム	150	○	○	50	7.5	50	7.5		0	100	15
90	海苔	50	○		0	10	0.5			0	10	0.5
91	砂糖	1000	○	○	12	12	12	12	9.6	9.6	33.6	33.6
92	塩	500	○	○	2	1	2	1	0.72	0.36	4.72	2.36
93	コンソメ	5	○		200	1	200	1	180	0.9	580	2.9
94	ふりかけ	100	○		20	2	30	3	36	3.6	86	8.6
95	お茶漬けの素	10	○		200	2	200	2	108	1.08	508	5.08
96	味付け海苔	2	○		10	0.02	10	0.02	12	0.024	32	0.064
97	ふえるワカメ	50	○		10	0.5	10	0.5	12	0.6	32	1.6
98	削り節	50	○		60	3	100	5	120	6	280	14
99	粉末醤油	10	○		0		0	0	12	0.12	12	0.12
100	コンデンスミルク	150	○		50	7.5	50	7.5	36	5.4	136	20.4
101	吸物の素	10	○		30	0.3	30	0.3	108	1.08	168	1.68
102	だしの素	50	○		20	1	20	1	12	0.6	52	2.6
103	胡麻	50	○		10	0.5	10	0.5	4.8	0.24	24.8	1.24
104	漬物類	200	○		25	5	25	5	12	2.4	62	12.4
105	七味	25	○		5	0.125	5	0.125	12	0.3	22	0.55
106	コショウ	25	○		5	0.125	5	0.125	12	0.3	22	0.55
107	とろろ昆布	50	○		10	0.5	10	0.5	12	0.6	32	1.6
108	切り干し大根	50	○		0		0	0	12	0.6	12	0.6
109	FD 惣菜	200	○		10	2	10	2	12	2.4	32	6.4
110	きくらげ	50	○		10	0.5	10	0.5	12	0.6	32	1.6
111	練りニンニク	50	○		10	0.5	10	0.5	12	0.6	32	1.6
112	練りわさび	50	○		5	0.25	5	0.25		0	10	0.5
113	練りショウガ	50	○		10	0.5	10	0.5		0	20	1
114	練りカラシ	50	○		5	0.25	5	0.25		0	10	0.5
115	練り明太子	50	○		15	0.75	20	1		0	35	1.75
116	蜂蜜	500	○	○	5	2.5	5	2.5		0	10	5
117	バター	250	○	○	20	5	20	5		0	40	10
118	醤油	1000	○	○	5	5	5	5		0	10	10

## 食 料

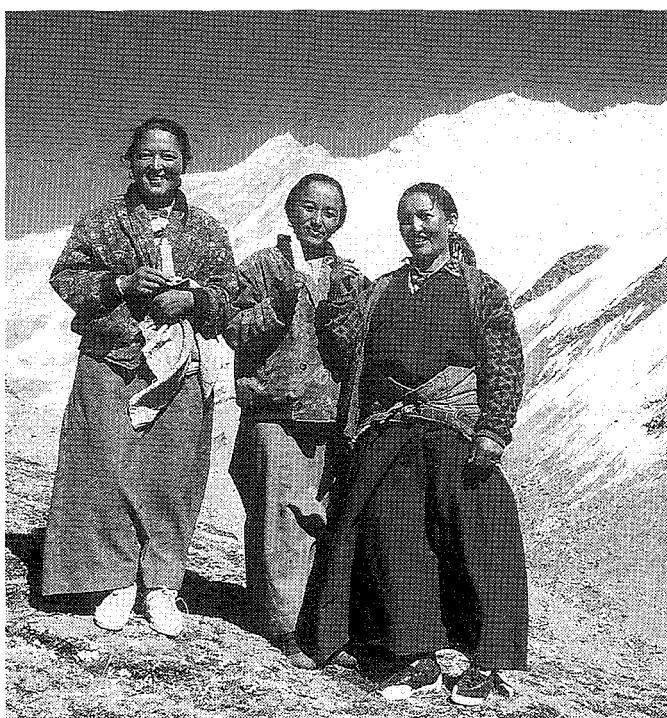
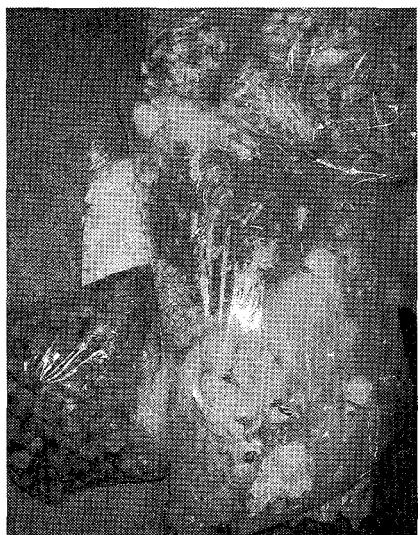
No	品 名	単位重量 (g)	購 入 先 日 本   ネバール	キ ャ ラ バ ン		ベ ース キ ャ ブ		高 所 キ ャ ブ		合 計	
				数 量	重 量 (kg)	数 量	重 量 (kg)	数 量	重 量 (kg)	数 量	重 量 (kg)
119	味噌	1000	○	5	5	5	5	0	10	10	
120	片栗粉	500	○   ○	2	1	5	2.5	0	7	3.5	
121	酢	500	○   ○	2	1	3	1.5	0	5	2.5	
122	ケチャップ	500	○   ○	2	1	4	2	0	6	3	
123	マヨネーズ	500	○   ○	6	3	6	3	0	12	6	
124	ソース	500	○   ○	2	1	3	1.5	0	5	2.5	
125	ドレッシング	300	○   ○	5	1.5	5	1.5	0	10	3	
126	カレー粉	50	○   ○	10	0.5	10	0.5	0	20	1	
127	胡麻油	300	○   ○	5	1.5	5	1.5	0	10	3	
128	食用油	1000	○   ○	10	10	12	12	0	22	22	
129	ラー油	30	○   ○	5	0.15	5	0.15	0	10	0.3	
130	山椒	25	○   ○	5	0.125	5	0.125	0	10	0.25	
131	イースト	20	○   ○	5	0.1	5	0.1	0	10	0.2	
132	乾物	200	○   ○	10	2	15	3	0	25	5	
133	昆布	50	○   ○	4	0.2	4	0.2	0	8	0.4	
134	生卵	60	○   ○	600	36	500	30	0	1100	66	
135	桜海老	30	○   ○	20	0.6	20	0.6	0	40	1.2	
136	高野豆腐	50	○   ○	10	0.5	10	0.5	0	20	1	
137	白玉粉	100	○   ○	5	0.5	5	0.5	0	10	1	
138	梅干し	100	○   ○	25	2.5	25	2.5	0	50	5	
139	キムチの素	100	○   ○	0	6	6	0.6	0	6	0.6	
140	小豆缶	300	○   ○	0	15	4.5		0	15	4.5	
141	ビミサン	1000	○   ○	0	5	5		0	5	5	
142	粉末醤油だし	50	○   ○	0		0	10	0.5	10	0.5	
143	中華だし	50	○   ○	10	0.5	10	0.5	0	20	1	
144	つくる豆腐	100	○   ○	0	5	0.5		0	5	0.5	
145	米	1000	○   ○	300	300	300	300	0	600	600	
146	小麦粉	1000	○   ○	300	300	300	300	0	600	600	
147	ダル豆	1000	○   ○	100	100	100	100	0	200	200	
148	スパイス類	1000	○   ○	30	30	30	30	0	60	60	
149	野菜類	1000	○   ○	100	100	100	100	0	200	200	
150	肉類	1000	○   ○	40	40	40	40	0	80	80	
151	缶詰類	1000	○   ○	40	40	40	40	0	80	80	
152	フルーツ類	1000	○   ○	40	40	40	40	0	80	80	
153	野菜の種	20		0	10	0.2		0	10	0.2	
総 数 量 (kg)				1300.8		1436.8		185.44		2923.04	

## 2. 登山報告



◀早朝4時、ナン生地を練り朝食の準備をするガレ(Mr.A.Ghale)

▼手作りの乾燥果物、野菜



プー・ガオン村からベースキャンプまで度々、野菜の行商に来た、たくましき三婦人

## ネパールの食物

澤田克彦

ネパールでは何を食べていたのかとよく質問される。高所キャンプ以外はすべてネパール食だったので、その一部を紹介したい。

但しこれは、都市の話ではなくキャラバン中の山村の話が主体である。

キャラバンの往復は毎日の歩行と米、麦粉、ソバ粉を基本にした簡素な食事により、かなり健康的な生活が送れたと思う。

山奥へ行くほど動物性蛋白質の摂取が乏しい。人々の体つきは細くしなやかで、子どもの体格は日本より一回り小さい印象である。

帰国後、国内の食事に戻った時には、日本の高カロリー、低纖維、添加物高含有の食品に体が敏感に反応したのか、1カ月程、腹具合が悪かった。

日本で食べようと思い、白、黒ダル豆をカトマンズの雑貨屋で買って帰ったが、しばらくするとコクゾウ虫がたくさんでてきた。日本ではコクゾウ虫など最近、見たこともなく改めてネパールの生活をなつかしく思った。

### 1. モモ

餃子のような食べ物でキャラバン中は、あちこちで食べた。形も中身も色々だが、奥地へ入るほど肉ではなく、野菜、ポテトのモモであった。

初めて肉入りのモモを食べたのはバックキャラバンで、カトマンズにあと1日と迫った町デュムレであった。

直径2~3cm位の肉入りモモを屋台でオヤジとオフクロが作りながら売っていた。

1皿10ルピー、おいしく何回も食べる。なんの肉だか、もうどうでもよい。

ナワンとラジュマンがやってきて笑いながら「道端でモモを食うとは余り行儀良くない」と言った。

### 2. キル

砂糖で甘く味付けしたミルク粥。キャラバンの朝食によく食べた。あまり体調の良くないときでも甘味につられてよく食べた。

### 3. ヌードルスープ(即席ラーメン)

ネパール製(?)の「ワイワイ」というインスタントラーメン。ベースキャンプで食料係の内田君がしきりに「ワイワイ」、「今日はワイワイ」などと騒いでいるので新しいギャグかと不審に思っていたのだが、何の事はないラーメンの名前だった。

### 4. ニワトリ

ヒンズー教徒は牛を食べないので鶏をよく食べた。しかし、注意して見ていると肉屋ではヤギ、ヤクなども売っているようである。特に仏教徒が多くチベット色が濃くなってくる北部へゆくと牛もかなり食されているようだ。

ところで肉屋といっても土間に肉の塊が並べてあるだけのものだ。

食堂で、ダルバートのおかずになると頼むと、煮込んで堅くなった骨ごとぶつ切りにした鶏肉の小片が出る。これが高い（今にして思えば30円くらいだが）。

キャラバン中は鶏を1～2羽程買い、料理する事が多かった。しかしそれも、奥へ行くと不可能になってくる。ナル・コーラへ入ってゆくと鶏そのものがいないのだ。

鶏が自由に買えたのは、コトまでであった。

### 5. ヤク

雄は大きな角があり「恐くて近寄れない」という動物であった。標高4000m以上のカルカで放牧されていた。帰りには荷を背負わせて帰ることにした。プー村のヤク使いが荷物をくくりつける間、隊員たちは遠巻きにして見ていた。あまり飼い慣らされておらず暴走して荷物を落としたり能率は良くなかった。

ヤク、ヤギを飼っているプー・ガオンでは、その肉も食べている。

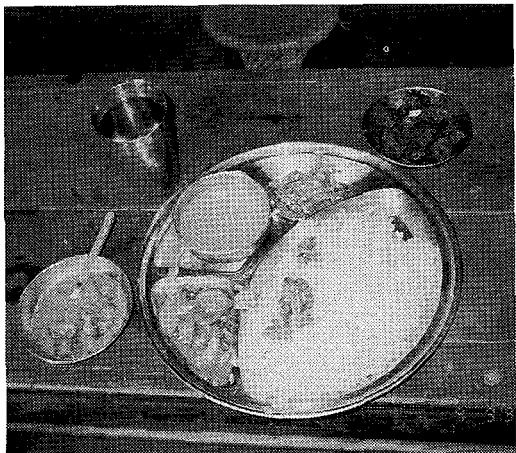
### 6. ヤギ

プー・ガオンでは鶏がなく、ヤギを1頭買い、ベースキャンプまで持って上がり約3週間程かけて少しづつ食べた。キッチンテントの奥にぶら下げられ、ときどき見では「まだ肉があるな」と安心するのであった。ヤギは、キッチンボーイのプラカス君により解体され料理されていった。

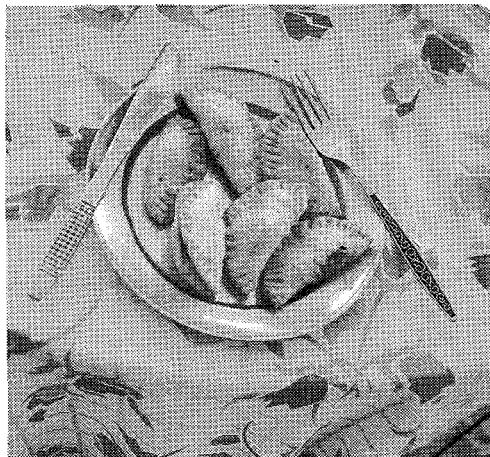
### 7. 乾肉

ネパール奥地へ入ってゆくと乾肉が手に入る場所が所々ある。

たとえばコトの周辺など。



ダルバート



ベジタブルモモ

## 8. ダルバート

ダルは豆の意味でブラックダルとホワイトダルがある。これを煮てスープにする。ダルは日本でいえば味噌汁みたいなもので各家庭での味付けがあるのだろう。

バートは飯である。日本同様、炊いた飯であるが、手で食べられるようにさましてある。

ダルバートはもっとも基本的なネパール食で食堂でも安いメニューである。少量のタルカリをおかずに大量の飯を食べるというのがネパール奥地の基本食であるようだ。

今回は、高所キャンプ以外はすべてネパール食でありダルバートに親しんだ。

## 9. タルカリ

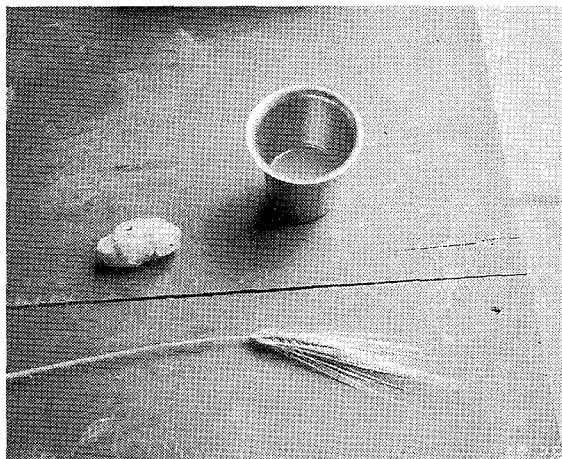
タマネギ等の野菜を香辛料と共に煮付けたもの。ご飯のおかずである。味はカレー味からカルダモンの香り高いものや様々であった。

## 10. ツアンパ

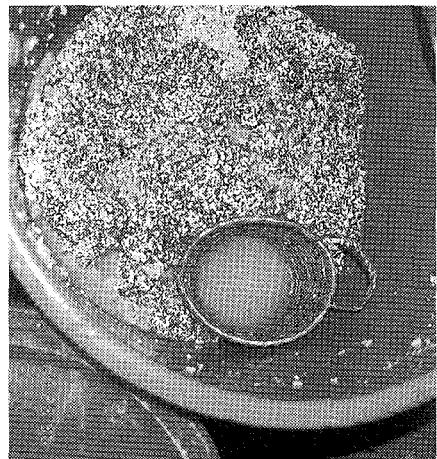
麦粉。ネパール北部へ入りチベット文化色が濃い地域で多くみられた。茶と練って食べることが多いが、そのままでも食べる。

## 11. 蕎麦ガキ

ソバ粉を湯、またはチベッタンティーで練り、そのまま食べる。ポーター達を見ていると非常に大量に食べる所以驚く。



マルツア（中央の丸いもの）とクル（麦）



バケツの中で発酵するチャンと濾過を行うためのカゴ

### 12. チューラ（干し飯）

プー・ガオンからコトまでの食料難の道中、シェルパやポーター達はポケットから何やらつかんでは食べている。それは飯を乾燥させたチューラであった。噛んでいると口の中でゆっくりと甘味が広がり、結構おいしい。

### 13. チョウメン

焼きそば、蒸しそば。ネパール中部、北部の町の食堂で食べている人をよく見た。黄色から赤色の辛いもの、野菜入りのものなどいろいろあり。

### 14. ビール

マルシャンディ街道ではどこでも飲める。国産のサンミゲル、ライセンス生産のツボルグ等をよく飲んだ。どこに醸造所があるのか。カトマンズは水質が良くないので醸造所がないそうである。

### 15. チャン、ロキシー、リンゴ酒

チャンは雑穀を使用した酒である。アルコール度数を測定出来なかつたが（腐らぬように日本まで持ち帰れない）、感覚的にはビール程度である。

行路は体調を崩さないように禁酒していたが、登頂後の帰路は、チャンやロキシーを常に飲みながら歩いていた。雨季明けの乾燥した良い天気の中、遠ざかるヒマラヤを振り返りつつ、ほろ酔い加減で歩いているとなんと幸せなことかと思う。

チャンは店、家により真っ白な乳酸飲料から、褐色のまさにドブロクといった感じのものまで様々であった。

ベースキャンプから 1 週間ほど歩いたマルシャンディ街道・コトの宿屋のチャンは香り高くかなりおいしい方であった。

ロキシーはチャンを蒸留したもので、アルコール度数30%～40%位である。他にリンゴ酒（アップルワイン）もあり、おいしかった。

コトの宿屋の親父さんであるチューラッパ・ラマ氏にチャンの作り方を教えてもらった。話の内容から推察すると以下のようになるらしい。

#### 1) 原料仕込み

米、麦と雑穀（「クル」と言っていた）を混ぜ 5～8 kg とする。これを煮る（澱粉をアルファ化する）。

#### 2) 糖化

さめたら水を切り、袋に入れる。これに「マルツア」と呼ぶ種菌を入れる。雑貨屋で 1 個 5 ルピーで売っている。

夏はマルツアを少なめに、冬は多めにする（夏は温度が高く糖化が行き過ぎ、冬は温度が低く糖化が遅いためであろう）。

マルツアを入れたら布をかぶせ保温して 1～2 日置く。

#### 3) 酵発

袋から糖化が進んだ原料を取り出し、バケツかカメに入れる（どこでもプラスチックのバケツは重宝されている）。適当に水を入れ 4～5 日酵発させる。

#### 4) 濾過

客が来たら上澄みを汲んで飲ませる。この宿屋では竹で編んだカゴをバケツに入れて濾過していた。場所によっては布で濾過するところもあるようだ。

だいたい上記のようにしてチャンができる。「マルツア」には糖化用のかびと酵発用の酵母や乳酸菌が混ざっているのである。

サーダーのヌル隊員に聞くと「マルツア」は小麦を人が手で練って乾燥させて作るそうだ。自分の母親も作っている。自家製も有れば店でも売っているという。

どこで売っているのかというと、チューラッパ氏が笑って雑貨が詰まれている棚から出してきた。研究用にと 1 個買った。

ところで、チューラッパ氏には娘 2 人がおり、小学生の小さな方は朝から夜まで実によく働く明るいかわいい子供であった。

どんな田舎であってもチャンはあり、酒と人間のつながりの深さを感じずにはいられない。

## 医 療

金子鉄男 澤田克彦

### 1. 概略

登山隊のスタッフとしてネパール側から優秀なドクターが参加してくれたので、非常に助かった。しかし、キャラバン開始3日前に医師の選考が決まったこともあり、日本から持ち込んだ医薬品について十分な説明をドクターにできなかった。

ドクターは新たに邦貨にして5万円近くの医薬品を購入しており、かなりの薬が重複していた。

別表の日本から持ち込んだ薬価だけでも18万円かかっている。今後、この類の無駄をさけるためには、事前にリスト交換して無駄を省く必要があると感じた。

日本から持ち込んだ薬（別表）の使用状況では、トローチは高山病の初期症状の咳止めに愛用された。日焼け止めクリームとして今回もアイビー化粧品から「プロテクターUV365」の寄贈を受けたが、これも非常に好評であった。

澤田隊員が、ビフィズス菌製剤を持参してきていたが、下痢の防止、整腸効果と淡い甘味があり好評であった。

ビタミン類は、2度に分け配布し、使用については個人にまかせた。

下山途中に、ドクター自ら骨折する事故があったが、ネパール医療品の中に固定用のギプスを作る石膏包帯があったのはさすがであった。

使い方は簡単なので、骨折後の腫れに対応できるように開放して使う方法を知っていれば、初期治療として非常に有効だと感じた。

同じく今回はテーピングのテープを用意しなかったが、日本での技術講習を含め、今後は検討に値すると思う。

下山後、かなりの日本側医薬品が余ったが、医薬リストと照合できるラベルを各薬に貼り、ネパール警察学校（病院）に寄贈した。

（金子 記）

### 2. 医療係の実務

医療係の主な仕事は、国内では医薬品集め、低圧室、予防接種の奨励、ネパールで

は医薬品の追加購入、管理等であった。

医師の確保については主に実行委員会で行ってもらった。

高山病に対しては、遠征前に田辺の経験をもとに講習を行い、登山中は各自の自己管理により高所順応は比較的うまく行われた。

登山隊員の高山病、重度の凍傷等、生命に関わる重大事はなかった反面、ネパール側スタッフの病気、骨折があり救急ヘリを2回、依頼する事態となった。

### 1) 医師の手配

登山許可が下りた段階で、学士山岳会員(O B)のなかから医師への隊員要請が開始された。しかし、医師として多忙に活躍している人の中で、3カ月の休みを取る事ができる人はなく、O B以外でも探したが適当な人が見つからなかった。

結局、ギャジカンの時同様、決まらないまま、ネパール側に一任した。その結果、ネパール警察病院から、シュレスタ医師が派遣された。

このように医師で登山も出来る若手会員がいない学士山岳会では、日頃から救急処置と薬の知識を持ち、国内外いずれでも自己、あるいは他の隊員の健康状態を配慮し、応急の処置、搬出操作などを現実に充分起こりうる事実として訓練しておく必要があるだろう。

### 2) 医薬品の確保

#### ①日本での準備

信州大学学長の小川先生、学士山岳会員の兵庫医科大・藤元、愛知医科大・師田、丸子中央病院・山田の諸氏、又、旭川医科大・金子氏に、それぞれ医薬品を準備をしていただき大変お世話になった。

②日本の薬局で買えるものは澤田が購入した。

#### ③ネパールでの医薬品購入

シュレスタ医師が必要と思われる物を購入し、不足の物を澤田が購入した。

薬局は、ネパールポリスアカデミー前の道路を北へ10分ほど歩いたところにあり、バンドエイド2000枚、ガーゼ10本、包帯10本を2000ルピーで購入した。わりに大きな薬局であったが、バンドエイドは枚数が揃わず、店員さんが他の薬局へ行ってくれた。

湿布薬は数軒の薬局をまわったが入手できなかった。

これらの細々した買物は、実に時間を取られるので、日本で購入しておいた方が良い。

### 3) 低圧室

当初、医学部の低圧室にて7000mの高度の体験とデータ取りを兼ねて、低圧体験を



タルにて付近の住民を  
診察、治療するシェレ  
スタ医師

する事が隊員から提案された。

その後、医学部と交渉したが、医学部の都合と、平日しか実施できないので社会人の隊員の参加が難しく、また、数回以上入らないとトレーニングにならない事から中止した。これに関してはかなり興味があったので残念であった。

#### 4) 栄養面

キャラバン中、ベースキャンプではネパール食を多用した。栄養面では蛋白質が不足がちであったが、穀類、野菜は普通に摂取できたので、繊維、ビタミン不足の心配はなかった。むしろ日本での様々な化学品が混入した食事から天然に近い食事になって、一時期、体内の洗浄が出来たのではないか。

帰りのキャラバンでは「肉を食べたい」との声もよく聞かれた。

#### 5) 予防注射

コレラ、A型肝炎ワクチンの予防接種を奨励したので、ほぼ全員が接種して出国した。

接種してくれる病院は地域の保健所で紹介してくれ、2回の接種が必要なので遅くとも1カ月前から始めなければならない。有効期間は、2回接種で6カ月、3回で3年である。

保険がきかないので、1回5000～7000円くらいの費用である。

## 7) 酸素

今回は無酸素登山で医療用としてのみ酸素を持参した。

レギュレータ、ポンベをカトマンズで購入した。

ベースキャンプで左半身が麻痺したペンバに吸わせたのみで、他は使用しなかった。

## 8) 保険

保険会社、数社を当たり調査したが、適当な条件のものがなく、野村、金子以外は郵便局の簡易保険に加入した（掛金7万7175円／6人、死亡時保証500万円／人）。

金子、野村は東京海上火災保険に加入した（掛金24万6380円／人、死亡時保証500万円）。

## 9) 高山病対策

高山病対策については、無理な行動をしない事、必ず毎日高度順応運動を行う事、そして毎日、水を4l飲む事を隊員全員で確認し、そのように義務づけた。

これらの事はよく守られた。

「登山の医学」でふれられているアダラート（利尿剤）の使用については個人の選択にまかせた。服用する人としない人でそれ程、有意差があると思えなかった。服用すると、かえって夜間のたびたびの小用がわざらわしくなるのではないか。

今回は中年以上のメンバーも多かったためか、皆、高山病予防にはかなり気を使い、新しい高度に達したら、必ず周囲のより高い地点（高度差100～200mくらい）への登降を繰り返し、高所順応運動を行った。

また、ベースキャンプは、5200mの高度であり、4500mの地点でかなりの時間、高度順化を繰り返したことが高度障害患者を出さずに済んだ要因と考えられた。これは今回の登山の成功の一因で、高度順化は登山の成否と直結する事がよく分かった。高度と登山活動の関係（Bパーティを例に）を次頁の図に示した。

## 10) 虫、害虫

高度が上がるにつれ、害虫は少なくなる。

キャラバン中はダニ、南京虫に悩まされる人もいた。シュラフカバーに防虫剤を入れることでかなり防げるようである。日本より殺虫剤を持参した。

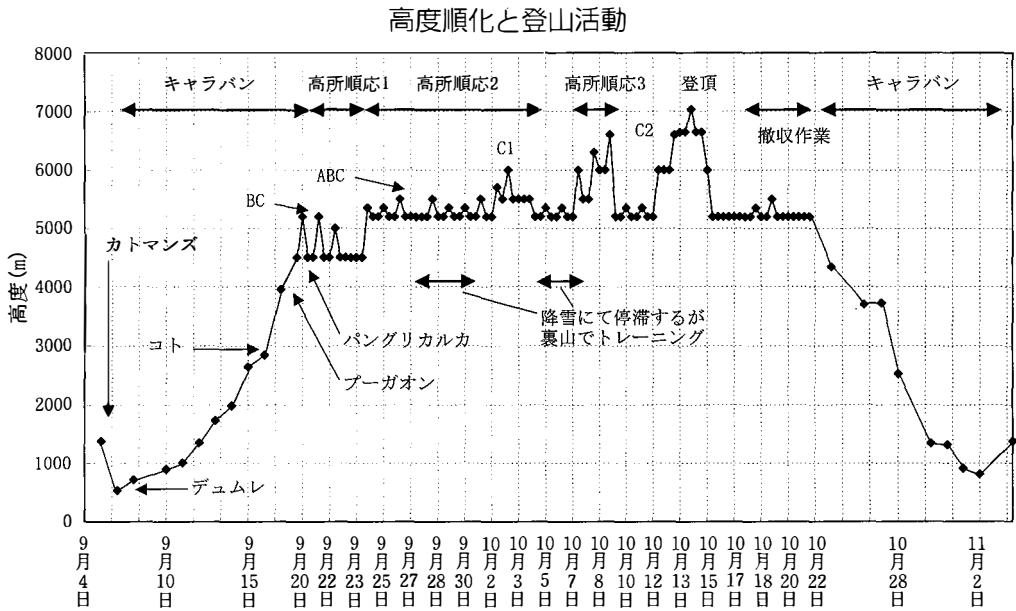
ダニの被害は、どういうわけか花谷や小林といった若年の学生に多かった。彼らはフェロモン様物質を発しているのではないかと話題になっていた。

虫刺されもありひどくなると行動や気分に障害を来すが、今回はそれほどでもなかったようだ。

雨季のキャラバンで気になるのがヒルである。

スパッツや長靴をはくと、ある程度防止できるのかもしれないが、ヒルはかなりしつこく靴下の上から侵入してくる。

## 2 登山報告



見た目が気持ち悪いが、血を吸うだけなのであまり気にしなくてよい。塩を靴下に塗りこんでおけばよいという説もある。

傷口からの出血が止めにくいので、バンソウコウやバンドエイドが必携である。

### 11) 捻挫、骨折

今回はネパール側に故障者があった。

特に、帰りのキャラバンでシュレスタ医師の骨折、フル隊員の捻挫があり、前者はコトからヘリコプターで、後者はロバで帰還した。

#### ①骨折

足首近くの骨折だったので固定が難しく、包帯のように患部に巻き付け、水をかけると固まる固定用包帯が非常に有効であった。

帰りのキャラバンで何でもない少し下りの山道であったのだが、降雪の後であり、運動靴で歩いていて足を滑らせ転倒した結果であった。

#### ②捻挫

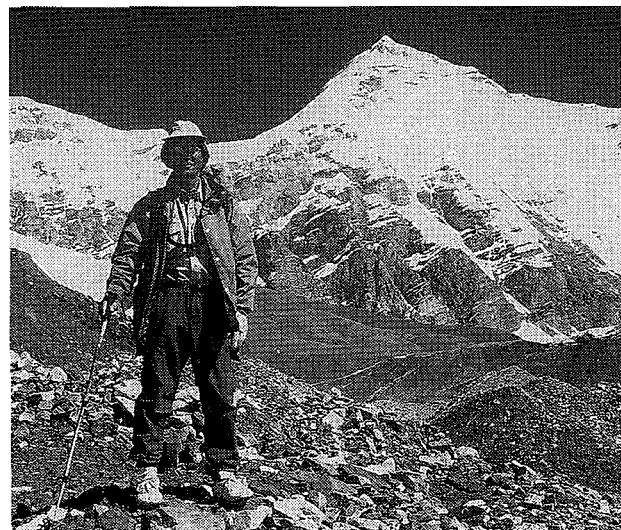
捻挫には湿布薬を塗布したが、固定用のテープがなかった。

足首の捻挫だったので長時間、歩けず、ロバに乗って移動してもらった。

(澤田 記)

## 3. 健康管理

各自の自己管理に任せ、高山病対策以外は特別な事を行わなかった。



BC～ABC間で高所順応を行う野村総隊長

係として澤田の健康管理について述べるので、今後の登山の参考となれば幸いである。

### 1) 風邪の予防と睡眠

ネパールでひいた風邪は治りにくい。

1993年のアンナプルナⅡ峰偵察隊に参加した時は、デュムレで風邪をひき高熱を発し鼻水を垂らしながら今回と同コースを歩いた苦い経験があり、今回は風邪に気をつけた。

デュムレから、マルシャンディコーラに入ると高度も1000m以下となり、亜熱帯気候となる。日中最高気温も、30℃を超える雨季の高温多湿時期であるが、夜は冷える事もある。

高度が2000mを超え、涼しくなるまで昼夜の寒暖差に気をつけた。

前回、デュムレで風邪をひいたのは、シャツ1枚で寝転んでいたためである。

高度4000m位まではシュラフカバーとコンパクトシュラフ（羽毛200gのビバーク用）を組み合わせ、それ以上で高所用羽毛シュラフ（羽毛1000g）に寝る事にし、蒸し暑い夜からマイナス20℃まで気温に対応してよく眠れるようにした。

学生の頃の冬山では凍ったシュラフに寝るのが常であったが、登山が長期化すると疲労も蓄積し睡眠にも気を配った方がよいと考え、快適によく眠った。

### 2) 下痢の予防

下痢をすると消耗するし水分も失われる。

下痢は悪性の感染症の事もあるが、環境の変化、食事の変化による腸内細菌叢の変化にもよるので、出来るだけ腸内細菌叢を一定にしてみようと考えた。

そのために出国1カ月前から、腸内細菌製剤（具体的には *Bifidobacterium* 属菌）

## 2 登山報告

を飲み続けた。ネパール国内へ入っても同様にした。その結果、入国、数日は少し違和感あったが、すぐに慣れる事が出来、下痢に悩まされる事がなかった。

また、生水を飲まない事はもちろん、道ばたで売っている果物、チャン（自家製の酒）も遠慮した（但し、帰りのキャラバンでは、歩きながら毎日飲んでいた）。

腸内細菌製剤は、飲むのをやめると腸内に定着しない。これが不思議である。

### 3) 咳

モンスーンが明け高度4000m以上になると、乾燥のためか咳が非常に出やすくなる。イソジンを約10～30%溶液とし、毎日うがいを行った。

トローチも割によく効いたが、余りなめていると口中が痛くなる。水分摂取と衣服にも気を付け、体を乾燥させない事が必要である。

### 4) 高所順応

自分が新しい高度に達したら、脈拍などを測定し何日くらいで順応するのか観察した。その結果、自分の場合、2日後に強く頭痛、吐き気が出る事が分かり、以後、これを指標にして、この期間は無理な行動を避けるようにした。

しかし、10月14日のアタックにおいては、途中でタクティクスが大幅に変更された関係で体調も狂い、高所キャンプC 2の高度6550mでは、頭痛に悩まされた。

## 4. 予算と実績

国内では医薬品購入に19万3204円、保険料に（8人分）32万4000円の費用を使った。

また、ネパールでの医薬品購入費は約4万円であった。

従って、約54万円を医療・保険で消費した。予算は10万円であったので赤字であった。

## 5. 参考文献

- 1) J. A. ウィルカーソン：登山の医学、東京新聞出版局（1993）
- 2) J. A. Wilkerson : Medicine for mountaineering & another wilderness activities, The mountaineers (1992)
- 3) 村井 葵：高峰への挑戦、岳書房(1979)
- 4) 文部省：高みへのステップ、東洋館出版社(1992)

## 医薬品リスト(日本調達分)

適 用	NO.	薬 品 名	単 位	合 計
風邪薬 (for Common cold) (upper Resp Tract In)	1	PL 顆粒 1gr	pack	440
	2	ダンリッチ	cap	60
	3	SP トローチ	tab	480
去痰剤(痰をきる)	4	ビソルボン 4mg	tab	252
	5	ムコソルバン 15mg	tab	100
解熱・鎮痛剤 (analgesics) (antipyretics)	6	バッファリン		200
	7	セデス G		1000
	8	Voltaren 25mg	tab	314
胃腸薬 (for gastric ulcers)	9	セルベックス 50mg	cap	600
	10	エクセラーゼ 1gr /包	包	84
	11	三共胃腸薬	包	100
	12	大正漢方胃腸薬	包	100
下痢止め・整腸剤 (for diarrhea)	13	ラックビー	包	1000
	14	ビオフェルミン R	tab	1000
	15	ロペミン 1mg	cap	230
	16	正露丸	大瓶	1000
	17	アドソルビン 2g /包	pack	0
利尿剤 (diuretics)	18	ラシックス 20mg	tab	50
	19	ダイアモックス		178
鎮痙剤 (for abdominal pain)	20	ブスコパン	tab	200
降圧剤 (for hypertension)	21	アダラート L 10mg	tab	268
抗生素 (antibiotics)	22	ケフラール 250mg	cap	184
	23	セフゾン 100mg	tab	224
	24	メイアクト 100mg	tab	168
	25	ルリッド 150mg	tab	100
	26	ミノマイシン 100mg	tab	0
	27	クロロマイセチン 250mg	tab	200
	28	バクシダール 100mg	tab	0
ビタミン剤 (vitamins)	29	ビタメジン (s)	cap	1000
	30	アリナミン F		1000
	31	ハイシー	顆粒	500
	32	ユベラ N 100mg	tab	420
	33	カリクレイン 10 IU	tab	420
うがい薬 (for sore throat)	34	イソジンガーゲル 30ml	本	22
口腔炎用剤 (for aphtha)	35	アズノール ST	tab	100
	36	アフタッヂ	tab	100
皮膚に使う薬 (for skin)	37	ゲンタシン軟膏 10gr	本	8
	38	アズノール+ゲンタシン混合軟膏	gr	50
	39	アズノール軟膏	gr	200
	40	リンデロン VG 軟膏 5gr	本	10
	41	ユベラ軟膏	gr	1500
	42	モビラート 50gr	本	6
	43	インテバン軟膏 25gr	本	24
痔 (for hemorrhoids)	44	プロクトセディル座薬	個	140
	45	プロクトセディル軟膏 2gr	個	140
水虫用 (antifungal agents)	46	ラミシールクリーム 10gr	本	6
皮膚消毒用剤 (skin disinfectant)	47	イソジン	ml	1000
	48	イソジンゲル 90gr	本	2
	49	70%エタノール	ml	1000
	50	マキロン		0
	51	オキシドール		0
目薬 (eye solutions)	52	普通の目薬	本	5
	53	タリビッド点眼 5ml	Vial	20
	54	リンデロン点眼 5ml	Vial	20
日焼け止めクリーム (UV-cream)	55	プロテクター UV365	本	12

## 環境保全

内田健一

未踏峰に大きな登山隊が登るということは、多かれ少なかれ、その土地を初めて人が汚染するという行為を伴うであろう。

今回の登山の計画段階で、日本隊員により確認されたことは、当地の汚染をできるだけ少なく、環境を保全したいということであった。

### 1. キャラバン

コトまでのアンナプルナ街道沿いでは、すべてバッティ（宿屋）泊まりであった。したがってゴミ類の処分については、基本的にバッティにお願いした。また、ほとんどすべてのバッティにトイレがあり、利用した。コト以降においては、朝のキャラバン出発時に焼却処分した。

### 2. ベースキャンプ

#### 1) 燃えるゴミ

キッチンテントの横にドッコを置き、燃えるゴミ用ゴミ箱とした。ベース撤収時にはすべて焼却処分した。

#### 2) 生ゴミ・水物等

キッチンテント横に深い穴を掘り、そこへ廃水を流すことにより処分した。ベースキャンプ撤収時に、この穴を埋めて帰った。

#### 3) カン、ビン類、およびプラパール

カン、ビン類、およびプラパールを分別してためておき、下山時にアンナプルナ街道まで下ろした。また、プラパールは、現地プー・ガオンの村人に寄贈した。ちなみにプー・ガオンのラマ教の山寺タシ・ゴンパの窓は、ガラスの代わりに1994年のギヤジカン隊のプラパールが用いられていた。

#### 4) 使用済み電池

ポリタンクに回収して、すべてカトマンズまで持ち帰って処分した。

## 5) トイレ

トイレを2カ所に設置した。縦1m、横1m、深さ1m程度の穴を掘り、足場用の石を置きトイレ用テントを作った。ベースキャンプ撤収時に埋めた。

## 3. 高所キャンプ

## 1) 高所食のゴミ

前進ベースキャンプ、高所キャンプC1のゴミについては、すべてベースキャンプまで持ち帰った。高所キャンプC2のゴミについては、最後に残った食料を雪に掘った穴に投棄した。

## 2) トイレ

水用の雪を取らない場所（たいていテントの下側）で各自用を足した。特にトイレは設けなかった（仮に作っても、雪が降った後では発見できなかっただろうが）。

## 3) フィックスロープ

高所キャンプC1までのロープはすべて回収した。C1～頂上までのロープは隊員の生命の安全、登山期間等を総合的に検討、隊員間で議論した結果、残置やむなしとの結論に至り残置した。

## 4. 考察と反省

日本やカトマンズで食料品の外箱等、不要な包装ができる限り取り除き、必要最低限の包装にして山に持ち込んだ。しかし、やはりある程度のゴミは、必ず発生する。

現地の環境を保全するためには、極力ゴミになるものを持ち込まないことと、それでも発生するゴミの処分方法であろう。燃えるゴミの現地での焼却という方法は、決して最良の方法とは言えないだろうが、現状では次善の策というところか（1996年当時、伊那市西箕輪の我が家でも燃えるゴミは各家庭で燃やしていた。その後、日本国内ではダイオキシン類の発生等が社会問題化し、1998年現在では回収されている）。

前回、信州大学とネパール警察が合同で行ったギャジカン遠征の報告書では、ネパール隊員との習慣の違いにより、ゴミの焼却や、トイレの使用に際して若干の問題があったと報告されているが、今回そのような問題はほとんど発生しなかった。トイレや排水溝の設営に関しても、ほとんどネパール隊員が作業してくれた。このあたりはラナ隊長の考え方がしっかりと行き渡っているようである。但し、高所キャンプでのゴミの取り扱いに関しては、ネパール隊員は多少、雑なところがあった。

C2でのゴミの投棄と、C1～C2間のフィックスロープの残置が今回の登山での反省点である。

今回のように天候が悪く、期間がおしこみた状態での登頂では、すべてのゴミと

## 2 登山報告

ロープを回収するタクティクスを立てると、登山の安全性を犠牲にすることになる。結局、私たちは、それよりも全員の安全な登山を目指したのであった。

すべてのゴミをベースキャンプに持ち帰るという原則からすれば、やはり、若干山を汚染した結果となった。これに関しては、これからも各山岳会、登山隊で議論を深め、よりよき方法を研究、実践、報告していただければ幸いである。

# 気象

澤田克彦

気象係は、できるだけ気象を予想し、気象データをとる事を目的として活動した。

登山時期がポストモンスーンなので、キャラバン中はモンスーン後期で雨に悩まされるが、ベースキャンプに入ってからは好天の中、登山ができると考えた。

また、最近の信州大学の遠征報告書にはいつも具体的な気象データが載っていないので、今回は温度や気圧くらいは測定し、後の参考にしようと準備した。

キャラバン開始後、ブー・コーラへ入ってから雨季明けのようであったが、登山活動中、たびたび降雪に見舞われ、楽に登頂できるはずであったのが、10日延期となってしまった。

帰りも降雪の中の下山であり、かなり気象条件に左右された登山であった。

## 1. 気象の記録

プラパールを利用して百葉箱を作り温度、湿度、気圧の記録を行った。

ベースキャンプ気象台観測要員は花谷、小林、澤田である。

温度計については、温度センサーがサーミスタでデジタル表示の物を宮崎助教授から貸与していただいた。

温度計をベースキャンプ、高所キャンプ2（C2）に設置したが、C2の温度計はマイナス20℃を指したまま壊れてしまったので、ほとんど計測データがない。

毎日の天気、温度、気圧を文末に示した。

## 2. 気象予報について

### 1) 気象ファクス

気象の大局的状況を簡便に把握しようと船舶用の気象ファクスを持参した（短波放送を受信して世界の天気図が印字されて出てくる物である）。

装置についてはせっかく宮崎先生に援助いただいたのに全く使えなかった。

原因としては以下の事が考えられた。

①日本で十分リハーサルしなかったので、放送時間帯を把握するのに苦労した。

## 2 登山報告

- ②周囲を山に囲まれた地形で電波状況が悪くアンテナも不十分であった。
- ③消費電力が大きく（プリント時約100W）、常にビデオのバッテリー充電とバッティングするため常時受信できなかった。

気象ファクス使用時の消費電力換算した燃料を持ってゆくべきであった。

### 2) 気象ファクスの周波数

出発前の多忙に紛れて周波数を調べるのを忘れ、キャラバンが始まつてすぐボテオラから国際電話を掛け、宮崎先生に調査依頼した。一方、ラナ隊長に相談しネパール警察でも調査してもらった。

その結果、ベースキャンプに着いて登山活動が本格化するまでには周波数が判明したが、日本からのチャートが不鮮明に受信出来たのみでインドからの放送は遂に受信出来なかった。

いずれにせよ日本での入念なテ스트ランが必要で、これを怠った結果と反省している。尚、参考のために周波数を表-1、2に記載した。

## 3. 気象と行動への影響

### 1) 9月のカトマンズ

雨季のカトマンズの空は、常時曇り時々雨の天気であった。傘は必携である。

### 2) キャラバン（9月6日～9月19日）

コトまでは曇り、雨が多く、ヒルも発生し一部の人は食われたようだ。

コトのナル・コーラ出合は増水のため橋が流され、岸も削られているので、ヘツリが難しい上に落石も多く、非常に危険な状態であった。

ポーター達のためにフィックスロープを張った。

ナル・コーラ奥のキョンから徐々に晴天が多くなり、ブー・ガオンからベースキャンプ建設時は天候も安定し、雨季明けを宣言した。

### 3) 登山中（9月20日～10月21日）

#### ①9月27日～29日 雪

ベンバが右半身不随となり、搬出のためヘリコプターを要請したが、マナン地方全域雨、雪で飛ばず気をもんだ。10月1日に、ようやく、ヘリコプターが飛来しベンバを運んでいった。一同安堵する。但し行動は全面停滞した。

#### ②10月2日～5日 雪

再び雪にて沈殿、行動日数が制約される。モンスーンが戻ったようである。

近くのマナスルの緊迫した交信が時折入る。迷惑にならないように交信周波数を変えた。タクティクスを真剣に議論した後は雪だるまを作ったり、夜は歌合戦を行った。

表-1 ニューデリーの放送周波数とスケジュール

周波数(kHz)	4993.5	7403	14840	18225		
電波形式	F3C	B9W	B9W	F3C		
放送時間(開始)	14：30	14：30	2：30	2：30		
(終了)	20：30	2：30	14：30	14：30		
出力(kW)	8	10	10	15		
放送スケジュール						
種類	ASAS	AUAS85	AUAS70	AUAS50	AUAS30	FSAS
UTC 00時データ	06：20	7：10	7：28	7：46	8：04	8：22
UTC 12時データ	18：20	19：10	19：28	19：46	20：04	20：22
送電時間(分)	18	18	18	18	18	12

(信州大学宮崎助教授、ネパール警察本部、B.R.Paudel 警部補による)

表-2 カルカッタの放送周波数

周波数(kHz)	6676	11837
----------	------	-------

(ネパール警察本部 B. R. Paudel 警部補による)

## ③10月 6 日～20日 曇～晴れ

1、2、3次アタック成功。1次アタックは悪天の中の登頂であったが、2、3次は好天の中に恵まれた。

気象条件から、これが最後の登頂の機会であり我々は幸運であった。

## 4) バックキャラバン (10月22日～11月 3 日)

## ①10月22日 曇り

アンナプルナ方面から雪雲がなびき、明らかに悪天の兆しが現われた。撤収を急ぐも、プー・ガオンのポーター達のサボタージュに手こずり出発が午後4時になった。この半日の遅れが、その後の行動に大きく影響した。

## ②10月23日～27日 雪～霧～雨

高度が下がるにつれ雨となり、悪天の中、食糧もなくなり空腹のまま下山した。雪のため当初予定していたカン・ラ峠を越えホンデから空路をあきらめ、往路を忠実にたどる事にした。シュレスタ医師が雪道で足を滑らせ転倒、足首骨折。担いで降ろす。

## ③10月28日 雨

雨の中、コトに着き次第、ヘリコプターを要請するが、雨のため1日待機、10月28日夕方、3時に飛来しシュレスタ医師の救出が終了した。

## ④10月29日～11月 2 日 晴れ

ようやく秋晴れといえる天候になり、バックキャラバンを楽しむ雰囲気になった。



10月22日 ベースキャンプ撤収、悪天を告げる雪雲、荷物を運ぶヤクとヤクを恐れて遠まきに眺めている隊員達

#### 4.まとめ

- 1) 気象状況にかなり左右された登山であった。2回の雪で登山行動が約1週間遅れ、帰りのキャラバンでも、雪とポータートラブルのため3日ほど遅れた。このため、計10日ほど予定より遅れ、カトマンズへ帰つてからの行動を非常に多忙にさせた。
- 2) 気象ファクスは使えず、観天望氣をこまめに行いカトマンズの天気予報をラジオで聞いた。
- 3) 気圧の変動と温度から天気を判断したが、気圧の大きな変動なく予測は難しかつた。
- 4) 今回は雪に閉ざされる寸前にベースキャンプを脱出出来たが、山奥であると大雪による長期間の停滞を余儀なくされることもあるだろう。
- 5) 衛星放送による天気図の電送はネパール半分くらいで切れ、当地をカバーしていないとのことで最初から検討外であった。
- 6) 気象ファクスは軽量小型だが、短波放送なので受信環境が良ければ使える。
- 7) 電子機器を使おうと思えば、それに見合う分の燃料、発電、蓄電設備、およびそれを運ぶ人が必要なので国内で扱いを十分習熟した上で持参すべきである。

## 気象

キャラバン～ラトナチュリベースキャンプの気象

(BC:ベースキャンプ、ABC:前進ベースキャンプ、C1:高所キャンプ)

(C2:高所キャンプ2、TS:テントサイト)

気圧はアボセット社バーテック腕時計型高度計を用いて測定、高度は気圧換算値

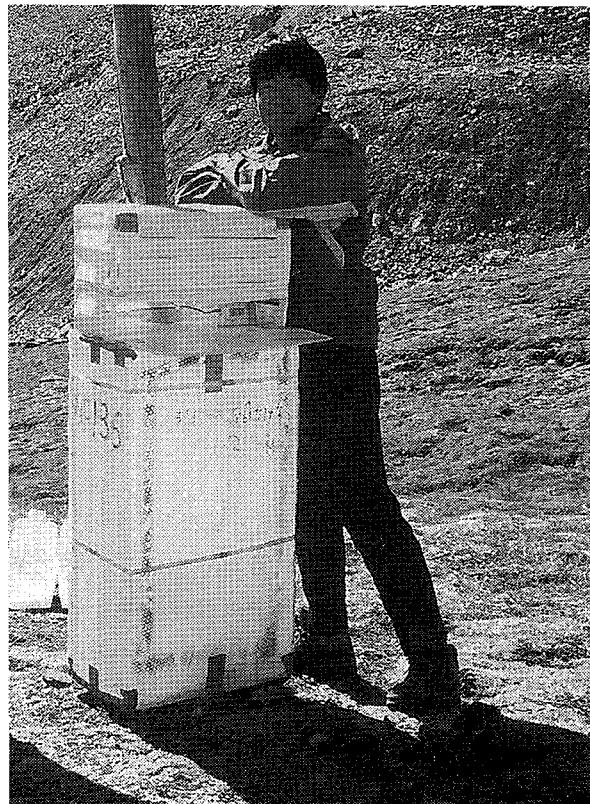
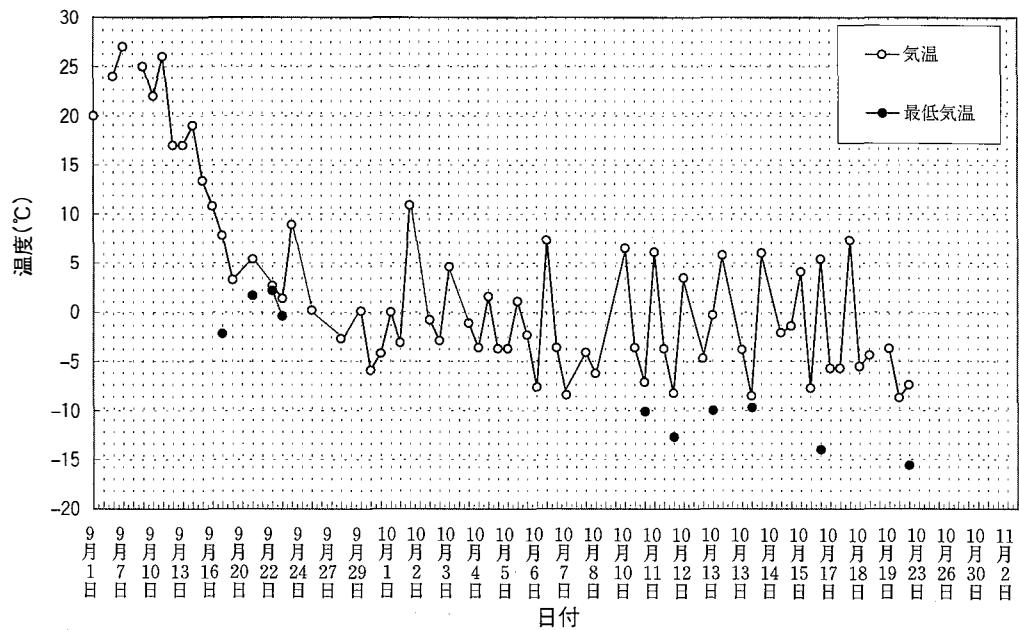
月 日	場 所	天 気	時 : 分	温 度	最 低 温 度	気 圧	高 度
				(℃)	(℃)	(hp)	(m)
9月1日	トリュバン空港	雨	18:10	20			
9月4日	カトマンズ	晴れ					
9月6日	カトマンズ	晴れ	5:30	24			1380
9月7日	ドゥムレ	晴れ	6:30	27		1015	540
9月7日	トゥレトゥレ	晴れ	12:00	31			575
9月8日	ボテオラ	雨	11:40				720
9月9日	ボテオラ	曇り後雨	6:00	25			
9月9日	ベシサラ	晴れ	12:00	30			
9月10日	ベシサラ	曇り	5:40	22		925	900
9月10日	ナガッティ		11:45	26		913	1010
9月11日	ナガッティ	雨	6:00	22		912	1020
9月11日	シャンゲ	曇り	13:30	29		892	1200
9月12日	シャンゲ	雨	7:30	17		895	1350
9月12日	タル	曇り	14:00	24		836	1745
9月13日	タル		6:00	17		836	1730
9月14日	ダラバニ	曇り	6:00	19		810	1990
9月14日	コト	曇り	16:00	16		746	2655
9月15日	コト	雨	6:00	13.4		747	2645
9月15日	チャチャ TS	曇り	16:00	15.1		723	2905
9月16日	チャチャ TS	曇り	6:00	9.7		724	2840
9月16日	メタ TS		16:00	12.9			3525
9月17日	メタ TS	晴れ	7:00	5.8		663	3540
9月17日	キャン TS	晴れ	20:00	8.2		640	3815
9月18日	キャン TS	晴れ	6:55	2.2		641	3800
9月18日	ブー・ガオン TS	晴れ	12:25	14.1		628	3970
9月19日	ブー・ガオン TS	晴れ	5:45	6:00	-2.2	629	3950
9月19日	バングリカルカ TS	晴れ	14:00			590	4435
9月20日	バングリカルカ TS	晴れ	6:00	3.3			4435
9月20日	BC	晴れ	10:00			547	5015
9月21日	バングリ・カルカ TS	晴れ	6:00	5.4	1.7	692	4410
9月22日	バングリ・カルカ TS	晴れ	6:00	2.7	2.2	595	4385
9月23日	バングリ・カルカ TS	晴れ	6:00	1.4	-0.4	594	4385
9月24日	バングリ・カルカ TS	晴れ	6:00	8.9		594	4385
9月25日	バングリ・カルカ TS	晴れ	6:00	0.4		584	4500
9月25日	BC	晴れ	6:00	0.2		555	4985
9月26日	BC	晴れ					
9月27日	BC	雪					
9月28日	BC	雪後晴れ	6:00	-2.7		548	5000
9月28日	ABC	雪	13:00				5370
9月29日	BC	雪後晴れ	6:00	0.1		547	5020
9月30日	BC		6:00	-5.9		549	4985
10月1日	BC	晴れ	6:00	-4.2		538	
10月1日	ABC		10:25			525	5320
10月2日	BC	雪後晴れ	6:00	-3.1		539	
10月2日	BC	晴れ	12:00	10.9		534	
10月2日	ABC／C1中間地点		14:31				5495
10月2日	BC	雪	18:00	-0.8		539	
10月3日	BC	曇り	6:00	-2.9		538	
10月3日	BC	曇り後雪	12:00	4.6		531	
10月3日	C1		12:00				5780
10月3日	BC	霧	18:00	-1.1		538	
10月4日	BC	雪	6:00	-3.6		531	

## 2. 登山報告

月 日	場 所	天 気	時 : 分	温 度	最 低 温 度	気 圧	高 度
				(℃)	(℃)	(hp)	(m)
10月 4 日	BC	雪	12:00	1.6		538	
10月 4 日	BC	雪	19:25	-3.7		537	
10月 5 日	BC	霧	6:00	-3.7		535	
10月 5 日	BC	曇り後雪	13:00	1.1		529	
10月 5 日	BC	曇り	18:00	-2.3		535	
10月 6 日	BC	晴れ	6:00	-7.6		536	
10月 6 日	BC	晴れ	12:00	7.3		530	
10月 6 日	BC	曇り	18:00	-3.6		535	
10月 7 日	BC	晴れ	6:00	-8.4		535	
10月 7 日	C1		15:10				5780
10月 7 日	BC	霧	18:00	-4.1		536	
10月 8 日	BC	晴れ	6:00	-6.2		537	
10月 8 日	C1				-21		
10月 9 日	ラトナチュリ西峰頂上		11:00				6730
10月10日	BC	晴れ	12:00	6.5		529	
10月10日	BC	晴れ	18:00	-3.6		536	
10月11日	BC	快晴	6:00	-7.1	-10.1	535	
10月11日	BC	快晴	12:05	6.1		530	
10月11日	BC	曇り	18:00	-3.7		537	
10月12日	BC	快晴	6:00	-8.2	-12.7	536	
10月12日	BC	晴れ	12:05	3.5		531	
10月12日	C1		14:00				6000
10月12日	BC	霧	18:55	-4.7		538	
10月13日	BC	快晴	7:00	-0.3	-10	539	
10月13日	BC	快晴	12:00	5.8		532	
10月13日	C1		13:30		-17		6600
10月13日	BC	霧	18:00	-3.8		538	
10月14日	BC	曇り	6:00	-8.5	-9.7	536	
10月14日	BC	晴れ	12:00	6		532	
10月14日	ラトナチュリ頂上	曇り	12:10				7035
10月14日	BC	曇り	18:00	-2.1		536	
10月15日	BC	曇り	6:00	-1.4		534	
10月15日	BC	晴れ	12:00	4.1		528	
10月15日	BC	雪	18:00	-7.7		534	
10月17日	BC	快晴	12:00	5.4	-14	531	
10月17日	BC	快晴	18:00	-5.7		537	
10月18日	BC	快晴	6:00	-5.7		537	
10月18日	BC	快晴	12:00	7.3		531	
10月18日	BC	快晴	18:30	-5.5		537	
10月19日	BC	快晴	6:00	-4.4		538	
10月19日	ABC		10:30				5800
10月19日	BC	曇り	18:00	-3.7		537	
10月20日	BC	快晴	6:00	-8.7		536	
10月21日	BC	快晴	6:00	-7.4	-15.6	537	
10月23日	パングリ・カルカ	曇り	6:00			597	4340
10月24日	ブー・ガオン	曇り後雪	7:00				
10月25日	キャン	雪	8:25			649	3700
10月26日	キャン	雪	7:00			647	3730
10月28日	コト	雨	7:00			752	2530
10月29日	コト	晴れ					
10月30日	ジャガト	晴れ	14:50			870	1345
10月31日	ジャガト	晴れ	8:30			874	1320
11月 1 日	ナガッティ	晴れ	7:00			917	915
11月 2 日	ベシサラ	晴れ	7:00			928	815
11月 3 日	ドゥムレ	曇り	7:00				

## 気 象

### キャラバン～ベースキャンプの気温



ベースキャンプにて、百葉箱と花谷

## 記録、通信

澤田克彦

### 1. 記録内容、及び方法

#### 1) 毎日の行動記録

登山隊の行動については一定の書式の行動記録用紙に手書きで毎日記入し、高所では各パーティ毎に行動記録を記載、提出してもらった。

記録はほとんど漏れなく詳細にとれ、今後、この地域に関心のある人に参考になると考えている。

#### 2) 緯度、高度

携帯型の測量機器(ガーミン社、G P S 38型)を購入し、各地点の緯度、経度、移動距離を測定した。

高度は各隊員持参の腕時計型高度計、(株)サクセンから貸与していただいたトーメン社製高度計を用いて測定した。

#### 3) 日本への連絡

ギャジカン遠征時の連絡の悪さを反省して、今回は「ネパール通信」と称してキャラバン、ベースキャンプ建設、登頂など折々に行動概略を記載したものを作成し、メイルランナーに託しカトマンズの旅行代理店コスマトレックを経由して、日本への連絡を行った。

ネパール通信の著者を渡部隊長にお願いした。メイルランナーが出る前夜は遅くまで隊長のテントに明かりが灯っていた。

### 2. パーソナルコンピューターの活用

ノート型パーソナルコンピューターをベースキャンプまで2台持参し、コンピューターに記録を直接入力して報告書作成をスピードアップしようと考えたが、使える人と使えない人がいて効果を十分に發揮できなかった。若年層になるほど使えないという奇妙な現象が見られた。

持参したパソコンは東芝からソフトとともに提供されたノート型パーソナルコンピューター、プリンター、金子さん個人のP C - 98ノートであった。使ったソフトは

ロータス、エクセル、一太郎、ウインドウズ3.1版など。

パソコンは円、ルピー、ドルの3種の通貨が入り乱れる会計計算や、タクティクスの変更に伴う行動予定表の作成に威力を発揮した。

### 3. 通信方法

#### 1) 日本への報告

実行委員会宛、信濃毎日新聞社宛の原稿はメイルランナーに託され、カトマンズの旅行代理店・コスモトレックへ届けた。そこからファクシミリで大学（農学部・宮崎実行委員長）、実行委員会（藤松事務局長）、および新聞社（信濃毎日新聞）に送付された。

#### 2) 一般の郵便

カトマンズでは中央郵便局（G P O）にて投函、航空便（葉書24ルピー、封書48ルピー）で送ると、日本まで約1～2週間で着いていた。

ベシサハールの郵便局から書留を出したところ、料金は書留料金30ルピーであった。

### 4. メイルランナー

ベースキャンプからカトマンズまで徒步、ロバ、馬、車、バスなどあらゆる手段を使い、最短約7日で到着。買い物、コスモトレックへの連絡も頼るので、かなり責任のある仕事で土地勘があり信用できる者が担当する。

今回はアルジュン隊員、オンディ隊員が担当した。

出発時には、郵便物、撮影済みのフィルム（コスモトレックにD H L依頼）を各隊員から集め、日当と交通費を渡すので会計、記録係は結構忙しい。

以下にメイルランナーの内容を記した。

#### 1) 1回目 9月14日アルジュン出発（コト→タル→カトマンズ→B C着 9月31日）

風邪のため体調を崩した内田、花谷隊員の連絡に金、手紙を託す。

帰りは家族からの手紙を多数持ってくる。K B Y君は女性からの手紙が多い。雪で静かなベースキャンプが明るくなる。

#### 2) 2回目 9月16日ゴパール（メタ→タル）

花谷のサポートのため、金、手紙を運ぶ。ゴパール君は、もともとポーターの一人であったが、よく働き態度も立派であったため臨時の連絡係になってもらった。

#### 3) 3回目 10月1日

左半身が麻痺したベンバをカトマンズへ降ろすためにヘリコプターが飛来。若干の郵便物を託した。エンジンも付き添いで行くはずだったが、飛来したヘリコプターが小型であったため乗れず、がっかりしていた。軍用でない民間の小型ヘリコプター



ベースキャンプにてメイルランナーからの手紙に喜ぶ金子（左）と小林

では、5200mの高度は到達可能ぎりぎりの高さである。

4) 4回目 オンディ：9月28日BC発、10月10日BC着

手紙、撮影済みフィルムをコスモトレックへ届け、買い物（葉書、切手、フィルム）を依頼した。

5) 5回目 オンディ：10月28日

バックキャラバン遅れを各方面に連絡、シュレスタ医師の付き添い兼ねてヘリに同乗し、警察学校への連絡を依頼した。

本来の意味でのメイルランナーは2回であった。渡部隊長はこまめに日本向け通信を書いていたので、もう一回出してもよかったです。

しかし、日本の実行委員会との通信は割と良好であったようだ。

## 5. 電話

キャラバン中に各村の電話設置状況を調べてみた。マルシャンディ街道はトレッカーが多く、3年前のアンナプルナⅡ峰北面偵察時より格段に電話が普及していた。

### 1) 国際電話

カトマンズ：タメル地区には電話、ファクシミリ屋がいたる所にありよく利用した。早朝（午前7時）から夜遅くまで（午後9時頃）まで開いている。

デュムレ：町外れに一軒、電話屋がある。但し国内のみ。

ベシサラ：Tele communication center（交換手1人、電話1台）があり国際電話できる（午前7時～午後7時）。

バフンダンダ：丘を登りきった所のパン屋の向かいの雑貨屋兼電話局1軒あり。国際電話できる。

ダラパニチベッタンホテル：ロッジ兼電話局、国際電話ができる。

チャーメ：電話局1件あり（午前7時～午後7時）。

コト～パー・ガオン：電気、電話なし。

## 6. ファクシミリ

カトマンズのみ使用できたが、チャーメでも警察か役所にあるらしいと聞いた。

## 7. 無線

### 1) トランシーバー

日本隊はケンウッド製、ネパール隊はモトローラ製の充電タイプを使用した。

周波数145.0MHzで使用していたが、近くのカングルー、マナスルに登山している日本人、ドイツ人、フランス人パーティの混信があった。

特に小西政継氏のマナスル隊と混信するので、周波数を145.0MHzから145.5MHzへ変えた。

### 2) 警察無線

ネパール隊は大型の無線機を持ち、平坦なところであれば数十メートルのアンテナを張りカトマンズと交信していた。

ベシサラ、チャーメには警察の通信隊があり、強力な無線通信機がある。又、各チェックポストにも無線機があるため、パウダル隊員（ネパール警察本庁通信士）はカトマンズおよびこれらの支所と交信していた。

これにより数々のトラブルを救ってもらい感謝している。

往きのキャラバンでは風邪をひいて本隊から別れて行動していた内田、花谷隊員への連絡を快く引き受けてくれた。

ベースキャンプではベンバを下界に降ろすためのヘリ要請、カトマンズ、ネパール各地の天気、気象ファクスの周波数調査などに協力してくれた。

帰りのキャラバンでは先にコトについた我々は、まずチャーメの警察署長に面会を求める、シュレスター医師の骨折の件を告げ、ヘリコプターの手配、カトマンズでの病院の手配等を依頼した。

## 8. 言語

1) ネパールの公用語はネパール語と英語である。英語はカトマンズ～デュムレ～コトではよく通じた。しかし子ども、若者はよく通じるが、中年以上の人には通じない

## 2 登山報告

こともあり、やはりネパール語ができるとよい。

2) ナル・コーラからプー・ガオンの住民は、チベット語を常用しているのか、ネパール語も通じないことがあった。英語もほとんど通じない。

3) プー・ガオン、タシ・ゴンパのラマ僧は少し英語が出来る。

4) BCの撤収時にプー・ガオンから多くの住民が仕事を求めて交渉にやってきてチベット語で大騒ぎしていたが、サーダーのヌル・シェルパとビシュワ・シュレスタ医師が交渉に当たるのみで、他のネパール隊員も言葉が通じないと面倒なので近寄らない。

## 9. ビデオ撮影

今回はデジタルビデオ（日本ビクター製）を SAVAより借りて使用した。金子隊員の完璧な作業によりキャラバンから登頂、撤収のキャンプファイアまで詳細に記録することが出来た。

## 10. 写真撮影

記録用として、1眼レフ（ミノルタSR-1s、ロッコール50mm）、コンパクトカメラ（京セラコンタクス-T2、カールツアイスゾナー38mm）、中盤カメラマミヤ-7を持っていった。

（株）マミヤより提供のあったマミヤ-7（6×7版カメラ）は、内田隊員専用として撮影してもらい、大きく伸ばす必要のある山岳写真に威力を発揮した。

フィルムについては、信濃毎日新聞社からリバーサル用フィルムを「フジクローム・プロヴィア36枚撮」80本提供していただいた。

また、ナル・コーラ以外の街道筋ならフィルムはどこでも買える。フジ、コダック、コニカが多く、ほとんど36枚撮りで、12、20枚撮りはあまり見られない。価格は日本と同じくらいであった。

小林と澤田でキャラバン出発から帰りまで、できるだけ順を追って撮影した。

信濃毎日新聞社宛のフィルムは撮影次第、メイルランナーに託し、カトマンズのコスモトレックからDHLで信濃毎日新聞社へ郵送した。

## 11. まとめ

未踏の地に行くのであるから記録方法に何か工夫をと考えたが、ごくありきたりの内容になった。

日本への連絡については、渡部隊長の勤勉により数回の通信文書が出せ、よかったですと考えている。

メイルランナー、無線、電話やファクシミリなどいろいろ通信手段を用いたが、未踏の地に行くのであるから音信不通もあり得る。

最近の大かがりな遠征隊では衛星利用の電話、ファクシミリなど通信手段は著しく進歩を遂げているが、未踏の奥地では燃料がなくなると、これらの機械は使用不能となり、最後の手段は歩くことしかない。

今回の登山隊では、せいぜいパソコン、ピデオを使っただけだが、それでもそれを使うにはエネルギーが要り、エネルギーの元（化石燃料）を担ぎあげ環境を汚すという当たり前の事が改めて認識された。今度、このような機会があったら出来るだけ道具を持たないというのも良いだろう。様々な通信道具を用いた衆人監視のなかの登山では未踏の雰囲気も薄れがちだなどと思うこともあった。

## 12. 謝辞

ノート型コンピューターを提供していただいた東芝（株）、カメラを提供していただいた（株）マミヤ、スライド用フィルムを提供していただいた信濃毎日新聞社（株）、郵便物、ファクシミリ等、日本との連絡中継をしていただいたコスモトレック・大津二三子氏に感謝いたします。



第三次アタック隊の帰還。前列左より、シヴァ  
コティ、金子、ヌル、内田、小林、ダンバル

## 2. 登山報告

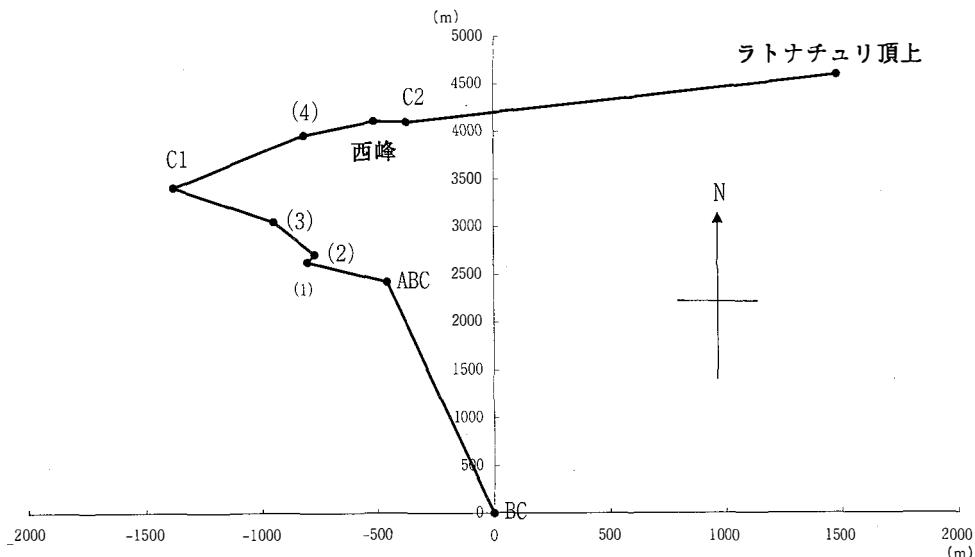
### GPS 測量

ハンディ型の GPS 測量器械として、重量が小型カメラ (300g) 程度のガーミン社製の GPS38型の GPS をキャラバン及び登攀の合間に使用した。装備の項目に記載したが高度データーはバラツキが大きく(プラスマイナス100m程度)信頼できなかつたが、緯度・経度データーは距離換算で50m程度の精度に収まつてゐる感じであつた。地図が緯度・経度の精密なメッシュを切つてあれば充分实用に耐える製品であるといえる。以下に実験データーと座標換算値およびベースキャンプからの登攀平面図を参考に添付しておく。(金子)

### GPS 測量抜粋

地 点	実 测 値		座 標、单 距 離				
	緯度(X成分) 度 分	経度(Y成分) 度 分	座標 1 (m)		单距離 両座標	座標 2 (m)	
			Y 座標	X 座標		Y 座標	X 座標
カトマニズ	27 41.938	85 21.387	-29,387	150,354	共通(m)		
ノガテイ	28 00.000	84 00.000	0	0			
メタタ	28 18.540	84 23.934	29,997	44,216	0		
キヨン	28 39.287	84 14.278	63,356	26,377	37,829		
ブーガオン	28 43.047	84 15.808	69,378	29,204	6,652		
パングリ・カルカ	28 46.229	84 16.454	74,469	30,397	5,228	登はん平面図(参考)	
ベースキャンプ	28 47.585	84 19.221	76,636	35,509	5,552	BC 原点座標	
A B C	28 49.021	84 21.677	78,931	40,046	5,084	0	0 BC
	28 50.538	84 21.428	81,353	39,586	2,466	2,423	-460 ABC
氷河上(1)	28 50.667	84 21.243	81,559	39,244	399	2,629	-802
氷河上(2)	28 50.717	84 21.259	81,639	39,274	85	2,709	-772 (2)
氷河上(3)	28 50.931	84 21.163	81,981	39,097	385	3,050	-950 (3)
C1	28 51.157	84 20.929	82,342	38,664	563	3,411	-1,382 C1
西峰肩	28 51.500	84 21.233	82,889	39,226	784	3,958	-820 (4)
西峰	28 51.592	84 21.398	83,036	39,531	338	4,105	-515
C2	28 51.586	84 21.474	83,026	39,671	141	4,096	-375 C2
ラトナチュリ	28 51.895	84 22.478	83,520	41,526	1,919	4,589	1,480 PEAK
BC							

### GPS 測量による登攀平面座標



# 会 計

澤田 克彦

## 1. 概略

澤田、小林で今回の会計業務を行った。

会計係の具体的な仕事は、まず登山隊の口座を作るところから始まり（今回は4月12日）、国内、ネパールでの準備中、登山中の物品購入、給与支払い等の出納業務、現金管理、帰国後、未払い金の処理を行い、翌年（1997年）4月19日に業務を終了した。

国内の準備では通常の出納業務を行った。

出国してからは、ルピー、円、ドルの3種類を扱い、カトマンズでの準備、キャラパンでの出納業務と予算管理を行った。

キャラパン中は現金管理、宿屋へ支払い、ポーターへの支払い業務を行った。

ベースキャンプ滞在中も、メイルランナーへの買い物依頼、旅費支給や野菜を売りにくるプー・ガオン商人への小口の支払い等、結構やる事があった。

カトマンズ帰着後は日数が少なかったので、ネパール側への給料支払い計算や、パーティ費用の見積もり、支払いなど多忙であった。

会計監査については学士山岳会員の井関氏に行っていただいた。

会計業務については、隊員から「あまり細かくやると小林の頭が変になる」、「もっとラフでよい」などの批判があったが、支援していただいた方々の貴重な寄付から成り立っている資金をできるだけ正しく有効に消費せんがためと厳正に行った。

尚、頭脳明晰な小林君は、特に頭が変になったようには見えなかった。あるとすれば高度のためだろう。

## 2. 予算

前回のギャジカンを参考に実行委員会で約1300万円と予算を組んだ。

予算編成に当たっては、もう少し精密に考えればよかったです。前回は群馬岳連の装備を借用しネパール側装備代も安かった事が先入観としてあった。

## 2 登山報告

### 3. 寄付、集金

#### 1) 隊員負担金と寄付

隊員負担金については学士山岳会員（卒業したOB）は100万円、山岳会員（学生）50万円として計700万円を集め、残り600万円を学士山岳会と一般寄付で貯うこととした。

#### 2) 学士山岳会の寄付集め

実行委員会・藤松事務局長を中心に、OBに1995年4月より1口1万円で寄付を募った。その結果、8月までに約400万円が集まった。

#### 3) 一般企業からの寄付

多くの企業から寄付をいただいたが、中でも金子隊員の勤務先である横河工事株式会社からは破格の寄付をいただき予算達成に多大に貢献された。

#### 4) 一般物品の寄付

実行委員会の森田、宮崎、藤松らが中心となり装備品の寄付活動に当たった。その結果、テント、ザイル、アルカリ乾電池、リチウム乾電池、ノートパソコン、フィルム等、高額商品を多数寄付していただき装備費を節約することが出来た。

上記のように実行委員会、学士山岳会、企業の皆様の絶大なご協力により、8月には全予算が達成でき、ご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

### 4. 業務詳細、及び支出状況

#### 1) 国内費

国内での準備活動が本格的に始まった7月より支払いが発生し、8月は特に業務が煩雑であった。7月の松本での梱包作業から8月31日の最終買い物が終わるまでに、356万8618円を支出した。

#### 2) 国外費

①ネパールでは873万3183円相当の金を支出した。

②日本円からネパールルピー換金の平均レートは、1ルピー=1.897円であった。

日本円から米国ドル換金の平均レートは、1ドル=111.04円であった。

#### ③通貨

ネパール国内で使う通貨はネパールルピー、米国ドル、日本円の3種類があり常に複雑になった。

ルピーで支払ったもの：生活費一般

ドルで支払ったもの：登山費用、空港使用税、医療用酸素、救助ヘリコプター代、パーティ費用の一部

円で支払ったもの：ホテル代の一部

## ④外貨換金

持参した外貨を一括換金しようと、カトマンズ市南部タパタリにある、ネパールラストラ銀行 (Nepal Rastra Bank) へ出かけ外貨窓口へ行った。

ところが、サリー姿がよく似合う職員に、ここでは両替できないので都市銀行を紹介してあげましょうと極めて丁寧に教えてもらった。

どうも場違いなところへ珍入してしまったようで恐縮する。しかし、ついでにと銀行内を観察させてもらう。

換金については、1回20万円までで、これは従来から変わらない制度である。

タメルではタクシーや三輪車がたむろする付近のビル2階のヒマラヤ銀行 (Hi malayan Bank) が朝7時から夜7時まで営業していた。

その他、ニューロードのエベレスト銀行 (Everest Bank, 但し1回10万円まで)、カンティパス通りの北にあるグリンダレイス銀行 (Glindlays bank) などへ行った。変わったところではウツツエレストランのすぐ近くに、ヒマラヤ銀行 (Hi malayan Bank) の支所がある。間口2mくらいの小さな事務所であるが、ちゃんと外貨交換も行ってくれた。

タクシーに乗り銀行めぐりをすると効率的で、一人で1日、200万円ぐらい換金できた。

## 3) キャラバン出発前の仕事

## ①すべての支払いを済ませる

支払いの主な項目はネパール隊員装備代、保険料、救助用ヘリコプター資金デポ、装備代、食糧買い出し費用、プジャ（祈祷）代などである。

交通費についてはタクシー、三輪車などをよく利用するので小額紙幣をあらかじめ一定額を隊員に渡して交通費専用とすると混乱がなくてよい。

## ②キャラバンに必要な予算を見積もる

往復のトラック代を7万5000ルピー、ポーター代を50万4400ルピー（=175ルピー×174人×13日+600ルピー×174人+帰りの旅費4150ルピー）、帰りのポーター代25万ルピー、キャラバン中の昼食代を8700ルピー（150ルピー／人・日を支給、ちなみに9月10日の澤田の昼食は、サイダー45ルピー、ヌードル30ルピー、モモ50ルピー）、キャラバン宿泊費10万ルピー（朝食、夕食込み〔5000ルピー／日×29人〕×20日）とそれぞれ見積もり、合計約100万ルピー（約200万円）あればよいと考えた。

## ③ネパールルピーへの換金

カトマンズから出れば、ドル、円は通用しないので、カトマンズで手持ちの現金をルピーに変えておく。

しかし余ったルピーはバンクレシートの10%までしかドルに換金できないので、

## 2 登山報告

予算を良く考慮して使いきり前提で円、ドルをルピーに換金した。

カトマンズ以外では、チャーメには銀行があり外貨交換窓口もあった。

ポーター用賃金は特に少額紙幣で支払う必要があり、タパタリ (Tapatali) のネパールラストラ銀行 (Nepal Rastra Bank) でポーター用賃金の20万ルピーを小額紙幣に換金した。一般国民用窓口でヌル隊員、フル隊員に守られながら小額紙幣に換金した。

内訳は100ルピー紙幣が1000枚、50ルピー紙幣が1400枚、20ルピー紙幣が500枚で計3900枚の小額紙幣をそろえた。

周囲の人々が仰天したように見ている中で枚数を確認した。

### ④キャラバン出発前の現金確認

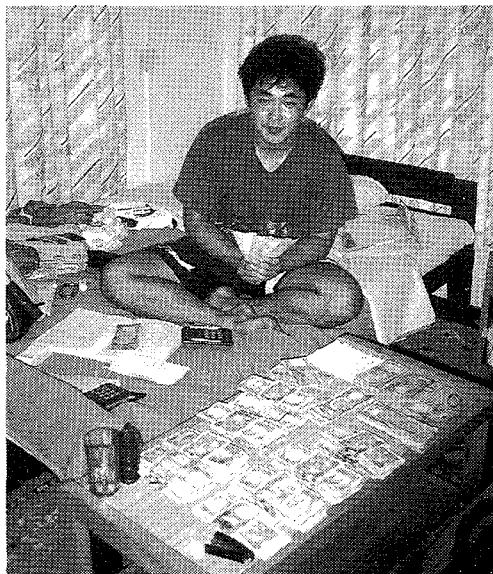
ネパールルピーとして111万9139ルピー、日本円として174万5379円、米国ドル6044ドル、合計日本円にして約470万円を現金で持ち、キャラバンに出発した。

キャラバン出発の前夜、皆、ダルバールホテルへ最後の豪華な食事へ行ったが会計係は業務が間に合わず閉め切った蒸し暑いコリアンホテルで、小林君とおびただしいネパール紙幣を何回も数えているうちに深夜となった。

ようやく終わり、2人で人気の少なくなったタメルの一角に明るい灯がともる中華料理屋へ走った。

### ⑤現金の管理

アタッシュケースに入れ常に手に持っていた。ショルダーバッグ、ザックは盗難の危険性大と思う。



カトマンズの宿舎にて深夜、金を数える小林

## 4) キャラバン中の仕事

## ①食費の支給

全員に昼食代を支給した（150ルピー／人・日）。ネパール側にはまとめて支給していたが、種々の理由から個人々々に支給した方がよい。

## ②バッティ代の支払い

マルシャンディ・コーラ沿いは各所に宿屋（バッティ）があり、毎朝、全員出発した後で宿代を計算してもらい支払った。1日3000～4000ルピー／全員（29人）。

## ③食糧代の支払い

キャラバン中の夕食に使う、野菜、肉を各々の村で購入した。

## ④燃料代

灯油、ヤクの乾燥糞などを購入した。

## ⑤ポーターへの支払い

ポーターはベースキャンプで荷物を下ろし給料をそこで受け取る。この時、担いできた金を自分で支払いたかったので田辺、内田と同じ日にBCまで上がった。

ところが、高所順応不十分で気分が悪くなり、相当時間がかかってBCに着いたが計算どころでなく、サーダーのヌル隊員に任せ全部金を渡して寝転んでいた。

ポーター達は賃金をもらい、杖一本をもって嬉しそうに、BCからかけ下りて行った。

## 5) ベースキャンプにて

## ①メイルランナー

メイルランナーが出る前夜は忙しい。記録の項で述べたように買い物内容の確認と買い物費用、郵便代、メイルランナーの交通費など、いろいろ手渡す物がある。

## ②食料の購入

未踏峰のベースキャンプには誰も来ないだろうと思っていたが、4000mのプー・ガオンから娘達がジャガイモ、ロキシーなどを担いで売りに来ていた（たくましい！）。それらを購入し、その都度、小額紙幣で支払った。

常時やってくる娘達はバックキャラバンでポーターとしてついてきた。

彼女たちにとっては大都会のベシサラで嬉しそうに、あちこちの店で買い物をしていた。カトマンズまで行くかと聞いたら「とんでもない、帰ります」と答えていた。遠くまで来すぎたと思ったのだろうか。

## ③切手、はがき

通信用に絵はがき300枚、エアメール封筒100枚、便せん、切手10,000ルピー一分を購入した。はがきは良く使われたが、封書は筆まめな小林隊員以外、ほとんど使う人がいなかった。

## 2 登山報告

### ④会計出納簿の作成

沈殿の日などをを利用して、ベースキャンプで表計算ソフトを使って会計出納簿を作成した。3種の通貨が入り交じっているので高度の影響で暗算もめんどうになり有効であった。

## 6) 下山後、カトマンズでの業務

### ①救助ヘリコプターの支払い（2回分）

1回目 ヒマラヤヘリコプター (Himalayan Helicopters PVT. LTD)

10月1日 カトマンズ～ベースキャンプ 往復 2.5時間で14万3250ルピー

2回目 ダイナスティ航空 (Dynasty Aviation PVT. LTD)

10月28日 カトマンズ～チャーメ 往復 1.9時間で1900USドル

合 計 約50万円

### ②ネパール側給料とボーナス

ミーティングで意見を出し合い、最終的に野村総隊長、渡部隊長に査定額を決めもらった。封筒に表計算で作成した明細書と現金をルピーで入れ、封筒に氏名を印刷しネパールポリスで個別に渡した。

### ③祝賀パーティ

11月6日、カトマンズのホテルシャンカールにて行った。

前渡し金3万ルピーを含め計32万円、来客150人ほどの立食パーティを行った。

食事の量、とり進めも適切で非常によい雰囲気のパーティであった。

### ④打ち上げパーティ

11月8日、ウツツエレストランで日本、ネパール隊員のみでチベット料理「ジャコック」を囲みなごやかに過ごした。1万2000ルピーであった。

### ⑤帰路の航空券

帰りの航空券は予約しなくともこの時期は大丈夫との予想を裏切り、天候不順で帰国する観光客が殺到し、なかなか予約できず混乱した。

オンディ、田辺両方で別れて手配したが、ビジネスクラスで86万円／8人（関西4人、成田4人）であった。

ビジネスクラスとしたのは、登山装備をできるだけ持ち帰ろうとしたためである。

## 7) 帰国後の業務

### ①立替分精算

ネパールへ寄付したモンベルテントのフライを新規購入、ネパール警察への送付料など。

### ②会計監査

学士山岳会・井関芳郎氏に依頼し、資料、領収書が精査され、1997年4月19日に

監査が終了した。

#### 4. まとめ

##### 1) 決算

報告書代として約200万円を残したかったが、救助ヘリコプター 2回分、ネパール側装備費値上げが予期できず残金は79万7320円であった。

2) 金銭管理については、キャラバン中のルピー不足、紛失、盗難などの事故なく、無事登山を終える事が出来た。

3) 予算をできるだけ守ろうとしたが、1)に述べた予想外の出費があった。

#### 5. 会計余話

##### 1) 高い頭

キャラバン1日目。荷物チェックも終了、ナイケとの細かい打ち合わせも終わり、ほっとして茶屋でミルクティーを飲んでいた。

小林君がこぎれいな頭をしている。

「散髪をしてきました」

「なるほど、それでいくら？」

「300ルピーです」

このとき既にネパール物価になっていたので、昼食2~3回分とは高いなあと思ったが、近くに座っていたジョシさんに、

「コバヤシダイの散髪代が300ルピーだそうですが、そんなもんですか」

と聞いてみた。その途端、ジョシさんは笑い出し、腹が痛いという表情で他のネパール隊員にも話している（ダイ=君、さんの意味）。

あちこちで爆笑の渦が沸き起こり、小林君だけが不思議な顔をしている。

普通は30ルピー程度だが、小林君はネパール語が判らないので、すっかり散髪屋の親父にしてやられたのだ。

しばらくネパール隊員は笑っていたが、ジョシさんは急に警察官の顔に戻り、小林君を連れて散髪屋に行った。

結果として親父は払い戻しをさせられたが、次に散髪をしてもらった金子さんの出来は余り格好よいとは言えなかった。

##### 2) 肉を食べたい

帰りのキャラバンで食糧も欠乏してきた。時々、日本人隊員から、ヤクの肉を食べたいと希望が出る。

ヘリコプター代やら装備代で予想外の出費があったため、キャラバン中はできるだ

## 2 登山報告

け節約していた。「けちだ」「渋い」と言われてもヤクの肉は高価なので知らん顔をしていた。しかし、どうも今夜は買わざるをえない雰囲気だ。

たまたま、その日、プー・ガオンでヤクを殺したので手に入るようだ。ラジュマンやナワンに買いに行ってもらう。

プー村には電気も冷蔵庫もないから、肉が常時売られているわけでもないのだ。

たき火を囲んで久しぶりに食べる肉はさすがにうまく、あっと言う間に隊員の腹に消えていった。

一緒に買った燃料（ヤクの糞を乾燥させたもので非常によく燃える、無煙無臭）が高かったが、ヤクの肉が高いのだから、その糞も高いのかと妙に納得していた。

### 3) 踊りと寄付

帰りのキャラバンでジャガトに着いた。山間部の十数戸の小さな村である。

シュスマロッジという婦人の経営する宿でくつろいでいた。

夕方、庭でチャンを飲み陶然としていると、主人のシュスマさんが地元のマザークラブの役員を伴ってやってきた。

夕食後、民謡とネパールダンスを行うので寄付が欲しいという。

帰りのキャラバンでは、あちこちで水害で崩壊した道の補修工事が手作業で行われていたし、マザークラブというのも知っていたのでまあいいでしょうと、1000ルピーを寄付した。

夜6時、夕食を済ませた時、婦人と子供達20人程がやってきて歌と踊りを披露してくれた。

我々もベースキャンプで時々、ネパール隊員と歌合戦を行って楽しんでいたのであるが、このマザークラブの歌と踊りは、かなりローカルな、その地の正統派盆踊りのような感じであった。

そのうち何処かで一杯やってきた連絡将校のジャヤ氏と通信士パウデル氏がやってきた（彼らは各種踊りの名手である）。

絶好のチャンスとばかり、彼らはマザークラブの中に入り踊りだし、そのうちジャヤさんが司会をするいつもの歌番組になってしまった。

マザークラブの計画はめちゃくちゃになってしまった。婦人会会長は渋い顔をしているが、近隣の人も見物に来て、たいそうな人だかりとなり、周囲の爆笑と共に夜はふけていった。寄付がジャガト周辺の路をよくしてくれる事を祈るばかりである。

### 4) ラナ隊長

キャラバン出発前、下山後はネパールポリスへ支払いにゆくことが多く、内容が納得できない場合、いちいち、ラナ隊長に内容の説明を求めていたので、ラナ隊長は「日本隊のマネージャーは、なかなか細かいな」と苦笑いしていたかもしれない。

ラナ隊長は事務所にあっては、しつこい質問に白い歯を見せて穏やかに答えてくれ、また、ベースキャンプでは会計係が高所キャンプへ上がっている時には現金を預かってくれた。

#### 6. 謝辞

寄付をいただいた方々、企業、また、資金集めに奔走していただいた方々に、我々8名にこのような貴重な楽しい登山をさせていただいた事を心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

## 2. 登山報告

### 信州大学ネパール警察合同ラトナチュリ登山隊隊費決算書

#### 収入の部

項目		予算(円)	実績(円)
国内収入	個人負担金(学士)	6,000,000	6,000,000
	個人負担金(学生)	1,000,000	1,000,000
	学士山岳会、一般寄附等	6,000,000	6,000,000
	カンバ、利子等雑収入	0	80,183
	国内収入合計	13,000,000	13,080,183
国外収入	現地装備売却(現地収入)	0	18,938
収入総合計		13,000,000	13,099,121

#### 支出の部

項目		予算	実績	予算-実績
国内支出	渡航費(往)	560,000	508,957	51,043
	隊荷輸送費	800,000	675,919	124,081
	梱包費	150,000	360,726	-210,726
	食料費	400,000	386,409	13,591
	装備費(医薬品含む)	1,200,000	1,200,550	-550
	医療費	100,000	13,204	86,796
	事務費	230,000	78,046	151,954
	保険料	0	323,967	-323,967
	雑費	0	20,840	-20,840
	国内費合計	3,440,000	3,568,618	-128,618
国外支出	渡航費(復)	560,000	865,226	-305,226
	登山料	357,000	380,140	-23,140
	ビザ費	100,000	66,668	33,332
	通関費	300,000	112,088	187,912
	保険料(ネパール隊員用)	100,000	82,990	17,010
	人件費	3,000,000	3,511,905	-511,905
	滞在費	700,000	528,468	171,532
	通信費	100,000	79,300	20,700
	装備費	250,000	819,242	-569,242
	食料費	450,000	621,117	-171,117
	キャラバン費	260,000	387,965	-127,965
	エージェント費	50,000	31,409	18,591
	パーティ費	250,000	314,235	-64,235
	輸送費(救助ヘリ代含む)	150,000	653,767	-503,767
	医薬品	0	38,472	-38,472
支出総合計	雑費	233,000	240,191	-7,191
	予備費	2,700,000	0	2,700,000
	国外費合計	9,560,000	8,733,183	826,817
	国内費+国外費	13,000,000	12,301,801	698,199

#### 決算

収入総合計 13,099,121 - 支出総合計 12,301,801 = 797,320円(残金)

### 3 ラトナチュリへの道程 (実行委員会報告)



森の子供達（ダラバニにて）

## 実行委員会事務局報告

渡部光則 藤松太一

1994年、および1996年は、信州大学の山仲間にとって、ネパールヒマラヤに残された未踏の7000mメートル峰2座の初登頂に成功した、記念すべき実りある年であった。多くの遠征隊が、その立案から成立するまで幾多の糾余曲折があるよう、今回のそれもまた同様であった。1994年のギャジカン遠征に引き続いて実施した1996年のラトナチュリ遠征は、当初同じ一つの計画であり、1992年から始まった一つの計画が完結した今、あらためてギャジカン遠征の際の実行委員会報告を再度掲載し、計画の推移と5年間の我々の軌跡を以下に報告する。



ラルキヤ・ラから望むヒムルンヒマール東面、ギャジカン、ネムジュン

## 1. 1994年ギャジカン遠征

実行委員会事務局

渡 部 光 則

今回の計画のかなり初期の段階から本遠征計画に参画してきた一員として、報告書をまとめるにあたり、実行委員会の詳細な内容は各会議報告に委ねる事とし、経過を覚書ふうにまとめてみた。

### 1. 1992年

2月半ば、一通のファクシミリが職場に届いた。大阪在住の御子柴OBからであった。職場へのファクシミリとしては、標題が「ヒマラヤへ行こう」といささかショッキングではあったが、これが私への遠征計画の呼び掛け状となった。昨秋新築となつた穂高町の小川、扇能両OBの山荘で山田哲雄先生を囲んだ新年会が開かれ発案となつたようである。

それは、1982年のアンナプルナⅡ峰南壁とガネッシュヒマールの両遠征以後、信大隊として組織だった遠征活動はしていない反面、個人的な海外登山、特に若手中堅OBの活動は盛んであり、現役のネパールにおけるライトエキスペディションも毎年のように行われている。このような中で今一度、信大山岳会、学士山岳会あげての遠征を組織してみたいというところからの出発であった。

早速3月20日、第1回の会合が東京で開かれ、上記の趣旨説明と具体的な目標の検討がなされた。7000mクラスの未踏峰は非常に魅力であるが、許可取得の面や研究の余地が多い。従って、今後出来るだけ情報を集め可能性を検討することとし、とりあえず目標をアンナプルナⅡ峰北稜、又は北東稜と定め、今秋に偵察隊を派遣し、可能性のあるルートを探すこととなった。あわせて本遠征の性格や実施時期と今後の準備の進め方、組織作り等が討議された。

この段階では一部有志の私的な集まりで会の名称は「ヒマラヤへ行こう会」であったが、学士山岳会の承認を得て「信州大学ネパールヒマラヤ遠征実行委員会」が設立されるまでの間、「実行委員会設立準備会」として偵察隊の派遣を含めて活動することとなった。3月20日を第1回として翌年春まで穂高山荘や名古屋で計6回開かれた。この年7月31日、遠征に対して理解協力をいただき山岳会関係者とも大変親しかった

### 3 ラトナチュリへの道程

探検部OBの関根倫雄氏が、ネパールへ出張の際にタイ航空機事故で亡くなられるという悲しい出来事が起こった。心よりご冥福をお祈りする。

9月12日、OBの田辺と現役5年目の河西の両名がアンナプルナⅡ峰北面への偵察に出発した。出発直前に渡部は田辺と会い、アンナプルナ以外の山への働きかけについて幾つかの資料とネパール政府宛未踏峰5座の英文申請書を託すと共に、マルシャンディ河支流ナル・コーラ上流のプーチュ源流域の山々、具体的にはヒムルンヒマール北西面とペリヒマールの両山群の情報収集を依頼した。

学士山岳会の承認を得る時間的余裕はなく、未だ渡部の私的申請書であり、5座の内、ヒムルンヒマール北峰（7126m、1992年秋、北大隊初登頂）及び同西峰（7038m、ギャジカン）は、1973年に渡部が、ガネッシュヒマールのチリメコーラ内院偵察後、ブリガンドキを遡上、アンナプルナ北面への途上ラルキヤ・ラから遠望した山々であり、ペリヒマール主峰ラトナチュリ（7035m）は、ナル・コーラに入ろうとして果たせなかつた、未だ山姿も分からぬチベットとの分水嶺にある遙かな山であった。

両名には予想もしなかったことであるが、ヒムルンヒマール北峰は北大隊が入山しており、初登頂されたことを知らされた。しかしながら、貴重な資料と未踏峰登山許可取得のための方法等有益な情報を我々の許に持ち帰った。

両名の帰国を待って10月24日第4回準備会が開かれ、詳細な報告書とスライドで偵察の説明があった。アンナプルナⅡ峰北稜は予想以上に厳しいようであったが、「困難ではあるが登攀可能です」という田辺の説明に遠征隊メンバーで再検討し、11月3日の学士山岳会総会前に準備会を開き、継続審議した上で総会に臨むこととした。会を終え皆で一杯飲んでいた夜半恐ろしい知らせが入った。

中国領カラコラム、皇冠峰登山のHAJ隊に参加していたOBの二俣勇司が雪崩に遭い行方不明という連絡に、これから登山を控えて意気軒昂していた我々は、酔いもふっ飛び、友を失った悲しみで暗澹たる一夜となった。

11月3日午前中に継続審議が行われ、二俣を失ったのは大きな痛手であり、この第一級のバリエーションルートを落とせる総合力について検討された。この時期全OBには計画概要書は送付済みであり、3日午後の総会で準備会の経過報告と資料スライド等で偵察報告を行い、学士山岳会の事業として実行委員会を設立し、1994年秋期にアンナプルナⅡ峰北稜を目標として計画を進めることができることが承認された。あわせてラトナチュリ、ギャジカンの未踏の7000m峰を次回の目標として、許可取得の手段を講じるよう交渉を継続していくことが確認された。このため、12月1日付でネパール警察登山探検財団（N P M A F）宛合同登山の申込み書（Proposal Request）を送付した。

## 2. 1993年

アンナプルナⅡ峰北稜については、ルートの技術的困難性、下部の落石等の危険性もあることから、一部OBから危惧の念が出されており、実力ある一部の隊員だけでは隊全体の安全性の確保が難しく、総合的に実力不足ではないかとの批判があった。

準備会としては、今年、夏期にパキスタン領カラコラムのバインターブラック峰及びブロードピークに今計画の隊員メンバーが数多く参加して2隊出かけることから、この遠征で技術経験の蓄積を図り、アンナプルナⅡ峰を目指したいという戦略を説明し、実行委員会の結成が承認されていた。しかしながら現状ではアンナプルナⅡ峰北稜の登山に対して確実性に乏しく、対外的な協力依頼は時期尚早な感が否めず、とりあえず遠征参加希望メンバー及び旧準備会メンバー並びにこの遠征作りに協力しようとする山岳会内部の者のみで実行委員会をスタートさせることになり、4月18日第1回会議が開催された。

そしてこの遠征を確実なものにするため、第2次偵察隊を派遣して調査検討を重ねることになった。このため本遠征の隊長予定者であり、今夏の学士山岳会バインターブラック峰遠征隊長の吉田と豊田隊員は登山終了後、日本から出発した澤田とネパールで合流し、3名で偵察活動を行った。

C2予定地までの試登とその先の詳細なルート偵察、下部ルートの落石等の危険性の把握を目的としたが、結果はC1で落石を受けて豊田が負傷し、C2へのガリーも落石と雪崩でルートとしては余りに危険性が高すぎ、上部への試登は無理であった。昨年の偵察時と同じシーズンながら山の状況が大きく変わっていた。

10月9日、第4回実行委員会において今夏カラコラム2隊とあわせ、第2次偵察隊の報告がなされた。各隊員の意見を基に種々協議した結果、1994年秋期アンナプルナⅡ峰北稜は中止と決定し、長野県山岳協会宛提出した申請書類は取り下げてもらうよう依頼するとともに、学長、各OBに中止を報告した。

アンナプルナⅡ峰計画が中止となり代替案がすぐに浮かぶはずがなく、並行して進めてきた次回への継続目標であったラトナチュリ、ギャジカンの山々が浮上してきた。今夏ブロードピーク登頂後、1993～94年冬期サガルマタ南西壁の群馬岳連隊員として参加していた田辺は、秋期チョーオユー登頂後カトマンズに居り、ODAの仕事のため現地に滞在していた向後利彦OBとともに11月1日ネパール警察登山探検財団のセクレタリーであるグプタ・バハドゥール・ラナ氏に面会して、1992年12月に提出した合同登山の申込みについての意向を確かめることが出来た。

上記の申込み状の具体的な条件について変更するよう幾つかの指摘があったが、ラナ氏との話は非常に良い感触であり、1994年秋の許可取得は難しい面もあるが全く不可能ではないとの報告が、11月7日帰国した向後OBによって学士山岳会総会当日朝

### 3 ラトナチュリへの道程

伝えられた。

そのため急遽総会の席で、1) アンナプルナⅡ峰北稜は2回の偵察の結果落石等により下部ルートの危険性が高く計画を中止する。2) 1992年総会で継続目標としてラトナチュリ、ギャジカンの許可取得のために交渉を進めることが承認されているが、これらの山々が合同登山を条件に近々許可になる可能性が出てきた。3) 情報が急なため提案する準備が出来ていないが、ぜひ進めたい。延期も考えられるが、他隊との競合も考え出来るだけ早い1994年秋期を第一目標として計画を進めたいので、本件については実行委員会に一任願いたい等提案し、承認を得た。

実行委員会の決定を経て学士山岳会の承認を受けるのが本筋だが緊急を要したので順序が逆になった。これを受けて11月27日第5回実行委員会が開催された。

最初のアンナプルナⅡ峰北稜という第一級のバリエーションルート登攀から遠征隊の内容が大きく変わってしまった。登山のスタイルも変わるであろう。未踏峰に登山する場合、合同隊を組織することになるが、ネパール側隊員との交渉や登山とは直接関係のない諸々の雑事が付随する。アンナプルナⅡ峰計画とはかなり性格の異なった登山になるように思われる。このため当初の隊員候補を白紙に戻し、改めてもう一度全会員より公募することとなった。

許可取得については、早期にカトマンズに行き、合同相手先のN P M A Fと具体的な交渉をして正確な情報の把握に努めると共に、隊員数や経費その他各種条件等をはっきりさせ促進を図る必要がある。このため、11月末に小川事務局長が九州に行き、N P M A Fと合同登山を行った1992年伊万里山岳会チェオヒマール遠征隊長・岡崎正伸氏より合同登山の実態を聞き情報収集にあたった後、12月21日～28日、小川と渡部がカトマンズに飛び、直接交渉することとなった。関係者各位と面談し、事務的な諸々打合せを行い、具体的な許可取得の道が我々の前に現わってきた。その結果、滞在中に警察学校と警察本部の許可が下り、合同登山について正式に警察内部で決裁された。

### 3. 1994年

明けて1月5日には早くも内務省より許可が下りた旨、N P M A Fより電話連絡があった。しかしながら、1月11日ラトナチュリに関しては国境上の位置確認を中国とする必要があり不許可、ギャジカンのみ許可するとのファクシミリが入った。二峰同時に登る予定であったが、今回は残念ながらギャジカンのみで準備を進めることにし、至急バイオデータを国際速達郵便で送った。正式な許可は内務省、外務省、国防省等の許可の後、閣議で決定されることになるが、国内では長山協経由で日山協の推薦状を取得し、4月27日外務省に申請書を提出した。

3月27日、第7回実行委員会が開催され、最終的な隊員と各係が決定された。今後

の実行委員会としての活動は、カンパ要請、寄付集め等の協力依頼を主とし、実際の計画準備は隊員達で行った。5月の連休は隊員に実行委員会のメンバーも一部加わり、不帰東面で合宿を持った。

5月20日、未だ防省の許可が出ないとN P M A Fよりファクシミリが入った。資金集めと並行して各種装備の調達、食料の購入、梱包等計画を進める必要があり、N P M A Fからは早くパッキングリストを送れと言ってくるし、実際にいつ許可が下りるのか、そのタイムリミットをいつにするか、困惑することになった。それでも毎月実行委員会を開催し、議定書（Protocol）の作成検討、カトマンズにデボしてある群馬岳連の装備借用依頼等、事務的な準備だけは進めた。5月22日、第9回実行委員会で、許可のタイムリミットの連絡を一応6月30日として通知することにした。6月26日、第10回実行委員会で、許可の通知が来なければ遠征の延期を7月7日に最終決定することにした。

7月1日、ネパール政府の閣議決定により正式な登山許可が下りた。7月17日、第11回実行委員会を開催し、カンパ及び物品の寄贈状況等の報告と今後の取組み方を打合せた。医師隊員の参加が不可能になったため、あわててN P M A Fへ医師隊員の参加要請（最終的にはリエゾンオフィサーが兼務）や、山下泰弘総隊長代理、中村幸典隊員が新たに加わったため、N P M A F及び霞ヶ関の外務省に提出する隊員変更届等の事務処理が続いた。隊荷の梱包は7月22～24日に行い、各隊員の出発日も決定した。

8月14日、第12回実行委員会を開催し、最終打合せ後に家族会を開き、遠征計画概要、連絡系統図、登山の際の危険性、事故処理等について説明した。その後OB、現役合同の壮行会が開催され、前途を祝した。

8月20日先発隊、8月27日本隊、9月3日後発隊各々を名古屋空港で見送った後の事務局の仕事は、隊からの便りをネパール通信として隊員留守家族、各OBに発送して、初登頂の知らせを待つばかりであった。

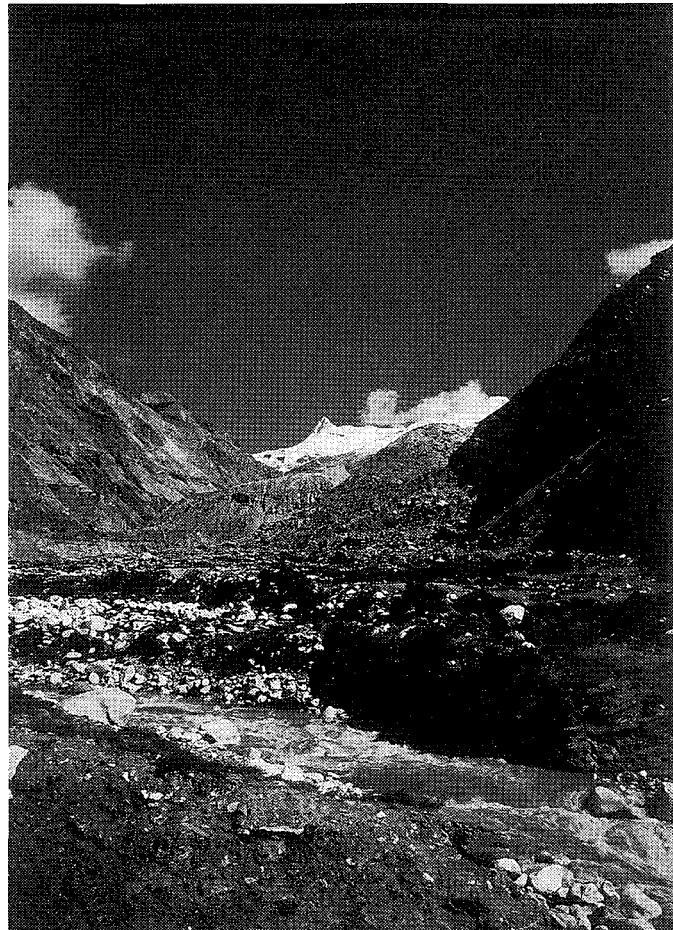
12月4日、第13回実行委員会を開催し、登山報告、総括反省、報告書作成計画、次回のラトナチュリ計画、実行委員会の改組等を議題とした。この会議をもってギャジカン遠征の実行委員会は解散し、今回の遠征隊員が実行委員会の事務局を引き継ぐことにより、新たな次の目標ラトナチュリ遠征の実行委員会として再生した。即ち、送り出された隊員が次の遠征の実行委員会事務局を引き継ぐ事、この原則が堅持される限り、遙かな山々に向かって我々は歩みを進めることができるであろう。

思えば発案から実行まで3年の年月が流れた。その間に我々の良き仲間であり、隊の主力メンバーであった二俣が山に逝った。皇冠峰に眠る二俣の冥福を心より祈っている。その皇冠峰は、1993年、後輩の現役部員長谷川哲也が、J A C東海支部隊に参

### 3 ラトナチュリへの道程

加し初登頂に成功した。以て瞑すべしであろう。

それにしても初期の頃、準備会当時の、海ではなかろうが山のものともわからなかつた、未だものになるのか見当のつかなかつた頃のあの情熱とエネルギーは何だったんだろう。そうした穂高の山荘での我々の集まりに、いつもおいしい御馳走を用意して下さった小川、扇能、井関の3OBの奥様に衷心より御礼申し上げる。嗚呼、あの山荘は我々にとってたしかに梁山泊であった。数多くの皆様のご援助、ご協力により遠征隊は成立したが、その出発点は穂高の山荘からであった。



プー・コーラ源流付近より見た  
無名峰（当初、ラトナチュリと  
間違えた）

## 2. 1996年ラトナチュリ遠征

実行委員会事務局

藤松太一

### 1. 1994年

年明けの1月5日に内務省より、ギャジカン峰のみの登山許可が下りた。しかし、ラトナチュリ峰に関しては国境上の位置確認を中国とする必要があり、不許可となつた。

ポストにギャジカン峰遠征が、ネパール警察、信州大学登山隊員全員の登頂という大成功で終了した。遠征終了後のネパール警察主催のパーティでは、初登頂、全員登頂の喜びが率直に表れていた。信州大学側の返礼のパーティ終了後、総隊長代理の山下、隊長の藤松、登攀隊長の田辺と共にネパール警察を表敬訪問し、次回ラトナチュリ峰遠征の合同と許可取得の協力を強力にお願いし、前向きの返答をいただき帰国した。また、この遠征時に近く見えるラトナチュリ峰の登山ルートを検討したり、写真に納めてきた。

### 2. 1995年

#### 1) ラトナチュリ遠征第1回実行委員会

2月12日にギャジカン峰遠征の最終のまとめが終了し当実行委員会を解散した。そして新たにラトナチュリ峰遠征の実行委員長として宮崎敏孝、事務局長に隊長であった藤松が選出、承認され第1回の実行委員会が終了した。

また、今回の遠征は、ギャジカン峰遠征の継続であり、この遠征が実現すると当初の目的が達成できることも同時に確認された。

#### 2) 4月16日 第2回実行委員会

事務局から隊員の公募について、従来の信大の遠征のスタイルどおりに希望者で隊を編成すること、ラトナチュリ峰の許可取得の手順や情報、遠征計画の概要、予算の概要について協議し、ギャジカン峰の遠征にしたがつた内容で進めていくことになった。次回については、具体的な案を事務局から出す事を指摘され閉会した。

#### 3) 7月9日 第3回実行委員会

28名という大勢の参加者が集まつた。小川から登山許可に関する情報として、現在

### 3 ラトナチュリへの道程

ネパール警察から各大臣に書類が回っているとのことである。

OKが出ると次のステップに進み、内務省にいく手はずである。遠征費用の概要、隊の構成、日程などギャジカン峰とほぼ同様の計画概要で討議された。

現時点において、隊員の公募に8名の参加希望者があった。

#### 4) 10月1日 第4回実行委員会

遅れていたギャジカン峰の会計報告があった。小川よりラトナチュリ峰の登山許可の状況の報告があり、前回とあまり進展していないが、おそらく内閣での審議中とのことであった。公募隊員は9名で、学生から定年間近な隊員までと年齢の差があり、隊の構成、タクティクス面において前回のようにはいかないだろうとの意見が出た。また、装備においても国内調達量の増加が指摘され、費用面でも前回を超えるのではないかとの意見が出された。

この段階で、1USドル=100円で計算していた。

遠征隊員の係分担を決め、次回に係分担の案を提出することになり、いよいよ計画が実行へと具体的に動きだした。

#### 5) 12月17日第5回実行委員会

ラトナチュリ峰の登山許可がネパール政府の閣議で2度却下された後、今回1回限りという条件で許可が下りた。ネパール側隊長のラナ氏より、至急関係書類を送るようにとの連絡が入った。ネパールの大津氏からは正式な許可はまだなので安心しないようにとのコメントも入ったが、おそらく年明けには正式許可が下りるだろうとの意見が多数を占めた。

この間、信州大学ばかりに、2つの未踏峰の登山許可が下りるのは難しいのではないか、ネパール政府と中国政府間の国境確定問題もあり、本当に許可が下りるだろうかとの不安が常にあった。

また、これからが事務局としての超多忙の日々となった。

バイオデータをはじめ、関係書類の準備、山岳協会からの推薦状、説明、送付、寄付活動などすべての行動を開始することになった。また計画書も完成し、隊員の係分担も遠征13回の登攀隊長の田辺がリードする形で実務活動に入った。

そして、12月21日に正式許可が下りた。

### 3. 1996年

#### 1) 2月3日 第6回実行委員会

正式な登山許可が下りて必要な準備などが一段落した後の実行委員会。

コスモトレックの大津氏から登山料がこの3月1日に改定され、ポストモンスーンの隊から適用されると情報があった。我々の隊の登山料も当然値上げということにな

り、前回のギャジカン峰、東京農大のトウインズ峰同様、ネパール隊員分について価格交渉することとした。

また、医療担当であった医学部の磯部が不参加となり、今後OB、その他の中で遠征に行ける可能性がある医者を探し、いなかった場合はギャジカン峰同様にネパール警察から派遣してもらうことにする。隊員の保険、行動スケジュール表、寄付といった事が少しずつ具体的になっていった。

隊員は最終的に学生2名を含め8名となった。

#### 2) 日本・ネパール最終打ち合わせ

ネパール側の隊長であるラナ氏との最終の打合わせを行うために、3月21日から27日まで事務局長の藤松がネパール警察登山探検財団を訪れた。

テントを中心とした装備、キャラバン、登山ルートなどをつめた。昔と違って今はファクシミリで、その日の打合わせ結果を直ちに日本に送り、再度確認事項が返ってくるので大変便利であった。また訪ねたことは、お互いの信頼関係も維持でき有意義であった。

#### 3) 4月以降の実行委員会

4月からは毎月実行委員会が開かれ、4月13日第7回実行委員会、5月18日第8回実行委員会、6月15日第9回実行委員会。各係案の詳細が審議された。

この間ですべての具体的な計画が固まった。また、4月6~7日に御在所岳で遠征合宿を持った。寄付については、物品貸与を含め信大なりに集まってきた。

しかし物は結構集まったが、お金が少ない、予想外の円安等が一抹の不安であった。

#### 4) 梱包作業

遠征隊員が7月18日から23日に松本に集合し、OBの百瀬氏別宅を借用し、買い出しと梱包の作業に入った。キャラバンから登山までの期間が約2ヶ月、一部の食糧と装備中心の物資とはいえ、なかなかの量であり、隊員は盛夏のなか汗まみれになって梱包作業に奮闘していた。

その結果、隊荷を2回に分けて発送し作業終了とした。以後はシー&エアーでカトマンズまで輸送された。

8月10日に第10回実行委員会があり、遠征隊出発の最終確認を行った。また、遠征隊家族に対して宮崎実行委員長が遠征の概要、事故における対応等についての説明があった。そして、家族、学士山岳会を含め50人以上の参加者のもと盛大に壮行会が行われた。そして、21日に本隊の4人が関西空港から出発し、25日に宮崎実行委員長、9月1日に後発隊の4人も出発しラトナチュリ峰の遠征が始まった。遠征終了までの間、不定期ではあるが現地の状況報告のファクシミリが入り、それを家族など関係者に送った。

### 3 ラトナチュリへの道程

10月をすぎると、そろそろ登頂の第一報が入るのではないかと、やきもきしていた。当然ヒマラヤ遠征であるから多少のトラブルはあったものの（詳しくは隊員の報告の欄に譲るが）全員登頂というすばらしい結果で終了することができた。

#### 5) 第11回実行委員会

例年11月3日の文化の日がOB会と決まっているが、今年度は遠征があり、隊員の帰国を待って23日に延期した。

遠征の報告が田辺登攀隊長のスライドを中心に報告があった。当初の目的であったギャジカン峰、ラトナチュリ峰の未踏峰2座に全員初登頂できたことは、「そろそろ信大で遠征隊をだすか」、「それもいいだろう」といった見果てぬ夢物語がスタートではあったが、5年経過した今完結した。

この計画の牽引者であった山田哲雄先生、小川勝委員を始め、多くの先輩達が山に憧れて信州の地に来て、四季を通じて山に興じた「熱き思い」が今回の遠征を支えてくれた。

### 4. 事務局雑感

今の仕事もそろそろ飽き、多少の変化と興奮する何かが欲しいと思っていた頃に信大で遠征隊を出そうという話が持ち上がった。

穂高山荘での深夜におよぶ討論は山岳部時代を彷彿とさせるものがあった。

1994年のギャジカン遠征の時は年も年だから遠征隊の後ろからついてゆき、写真でも撮ればいいやという程度の気持ちであった。

しかし、隊長予定の渡部（ラトナチュリ峰隊長）が、3月に仕事の関係から辞退してしまい、何故かそのお鉢が私の所にまわってきた。状況が180度変わってしまい、戸惑ったが仕方がない縦系列の社会。メンバー的にも揃っているので皆さんがやってくれるだろう。隊長は飾りでよいと考え返事をした。登山は成功したが、私は「円形脱毛症」となってしまった。追い打ちをかけるように、「ギャジカン遠征隊の隊長は現地からの報告をほとんどしない、一体何をやってるんだ」とのお叱りを受けてしまった。全くそのとおりであった。

これが引けめとなって「ラトナチュリの事務局長はギャジカンの隊長がやるのが一番いい」ということで、この任を引き受けざるを得なかった。

ギャジカン峰の事務局であった小川、扇能氏から分厚い書類を引き継いだ。はじめは戸惑い、扇能氏にその度ごとに電話をしながら仕事を進めた。仕事をしているうちに結構面白くなり、自分なりに考え、実行委員長の宮崎氏と相談しながら進めることができた。遠征隊の方が楽だなと思う時もあったが、ヒマラヤ遠征の企画全体にふれることができたのは大きな収穫であった。

私自身1978年に初めてヒマラヤ遠征の経験をし、1990年代に二つの遠征に直接関わる機会を得た者として、時代が変わったと一言でいってしまえばそれまでであるが、今の時代にヒマラヤ遠征の響きは昔と違ってしまった。

キャラバンコースや高所ポーターの優秀さ、それにひきかえ未知なるものへの挑戦といった山岳会が持つべき当然の目標が霞んでしまっている。そんな気持ちも多少持しながら、今回のラトナチュリ峰遠征が無事終了したことは、大学関係者、関係企業の絶大なるご理解と、ご援助が得られ、山岳会OBによる支援があったからだと考えます。数多くの皆様のご援助、ご協力に感謝し事務局としての報告と致します。



ネパール警察登山学校長 グブタ・バハドゥール・ラナ氏

D.S.P. G.B.Rana at Nepal Police Academy

## アンナプルナⅡ峰北稜 偵察登山

吉田秀樹

1992年、信州大学山岳会ネパールヒマラヤ遠征実行委員会が発足し、アンナプルナⅡ峰北面への計画が進んでいた。しかし隊の実力とルートの困難度を今一度、冷静に判断すべきと実行委員会では考え、再度、2回目の偵察隊が1993年秋期に派遣された。

その結果、アンナプルナⅡ峰北稜は危険が大きいとの判断が下され、方針が大きく変わった。

以下に参考資料として、その当時の報告書を掲載した（ほぼ原文のままだが、アンナプルナⅡ峰北面中央稜をアンナプルナⅡ峰北稜と改めた）。

### 1993年 第二次アンナプルナⅡ峰偵察隊報告書

#### 1. はじめに

今年のモンスーンは、この影響下にある各地に被害をもたらしました。

ネパールもその例外ではなく、出発前、ポカラまでの橋が崩れて通れないという情報も入り心配致しました。幸い道は復旧しましたが、今回通過した車道、トレッキング道を問わず、今年の大雪で崩れた、或いは崩れかかったと思われる箇所が随所にありました。

今回この偵察を、あえてこのモンスーン中に行った事は、実際の登山もこの時期から始める事を想定したからです。そういう意味では、今年の悪条件は、かえって我々に様々な事を考える機会を与えてくれたと言えます。ここに、偵察の報告をし、皆様の御判断を仰ぎたいと思います。

1993年10月 偵察隊リーダー 吉田秀樹

#### 2. 行動記録

##### 1) キャラバン

8月末日 豊田カトマンズ入り。

- 9月6日 吉田、澤田カトマンズ入り。(株)日さく訪問(八文字氏)。
- 7・8日 トレッキング許可等準備、JICA訪問(村上氏)、学士山岳会員大野氏と面会、シェルパ1名(パサン・シェルパ)を雇う。
- 9日 カトマンズ<7:00 曇>= (バス5h) = デュムレ<14:40 晴れ>
- 10日 デュムレ<8:00 晴れ>=トゥレトゥレ(トラック故障で途中より徒步) ——ボテオラ<15:00 晴れ後、雨>
- トラックの運賃は交渉により随分異なるようだ。国民価格は、ベシサハールまで、150ルピーほど。16時頃、激しいスコール。
- 11日 ボテオラ<6:30 晴れ>——ベシサラ<9:50 晴れ>——プレブレ<15:00晴れ>
- ベシサラは、大きな町であり、たいていの物は手に入る。プレブレからマナスルやピーク29が見える。
- 12日 プレブレ<6:30 晴れ>——シャンゲ<12:00 曇>——ジャガット<15:00 雨>
- 標高も次第に高くなり、日が照らないと少々寒い。
- 13日 ジャガット<7:00 晴れ>——タル<9:50 曇>——バガルチャップ<16:00 雨>
- タルは滝のある広々とした気持ちのよいところ。
- 14日 バガルチャップ<7:00 晴れ>——チャーメ<11:00 曇後雨>——バラタン<14:30 雨>
- 15日 バラタン<6:30 雨>——ピサン<8:40着11:30発 雨>→ベースキャンプ偵察<16:30、ベースキャンプ位置確認、18:30帰着 雨>
- サラタンコーラに入り、登り口と思われる沢を登ったが、どこまでもブッシュが続き、3850m地点で違うと判断下降する。奥の沢を登ると昨年の報告書の記載と合致し間違いないと確認し下降した。雨で全員ズブ濡れであった。BCまで約3時間半であった(127ページの地図を参照)。
- 16日 ピサン<8:00 曇>—アンナプルナⅡ峰北稜ベースキャンプ<11:30 曇>
- 昨日に続き天気はあまり良くなく、下部岸壁がよく見えない。14時頃から雨が降り出す。ちょっと憂うつになってしまう。

#### キャラバン

デュムレにて、ポーター3名を雇いトラックに乗るが、1時間少々で故障のため徒步となる。

ベシサラまでは、トラックの使用は可能だが、故障、道路崩壊等により通行不能と

### 3 ラトナチュリへの道程

なることが多いため、トラックの使用は考慮しない方がよい。徒歩 2 日。

実際のキャラバンでは、デュムレからベースキャンプまで、8泊 9 日かかると思われる。

#### 2) ベースキャンプより偵察

9月17日 C 1 位置の確認

6:30 晴れ B C 出発

8:00 曇り 4450mの丘

9:00 曇り 横断バンド右端岩場下部 (480m)、吉田トップでフィックスする。  
もろい岩と湿った草つき (Ⅲ級程度)。

11:00 曇り 横断バンド右端、終了点よりアイゼン装着。傾斜した雪のバンド  
を250mほどノーザイルでトラバースしてバンド中央部に出た。ここ  
よりスタカットで吉田、澤田が更にバンドを進む。豊田は落石を腕  
に受け負傷したため中央部で待機。

12:40 曇り スタカットで、4ピッチ進んだ後、C 1 位置 (5000m) を確認、  
下降開始。バンド右端に更に30mフィックスする。

14:40 曇り B C 帰天

9月18日 C 1 へ荷揚げ

6:50 晴れ B C 出発

10:00 曇り 横断バンド下部

11:30 晴れ後曇り 横断バンド中央部、時々落石あり。

11:50 晴れ後曇り スタカットにて C 1 予定地。

2のガリーの偵察、C 1 予定地を整地後、隊荷のデポ。

12:40 曇り 下降開始

14:00 曇り B C 帰天

#### 2のガリーの様子

2のガリーは難しく、かつ危険に見える。又、落石 (たまに電話機ほどの大きさの  
石も落ちてくる)、チリ雪崩が頻繁に起きており「どこを登ればよいのか」という感  
じ。ここは、難しい雪稜を登れる人が短時間で登るべき所で、フィックスを頼りに悠  
長に荷揚げすべき所ではない。(澤田)

9月19日 C 1 へ (吉田、豊田)、澤田は下降、バックキャラバン開始。

6:40 晴れ B C 出発

9:50 晴れ C 1 到達 (バンド下部フィックス回収)

12:30 晴れ 落石によりテント崩壊

13:10 晴れ 下降開始

バンド下部へフィックスロープを張り直し、登攀具を中心ルンゼへ落とす。

15:30 曇り BC

2のガリー、C1の様子

テント崩壊前にも上部岸壁より落石が近くであったが、もうないだろうと思っていたら、真上より前腕位ほどの石が落ちてきた。落石直後私はてっきりテントの近くに落ちたと思い、外を見渡すと我々のテントは引き裂かれ、左足腿に痛みを感じ、見るとかすり傷を負っていた。

2のガリーは昨日より落石、雪崩は少ないが、全くないわけではなかった。(豊田)

9月20日 C1より落とした荷の回収と休養

9:30 曇り BC出発

11:00 曇り 雪田左端にて荷の回収

12:00 曇り BC帰天

天気は下り坂で時々、雨が降る。写真にてルートを再検討するが他には考えられそうにない。再度C1へ上がり早朝の様子を見てガリーを登ってみることにする。

9月21日 再度C1へ荷揚げ

6:50 曇り BC出発

10:30 曇り 横断バンド中央部

ここをC1として検討していたが、小石大の落石跡が多く不適当であった。前回の中央ルンゼのC1は落石の形跡がないため再度、ここをC1として荷物をデポした。

14:30 曇り C1より下降開始

15:30 曇り BC帰天

2のガリーの様子

相変わらず午後になると落石、雪崩は頻繁に起きるようになる。下降時、横断バンドにて前触れなく落石に当たりそうになり、ヒヤリとさせられる。

9月22日 C1へ

7:10 曇り BC出発

10:40 曇り C1到着、12時頃、ツェルトを張る。ヘルメットは常時着用。

2のガリーの様子

いつものように午前中はほとんど発生しないが、午後から降り出した小雪と同時に、

### 3 ラトナチュリへの道程

スノーシャワーが落ちるようになる。

9月23日 停滞

4:00 雪 起床

ガリーの様子を見て登る予定であったが、昨日一時やんだ雪が夜中に降りだし、この日は停滞とする。

7:00 雪 様子を見るが、雪崩の気配はほとんどない。

午後も雪で、13時半頃、中央ルンゼ上部より大きな雪崩が発生した。以後、頻繁に2のガリー、中央ルンゼで雪崩、落石が起きるようになった。

9月24日 降雪多く悪天のため下山

10:00 雪 C1出発、ロープ、登攀具をC1にデポし、BCへ下る。

11:45 雪 BC着

13:30 BC出発

15:45 曇 ピサン着

2のガリーの様子

昨夜未明から降雪、2のガリー、中央ルンゼ上部より頻繁に大きな雪崩が起こっていた。ツェルトが、一度つぶれる。積雪は20~30cm程度。

下山時の横断バンドをトラバース中、爆音の後、上部岸壁より雪崩（大きめのスノーシャワー）にあうが両名とも無事であった。

BCのテントは小動物に3カ所穴をあけられ、ごみが散乱していた。

ピサンからBCまでのポーターによる荷揚げは状況によりフィックスロープが必要になるかもしれない。

### 3) バックキャラバン

澤田、パサン

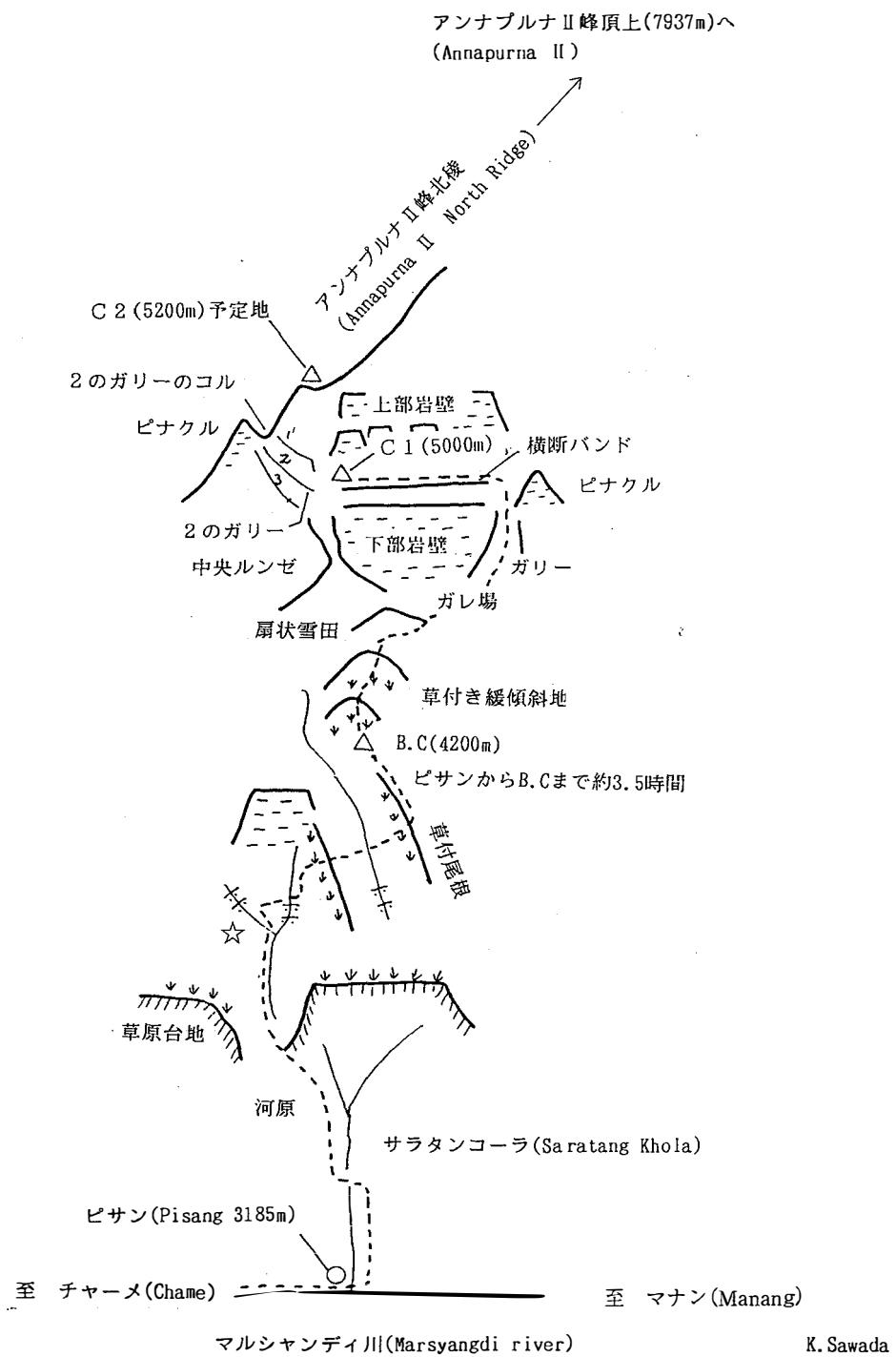
9月19日 BC <8:00 晴れ>——澤田、単独にて——ピサン <10:30着、パサンと合流、12:00発>——ラタムロン <16:40 雨>

20日 ラタムロン <6:10 晴れ>——チャムジェ <12:10 雨>——シャンジェ <15:30 雨>

21日 シャンジェ <6:00 晴れ>——ブレブル <11:00 曇>——ベシサラ <16:00 曇>

22日 ベシサラ <7:00 雨>——トラック——トゥレトゥレ手前2km <15:00 晴れ>トラック故障にて徒步——トゥレトゥレ <16:00 晴れ>

23日 トゥレトゥレ <6:00 雨>——トラック——デュムレ <9:50 晴れ>



アンナプルナII峰北稜下部 偵察ルート図

### 3 ラトナチュリへの道程

——バス——カトマンズ<14:50>コスモトレックへ報告、JICA村上氏と面会、懇談。

24日 帰国

吉田、豊田

9月25日 ピサン<7:00 雨>——チャーメ<11:10 雨>——バガルチャップ<16:00>

26日 バガルチャップ<8:00 雨>——チャムジェ<12:30 曇>——シャンジェ<15:30 曇>

重荷のためポーターを1人雇う

27日 シャンジェ<6:50 曇>——ブルブル<12:30 曇>——ベシサラ<17:00 曙)

28日 ベシサラ<10:00 晴れ>——トゥレトゥレ<20:00 晴れ>  
トラックが必ず出るというのでポーターを解雇したが、トランクは出ず、歩くことにする。途中で再びポーターを雇う。

29日 トゥレトゥレ<6:30 晴れ>——トランク——デュムレ<9:40 晴れ>——バス——カトマンズ<13:30> 日さく(株)に宿泊

30日 食料品、装備の調査

10月1日 帰国

### 3. まとめ

今回の偵察は、2のガリーの落石の状況を見るに加え、C2まで行き、ルートの確実性を確認する事であったが、結果としてC1までのルート工作に終わった。

以下に問題点をあげてみた。

#### 1) ピサン～ベースキャンプ

草原台地から4750mのルンゼ入り口(P127の図中の☆)までは問題ないが、草付屋根へ移るとそこからベースキャンプまでは踏み跡程度であり、傾斜が強い部分があるのでモンスーン中は滑りやすく、荷の重いポーターにとっては部分的に、フィックスロープを張る必要があるかもしれない。

キャンプサイトは起伏がある小灌木が生えた草地で、小テントは問題ないかもしれないがキッチンテントは傾斜地に張ることになる。

#### 2) ベースキャンプ～C1

傾斜地帯の横を通る草つき部分は、上部岸壁からの落石から安全とは言えないので注意が必要。

横断バンドへ出る部分はフィックスロープを張る場合、浮き石の掃除が必要であり、

かつ人為的、自然落石に対し注意が必要。

大勢で荷揚げする時は、所々にある岩陰に待機する必要がある。

横断バンドは落石、降雪時のスノーシャワーの危険から免れない、ただ勢いのついた落石は、ほとんど下部傾斜地帯へ直接落下する。バンド上には上部岸壁の途中から剥離した石が落ちてくるので、比較的勢いがない。

それらに当たってバランスを崩すことを考えると、バンド上すべてにフィックスロープを張った方がよいと思われる。

### 3) C1 キャンプサイト

設営のスペースとしては、最低4～5人用テント3張り分（隊員、シェルパ、集荷用）が必要であり、従来のC1予定地は唯一の所である。

テントステージを使えば他にも張るところはあるが、いずれにせよ落石に対しての保護策がとれる場合に限られる。

（横断バンドは、4920～5000mにあり、トレース、フィックスロープが有れば、20分程度で横断できる）

### 4) 2のガリーについて

下半分は井戸の底のような感じで、上部の雪崩が集中する。

晴天時においては、10時半頃から日が当たり始め、落石、雪崩が出始める。夕方まで上部の日当たりはよく、日没後までしばらく続く。曇天で降雪のなかった日は昼頃まで静かであった。

2のガリーは上部に大きなルンゼを2つ持っており、降雪が始まるとすぐスノーシャワーや雪崩が始まり、雪崩の間に落石も混じる。

以上のことにより、天候の合間を見てフィックスロープ20本を張るには、かなりのスピードが要求され、日数もかかると思われる。

また、フィックスロープを張った後も、モンスーン中のC2への荷揚げは非常に効率の悪いものになるだろう。

### 5) C2以上について

あまり観察できなかったが、C2～C4間の第2核心部は十分可能と思われます。去年、又はそれ以前の写真と比べてセラック、クレバスなどの確認が必要と思われる。頂上岩壁を見ることは出来なかった。

### 6) その他

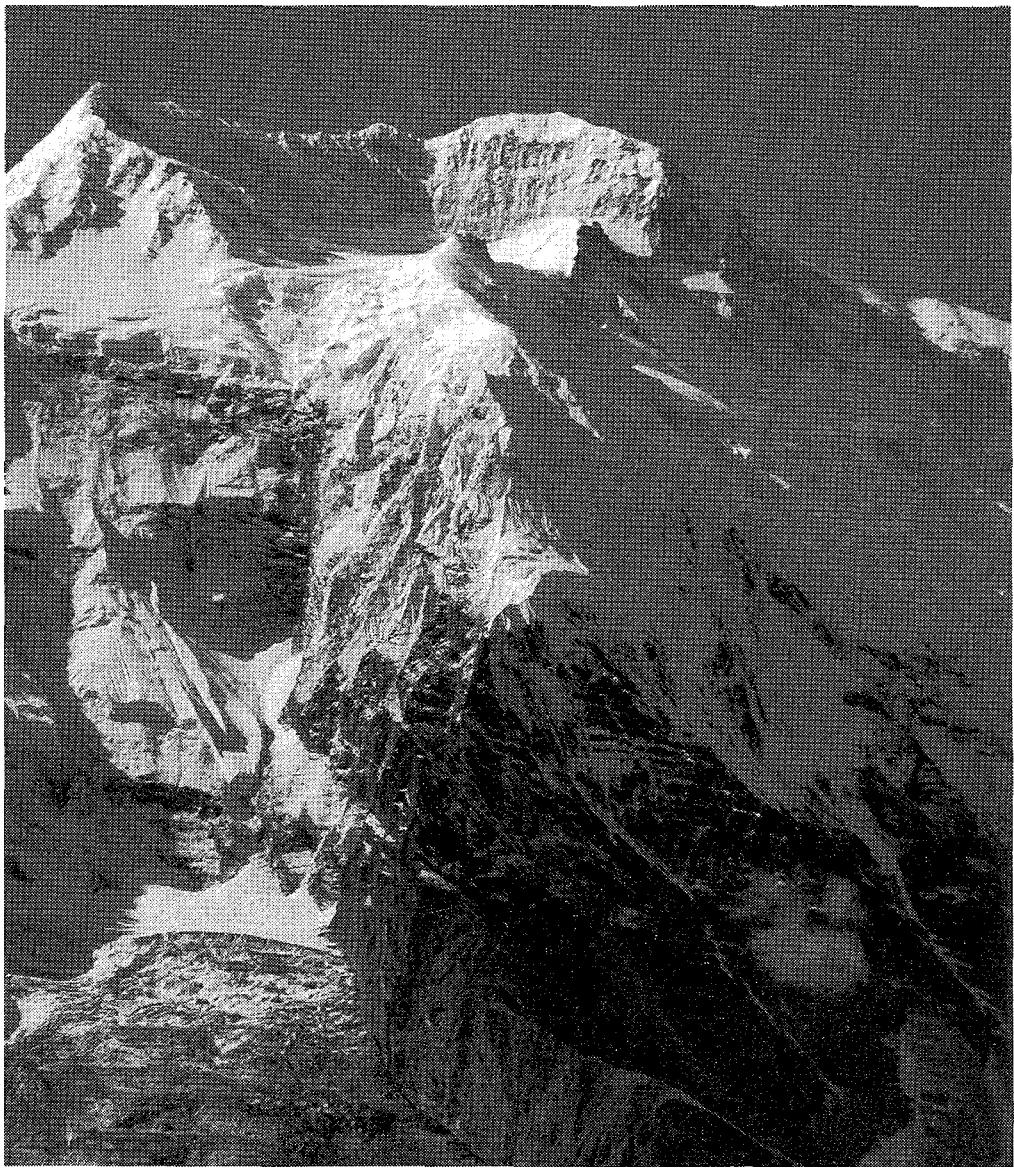
装備、食料、ポーターに関しては、昨年（1992年度偵察）と大きな変化はなく要点のみ記載する。

装備：ロシア製、韓国製、ネパール製は安いが品質に注意。良い物はそれなりの価格である（ターメル地区で調査）。竹ポールはキャラバン中のジャガット以降で入手できる。

### 3 ラトナチュリへの道程

食料：日本製のしょうゆ、海苔、椎茸、豆腐などのほとんどがラジンパットの「ブルーバード」で手に入る。

医薬品：薬はインド製の物が入手できる。ダイアモックスも手に入る。



アンナプルナⅡ峰と北稜

## ギャジカン信州大学・ネパール警察合同隊

田 辺 治

マナスル山群とアンナプルナ山群の間を穿つ、マルシャンディ川は、コトにて北方へ、ナル・コーラという支流を分けている。ナル・コーラは大ゴルジェ帯となっているが、上流で、プー・コーラと名を変え、ネパール、中国国境のペリヒマール山群へと続いている。この流域に初めて入ったのは、1950年のティルマンであったが、その後、長く外国人立入禁止地域とされてきた。

この周辺には、ラトナチュリ (7035m)、ヒムルンヒマール (7126m)、無名峰 (7098m) ネムジュン (7139m)、ギャジカン (7038m) の5つの7000m峰と多数の6000m峰がある。

最高峰ネムジュンは、かつてヒムルンヒマールと呼ばれていた。そして、このプー・コーラ側からではなく、南面ドゥード・コーラ側より、1983年、弘前大学・ネパール合同隊によって初登頂された。その後、ネパール政府の名称変更により、この山の名前はネムジュンとなり、その北方に新たにヒムルンヒマールが出現し、1992年、北海道大学隊が西面プー・コーラ側より初登頂した。この時、初めてプー・コーラ源流の山々が明らかにされたのであった。

私達、信州大学山岳会と学士山岳会は、1971年アンナプルナⅡ峰 (7937m) の遠征以来1978年ジュティボフラニ (6850m) とニルギリ南峰 (6839m) の2つの初登頂をはじめ多くの海外登山を行ってきた。しかし、1982年のアンナプルナⅡ峰南壁と、ガネッシュヒマールⅢ峰 (7111m) 以降、組織だった活動はしていなかった。その後10年たち、実動メンバーも増え、信大として、大きな遠征隊を出したいという機運が高まってきた。目標は1994年秋、アンナプルナⅡ峰北面に新ルートを開くことであった。そして実行委員会の強力なバックアップをうけて、1992年と1993年に偵察を行った。しかし、1992年、信大の生んだヒマラヤニスト、二俣勇司をクラウン峰に失い、予定ルートの危険性を勘案して、計画は中止と決定された。そして第2案として考えていた、ラトナチュリとギャジカンが、急浮上することになった。

ネパールで未踏峰の許可を取得するには、現地との合同が不可欠である。カトマンズでの交渉により、ネパール警察登山探検財団（以下N P M A F）との合同が決定し、

### 3 ラトナチュリへの道程

1994年秋の実施にむけて、準備を進めていった。

当初、2つの未踏峰を1度に登ってしまうという計画であったが、そううまくいくはずがなく、1994年1月、内務省よりギャジカンのみ許可が下りた。また、正式の登山許可は、ネパールの閣議決定により下されるのであるが許可がなかなか下おりず、じりじりとした毎日を送らされた。準備の都合上、6月末がタイムリミットである。そうしているうちに、肝心のネパール内閣が総辞職してしまい、絶望的となつた。しかし、辞職直前の7月1日に閣議で決定され、登山が実現した。こうして、慌ただしく準備を行い、8月20日と27日に分かれて、1994年ギャジカン登山隊はカトマンズへ向かつた。

通常、ヒマラヤ遠征には、成否をわける山場が必ずどこかにあるものだが、ギャジカンの場合は、出発前に山場があったと言える。一方ラトナチュリは、国境稜線上にあるため、許可取得は更に困難であった。ギャジカンでの実績と、多くの人達の努力により、許可が下りたのであった。

#### ギャジカン初登頂（1994年秋）

9月19日、私達はプー・コーラ源流パングリ氷河左岸のアプレーションバレー標高4800mに、ベースキャンプを建設した。ベースキャンプから望むギャジカン北面は、圧倒的な大岩壁と、絶悪のアイスフォールを持ち、私達の力量では手を出しがたい。西面はなだらかで長大な尾根となっているが、末端から延々と尾根をたどるのも大変そうであった。

そこで、北面より、西稜上部に出られる唯一のルート、北面支稜にルートを取って、9月22日、登山活動を開始した。ちなみにギャジカンは、通常のヒマラヤの山とは異なり南面と西面がなだらかで、北面と東面が切れ落ちている。

北西支稜の下部は、アイスフォール帯となっている。その右岸、左岸とも、落石と雪崩の危険があったため、ルートは最初左岸のガラ場をつめ、途中でアイスフォールを左へトラバースした。7ピッチのルート工作で左岸へ到達し、氷河とのコンタクトライン沿いに4ピッチ岩のスラブを登る。更にアイスキャップを登るとC1(5350m)である。ここまでが技術的に核心部であった。

C1より小プラトーと雪稜をたどり、今にも雪崩そうなスノードームを2つ越える。ここから迷路のようなクレバス帯を右へたどって、中間プラトーへぬけた。ここより上部プラトーへは、アイスフォールが立ちはだかっているが、右端に滑り台のような登路があり、6ピッチのルート工作で、C2(6100m)に出た。C2より大クレバスをぬって進むと上部プラトーである。登るほどに上部プラトーはそのまま広大な山頂平原へとつづく。

#### ギャジカン信州大学・ネパール警察合同隊

6600m地点にアタックキャンプとなるC 3を作った後、10月7日、1次アタック隊6名が初登頂に成功した。つづけて、10月10日と14日に2次・3次のアタックをかけ、登攀隊員17名全員の登頂に成功した。山頂は広大で、300mほど東に東峰があつたため、一応登頂しておいた。標高は、本峰とほとんど変わらなかつた。なお、この登山では固定ロープを33本使用した。また、9月20日にモンスーンが開けてから、連日晴天がつづき、登山期間1カ月の間に、降雪を見たのは1回だけであった。

#### 1994年信州大学・ネパール警察合同ギャジカン登山隊 隊員構成

総隊長・山田哲雄（カトマンズのみ）、総隊長代理・山下泰弘（BCのみ）

隊長・藤松太一、副隊長兼登攀隊長・田辺治、

隊員・三野和哉、中村貴史、中村幸典、小久保陽介、長谷川聰貞、橋口徹、伊藤勇太郎（ネパール側）

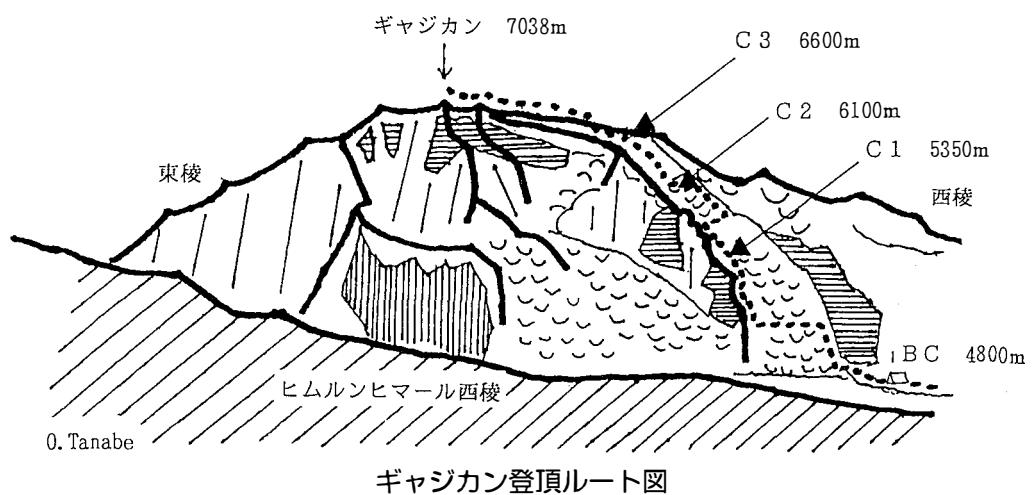
隊長・G. B. ラナ、副隊長・S. B. カルキ

隊員・G. B. ジョシ、R. K. シヴァコティ、P. B. カトリ

3 ラトナチュリへの道程



ラトナチュリ C2 (6550m) から見たギャジカン



## 4 雜人・雜感



カトマンズにて

## ヒマラヤ遠征と私

ラトナチュリ登山隊総隊長

野村昌男

実行委員会から総隊長をやってくれというので、これは大変なことになったと一度はお断りをした。

しかし、どうも一番歳をとっていることと、日本側隊長とネパール側隊長と意見が異なるとき調整役をやってくれればいいということで押し切られ、この大役を引き受けてしまった。

実際、すべてのことは両国隊長がやってくれて、意見が衝突することはほとんどなく、総隊長の出番はなかった。

取り立てて言えば、キッチンボーイのベンバ君が、B Cで半身が動かないことを訴え、ヘリコプターを呼ぶか否かで意見が異なった時、日本側の要求をネパール側にのんでいただいたことがあった事だけである。

ベンバ君は無事ヘリでカトマンズへ下山した。

この遠征は、信大山岳会の一昨年ギャジカン峰初登頂に積み残されていた宿題の山であり、元々この山に行きたいと言い出した隊長の渡部君の山と言っても過言ではない。

許可取得にはいろいろ苦労はあったが、渡部君とネパール側隊長ラナ氏のもとで16名が全員登頂を果たすことができ、喜ばしい限りである。

私も一隊員として、山頂に立てて、感慨無量の思いを味わせていただいた。

私はこの遠征中に55歳の誕生日を迎え、また、10月3日には孫娘が生まれた。白髪の域に達して、「何を今更ヒマラヤを！」と醉狂な年寄と思われるが、今から35年前、亡くなった友達といつかヒマラヤへ行きたいと話し合っていた夢が、やっとこの歳になって実現できた。

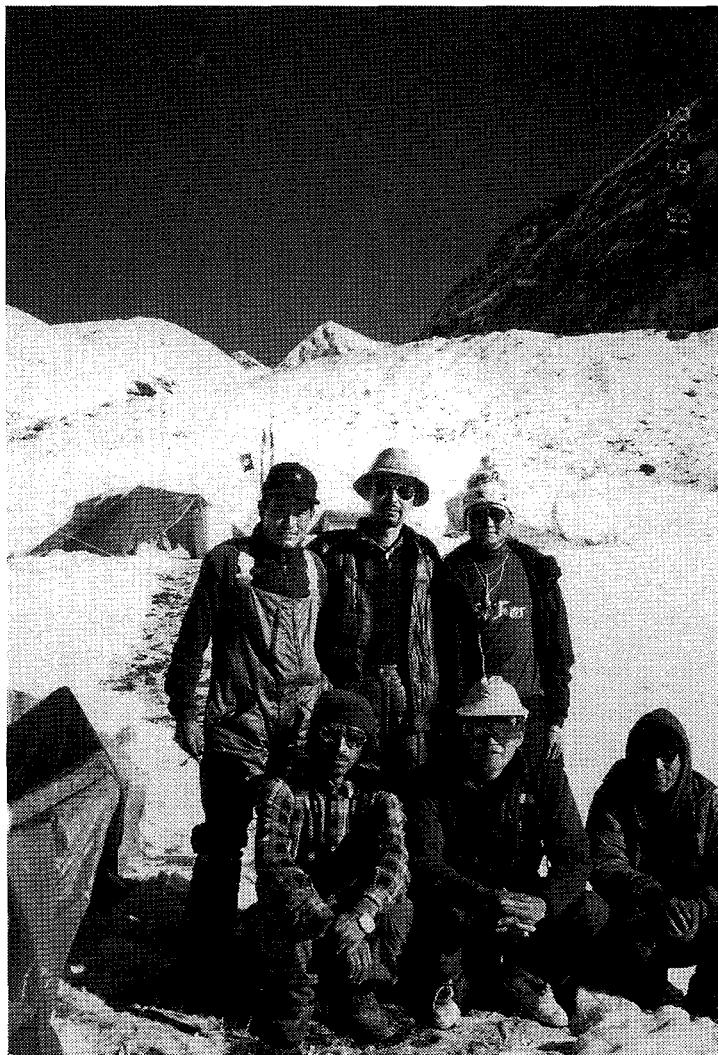
実際に来てみるとすごい。7000～8000m級の山なみの大自然には圧倒される。空気の濃度が平地の半分以下になったときの身体の反応は、体験してみなければ判らない。6550mでのC 2テントでの生活では眠ったら酸欠で死ぬのではないかとの不安で一睡も出来なかった。頭痛に悩まされ、寒さで痛めつけられる。

寒風吹きすさぶ早朝に第2キャンプを出発し、感覚薄れる手足を一生懸命動かし、

息もたえだえに、10月16日、12時40分にラトナチュリ山頂に立ったときは、今までの苦労はすべて忘れてしまった。会社を退職し、この日に備えて単独行を繰り返し、体力を養成してきた今までの苦労はすべて吹き飛んでしまった。

無謀と言われるかもしれないが、総隊長としてよりも一隊員としてラトナチュリに初登頂できたことが一番嬉しい。

1996年10月20日 ベースキャンプにて



降雪の朝ベースキャンプにて（前列左よりシヴァコティ、野村、ガレ、後列左よりラジュマン、渡部、アルジュン）。ラトナチュリ西峰（6600m）が見える

## ティルマンに寄せて

ラトナチュリ登山隊日本側隊長

渡部光則

先日、インドのH・カパディヤ氏から、ヒマラヤンクラブのニュースレター1998が送られてきた。その訃報欄にジミー・ロバーツ氏(Lt.Col James Owen Merion Roberts, 1916-1997)が、11月1日、ポカラの彼の自宅で亡くなったことが、彼の略歴と共に記されていた。

帰国前夜、カトマンズの大津氏の御自宅で御馳走になった折、たまたま彼の話題が出ただけに、一つの時代が確実に終ったという感概深いものがある。

ロバーツ氏が生涯、独身を通したように、彼のことを思うと、H.W.ティルマン(Harold William Tilman, 1898-1977)を想い起こさずにはいられない。私自身の3度のネパールヒマラヤ行は、1949年と翌50年の彼のネパールヒマラヤ探検の範疇から一歩も出でていない。高校生の頃はネパールヒマラヤは閉ざされていた時代だった。故郷の岩場で知りあった社会人の人達は、ヨーロッパアルプスの北壁を目指していた時代であったが、私自身は、ひたすらティルマンやシptonに憧れ、ヒマラヤを夢み続けていた。73年、大学4年生の時、同期の高橋と二人して出かけたヒマラヤ行のテキストは、もちろんティルマンの『ネパールヒマラヤ』であった。彼がランタン谷の宝石と呼んだガンченボの初登頂をねらったが、ツェルトにザイル1本、食糧はツアンパにキャンジュンで求めたチーズだけで、初見参の二人に登れる程、ヒマラヤは甘くはなかったが、それでも我々はアンビシャスであった。ランタン氷河を遡って後、ガネッシュ・ヒマールのチリメ・コーラに入った我々は、氷結したヤン・ツォを渡り、ティルマンが初登頂したパルドールの肩に達して、アンクー・コーラを眺めた。その後、ガネッシュ・ヒマールの南麓を横断して、ブリ・ガンダキに出た後、ラルキヤ・ラを越えて、彼が1950年に偵察したヒムルン・ヒマール山群を真近に眺め、その奥の遙かな山々に憧れた。

四半世紀近く過ぎたが、幸いにもナル・コーラ源流に入域出来て、ラトナチュリの初登頂に成功した。登山が早く済んだら、彼がブー・ガオンの村から達した国境のコングール・ラの峠に、彼を偲んで出かけてみたいと思っていたが、日程が遅れ、かなわぬ夢となった。年をとって高峰に登れなくなったら、再びブーの村を訪れ、今度こ

そ、彼が立った峠に出かけたいと思う。

'93年暮、合同登山の交渉に、小川勝OBとカトマンズに出かけた際、ターメルの本屋でティルマンとシプトンの著書を各々求めた。ティルマンのそれは『赤道の雪』から『ネパールヒマラヤ』までの7冊の合本である。

現在単身赴任の一人暮し、気ぜわしい日々の暮しに疲れた時、辞書を引き引き、ティルマンの本を読んでいる。本のカバーの裏表紙に彼のポートレートがある。ピッケルの上に厚いパンを載せ、パイプをくわえた、かつて諏訪多栄蔵氏が一番好きだと『ネパールヒマラヤ』訳文の解説に書かれた、それである。その写真を眺めているだけで、何だか元気が出てくるようである。



下山後のパーティにてラナ隊長より記念品を受ける渡部隊長

नामः गिता बहादुर जोशी  
 दर्जा: प्रहरी नायव निरीक्षक  
 दरवन्दी: राष्ट्रिय प्रहरी प्रशिक्षण प्रतिष्ठान हिमाली शारा  
 स्थानः सगरमाथा अञ्चल ओखलडुङ्गा जिल्ला गा. वि. स तल्ला विभिन्ने

यहि २०५३ सालको शरद ऋतुमा नेपाल प्रहरी तथा शिन्सु विश्वविद्यालय कलब जापानको संयुक्त परिषम मनाङ जिल्लाको फु गाउँ स्थीतमा पर्ने ७०३५ मीटर आलो रन्धुली हिमाल आहोरेण दलमानेपाली टिमको तर्फबाट आरेही सदरसमासम्पीलीतीभईजानपाउँदा मलाईज्याहै रुशीलागेको छ।

यस्तै सफलता यस भन्दा पाहिले पनि नेपाल प्रहरी तथा जापानको शिन्सु युनिभरसिटी कलब सित मिलेकर ई.सं. १९९४ मा पानि न्यातिकाङ्क्ष हिमाल आहोरेणमा यस्तै गरी सफलता हासिल गर्न पाएका थिए। यस वर्षको यस आरोहण सम्पीलीत नेपाली टिमका टिम लिडर प. ना. उ. श्री शुभ बहादुर रानाङ्गुर र जापान शिन्सु युनिभरसिटी कलबको तर्फबाट नेतृत्व गर्नु हुने जनरल लिडर श्री मासाव नोमुरासाङ्क र टिम लिडर श्री भियुनोरी वातानाबेसाङ ज्यूमा हार्दीक वर्षाई तथा आभार व्यक्त गर्दछु। साथै यस सफलताको खुसियालीभा जापानका सबै आरोही सदरस्थहन लगाएन नेपाली प्रहरीका आरोही सदरस्थहन समेतमा हार्दिक व्याई साथै सथन्यबाद व्यक्त गर्द छु। यस भन्दा पाहिले पनि वित्त वर्षहरूमा धेरै वटा पर्वतारोहणको सफल आरोहण गरिएको का छौ। त्यसबेलाहरूमा पिनि एक आपसमा राम्रो सम्बन्ध थियो तर पनि वित्त वर्षहरूमा भन्दा यसपालिको रन्धुली हिमाल आरोहणमा शिन्सु विश्वविद्यालयका पर्वतारोहण आरोही सदरस्थहरूमा धेरै नै मेलमिलाप र अनुसासित पाईएकोमा ज्यादै खुशीलागेको छ। ऐउटै मत ऐउटै जुट भएको कारणले हामीहरूले यसपाली पनि राम्रो संग सफल आरोहण गर्न सफल भयो। पर्वतारोहण कार्य गर्न सजिलो कुरो त होईन जोखीमपूर्ण कार्य हो। पर्वतारोहण जोखीमपूर्ण कार्य भएता पनि ऐउटै मत एउटै सल्लाह भएर काम गर्दा जुनस्तुकै काम कार्यहरूमा पनि सफल पाउन सकिने रहेछ भन्ने मलाई हुलो विश्वास लागेको छ। यस सफलताको खुसियालीभा मेरो तर्फबाट नेपाल प्रहरीका पर्वतारोहिहरूसमेतका सम्पूर्ण सदस्यहरूलाई हार्दिक व्याई साथै उत्तरोत्तर प्रातीको लागि शुभकामना व्यक्त गर्न चाहन्तु।

## ラトナチュリ登山隊に参加して

ネパール警察登山探検財団山岳部

ギタ・バハドゥール・ジョシ

1996(ネパール暦2053)年の秋に行われた、マナン州の西方に位置する未踏峰ラトナチュリヒマール(7035m)へ「ネパール警察・信州大学合同登山隊」の隊員として参加できることを大変嬉しく思います。

今回のような成功は1994年のネパール警察と信州大学山岳会のギャジカンヒマール(7038m) 合同登山にもありました。

ネパール側隊長のグプタ・バハドール・ラナ氏、登山総隊長の野村昌男氏、日本側隊長の渡部光則氏に心から感謝を申し上げたいと存じます。

また、同じくネパールと日本両国の隊員全員の方々へも、この登頂の成功に関して感謝と祝福の気持ちを送りたいと思います。

過去、ネパール警察は数々の登山に参加し成功を収めてきました。

今回の登山の成功は両国の隊員がお互いに気持ちをよく理解した結果だと思っております。もちろん過去の合同登山でも両国の隊員間でお互いの気持ちを理解し、協力し合う強い心構えがありました。今回は過去よりも更にお互いの気持ちがより一つになった事と、信州大学山岳会の皆さん達が大変厳しい規律をお持ちである事から目的を達成出来たと思います。

信州大学山岳会の皆さんの大変正しい規律に私は非常に驚き、皆様に感謝したい気持ちでいっぱいです。両国メンバーの心が一体化したため今回の登山が成功しました。

ヒマラヤ登山は簡単なことではなく非常に危険な作業です。しかし、心を一つにして仕事をすればどんなことも成功させることができます。

今回の成功を祈ってネパール側と日本側の皆さんに心からおめでとうを言いたいと思います。また、皆さんの将来の成功をお祈りいたします。

(訳:信州大学農学部 マドウ・スダン・シュレスタ)

## 初登頂後のクライマックス・帰りのキャラバン

田辺 治

10月22日、BCを撤収する。帰りのキャラバンは、ヤクと馬を使うため、プー・ガオンから村人が上がってきた。彼らは、グルン族を自称しているが、生活習慣や考え方完全是チベット人である。まず、隊荷の山を前にして、「この荷は重い、いやあの荷は軽くて不公平だ」と、さんざん議論の花を咲かす。

すべての荷物を彼らの前で計量し直すと、軽い荷物がいくつかあった。これを合わせると、隊荷が2個減ることになり、また果てしない議論となる。ヤクにつける荷物なのだから、多少重くても軽くても問題はないのであるが、少しでも良い条件を私達から引き出すために、それぞれが勝手なことを大声でわめきちらすのであった。そのうち、「この山は、我々の山である。我々に許可なく登ったのは実にけしからん。よって我々に登山料を払え」という者が現われ、マナスルに初登頂した日本山岳会隊を思い出してしまった。夕方、話がやっとまとまる、大勢いた村人は、ほとんど姿を消した。どうやら団体交渉についてきた、やじ馬らしかった。16時になり、やっと出発する。その瞬間、荷物をつけたヤクの群れが大暴走を始め、振り落とした荷物を残して、下界へ消え去った。私自身、ヒマラヤ遠征14回目にして、初めてお目にかかる大スペクタクルであった。

キャラバン2日目、おそれていた大雪がやってきた。このため、私達は、カン・ラ越えの道を閉ざされ、ナル・コーラに閉じ込められることになった。これは、プー・ガオンの村人にとっては願ってもない幸運であった。彼らの意のままに、できるようになったからである。降り続ける雪の中、25日にはストライキをうたれ、私達は食料・燃料とも欠乏し、進退きわまったく。やむなく26日、一部のネパール隊員と田辺を残し、他のメンバーは口減らしのため、行きに3日かけた行程を1日で走って、マルシャンディまで脱出することにした。行くも地獄、残るも地獄という状況の中、今度はドクターが雪道で滑って、左足を複雑骨折してしまった。ヒマラヤ遠征には、成否をわける山場が、どこかにあるものである。

しかし、帰りのキャラバンに山場がやってくるとは思いもしなかった。現場では、ドクター自身の指示のもと、さっそく足を固定し、キャンプサイトでは、搬出用にドッ



C 2へ登攀中の田辺隊員

コ(竹カゴ)を切って加工した。すると、「このドッコは私のものだ。絶対渡さない」というプー・ガオンのおばさんが現われ、40ルピーのドッコに対し、500ルピーも支払わさせられた。ここの住民は、困っている人を見たら、けとばして身ぐるみ剥げ、という教育を受けているのであろうか。

そんなことをしているうちに、プー・ガオンの村人達も、ヤクと馬をうごかしてくれることになったが、その日当は最初の約束である200ルピーから、500ルピーまで跳ね上がっていた。ストライキの効果は絶大であったと言えるが、何はともあれ、26日、苦痛に呻くドクターとともに、キャンからダラムサラまで移動することができた。

翌日、ダラムサラからマルシャンディ街道のコトまで1日の行程であったが、またしてもサボタージュにあい、全隊荷がコトに集まったのは、28日であった。こうしてナル・コーラから脱出できたが、プー・ガオンの村人を即座に首にしたのは言うまでもない。支払いが大モメとなり、怒ったサーダーのヌルが、ククリを振りまわして、自分の指を切ってしまうというハプニングもあった。ネパール側隊長のラナ氏もすっかり頬がこけた。それにしても、警察という国家権力がこれほど住民にペロペロ舐められまくるとは、ありそうなこととはいえ、新鮮な体験であった。

マルシャンディ街道まで出れば、後は法律の通用する世界である。28日に、レスキューヘリコプターでドクターを運び、11月3日、警察庁長官以下の盛大な歓迎を受けて、私達はカトマンズへ帰着したのであった。

## 雑 感

金子鉄男

卒業してからも5年程、許される限り登山活動を続けていたが、30歳の時、アキレス腱を立て続けに2回も切る怪我のため歩行障害が残り登山はあきらめていた。仕事も忙しく、別に登れないことが寂しいということなしに過ごしていた。

不惑の年をかなり過ぎた45歳頃より、運動不足の解消を目的にそれなりの登山活動を再開した。元来、雪山が好きだったので、西穂高、木曽駒ヶ岳のようなアプローチが楽な山の正月、ゴールデンウィーク時期の登山を考えており、ヒマラヤに行けるとは考えていなかったし、その時点では行こうとも考えていなかった。

3年程そんな調子で、分相応の登山を楽しんでいたが、いつしか学士山岳会の総会に顔をだすようになった。この頃は、2人の子供達も大学生となり、親として精神的ゆとりができる時期でもあり、気のあった山仲間と仕事以外の話をしながら酒を飲み交わすことが新鮮で楽しかった。

しかし、やはりヒマラヤ遠征は自分とは無縁の世界と考えていた。

自分の学生時代とは異なり、後輩の仲間には卒業してさらにヒマラヤの山を登る精銳の田辺君、吉田君のような山屋があり、その人達の話を聞くうち「仕事も山も独学でなく正しい最新の知識を得れば、ある程度までのレベルに早く高く到達するのでは?」と考え方がかわってきた。登山では歳をとりすぎているし他のメンバーの重荷になり迷惑をかけるかも知れないと、仕事人間であった故に別の視点から自分を見直す機会かもしれないとの思いが高まり、同期の御子柴三男君の勧めもあり50歳を前に今回の遠征参加を決意した。もちろん、会社周辺の理解を得ることが第一であったが、上司にもめぐまれ、気持ちよく長期休暇を認めていただいた。

気の持ち方とはおもしろいもので、遠征直前には、足の怪我をおして東京を早朝車で出発し富士宮口六合目から富士登山を行い、10時間後には再び東京に戻るまでになっていた。遠征を意識しなければ、こんなことは考えなかつたと思うし、出発直前の時間的余裕のなさが意識の高揚につながったといえる。

出発まで医療品・装備品の寄贈から購入までの調達、そして松本での梱包などいろいろやらなければならない仕事はあったが、田辺君の適切な指導があり、また本業の

橋梁の現場に乗り込む前の準備期間と、集めるものこそ異なれ、基本的に仕事の延長線上の作業であった。

関西国際空港で扇能君、家族の見送りをうけカトマンズについてからは、やはり今までの経験になかった世界であった。言葉の壁と遠慮も手伝い意思疎通が円滑に進まぬ中でのネパール側メンバーとの共同作業、田舎のくせに排気ガスの充満するカトマンズでの買い物など、正直いって疲れはしたが、楽しいひとときであった。

それでもネパールは、アジアの国であり人種的に日本人に近く、我々のルーツといえる原風景が背景にあり、私にとっては登山活動以外の生活もなじみやすいものであった。余談だが帰国直前のカトマンズでは、現地にすっかり同化していたのか、闇の両替商に声をかけられることはなかった。

登山活動は、国内登山にない高度順化の出来不出来で成果が大きく異なる。私を含め高齢者の多い我が隊が、ギャジカン隊同様に全員登頂という成果を上げられたのも、田辺君を始め経験者の高度順化教育があったお陰であろう。精神論を振りかざすことなく、全員に高所医学を理解させた上で順化メニューが体に優しかったと考える。とはいっても生理機能を円滑にするために飲む一日4Lの水分補給のお陰で、夜間何度もトイレに行き来したことだろう。ふつうなら安眠の妨げになる過剰水分の摂取は控えるのだが。

登山自体は呼吸困難な他は、吹雪の中を活動したわけでなく日本の冬山より乾燥した快適なものであった。ただ、ルート工作後のトレースをたどっただけであり無駄な体力消耗は避けられたが、高地では体力的余力がないため、ちょっとした滑落などのワンミスが命取りになることも実感できた。登頂直前の瞬間は今までの準備期間の長さ、いろいろなしがらみが脳裡をよぎり、感情が高ぶり感謝の気持ち一色の状態であった。透明で素直な自分がうれしかった。悟りとはこんな境地から始まるのかなと考えたが、下界に降りるにつれ俗世に苦もなく順化した。

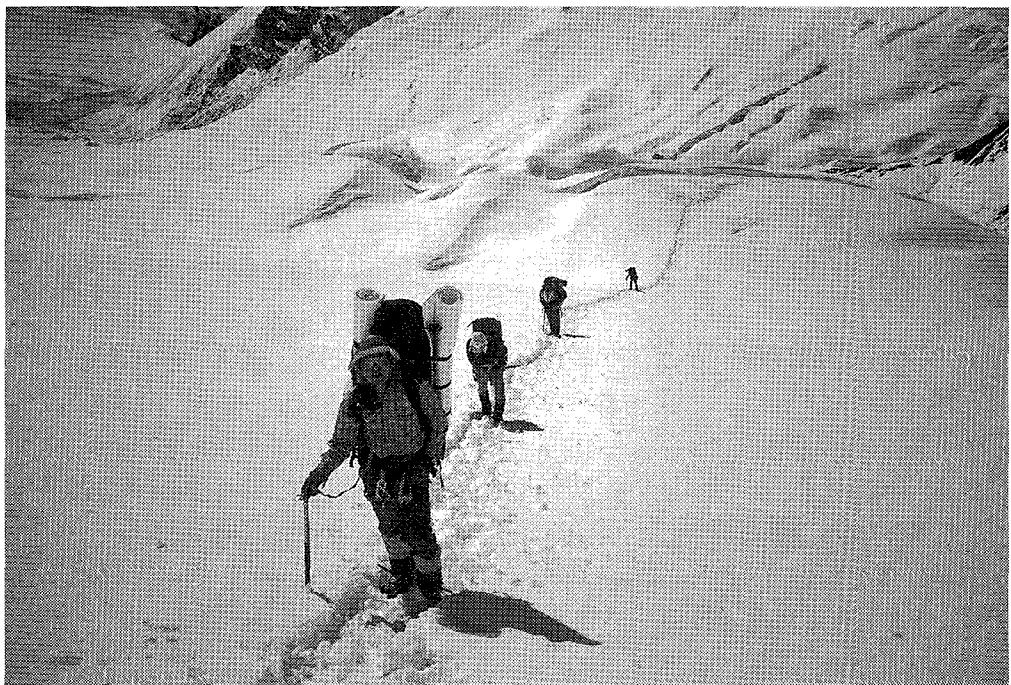
帰国後、熱気がさめた頭で悩んでいる。かなりの無理を押しての遠征活動であり、会社には迷惑をかけたし支援もしていただいた。いろいろの人たちの温かいご支援もたくさんいただいた。このお返しは出世払いでお返しする歳でもないし困っている。

ただ、いつまでも若さを忘れず夢をもってことにあたれば目的は達成されるほど甘いことでなく、ヒマラヤ登山に長けた人たちとの出会いという環境がなければ成就しなかったとあらためて考えている。パソコンにたとえてみれば、「多少器械（肉体）が古くなても、新たに良いソフトウェア（環境、知識）に巡り会えば、今まで出来なかった仕事が出来るようになった」との学習成果と遠征に参加したという事実報告で、とりあえずご容赦していただくほかないと居直っている。

もうすぐ、52歳。社会生活において何事にも自分の経験で判断し独善的になりがち

#### 4 雜人・雑感

であるが、他人の知識・考え方の中に気がつかないソフトウエアがいくらでもあるのではないか？ と考え仕事における次の目標とやり方を模索するこの頃である。最後に感謝の気持ちをこめて ナマステ！



C 1 直下の急雪壁へ荷揚げに向かう金子、澤田、ジョシ、フル

TO

The Academic Alpine Club of SHINSHU

First of all I would like to give my hearty for providing me an opportunity to write few words for your final report. I really enjoyed this expedition on the way to base camp and while remaining at the base camp climbers and other staff as well. I am very glad on the success of expedition and congratulation to all summiters. I thank you all for your co-operation, helpfulness and well disciplined manner. I hope Nepal Police and shinshu University of Japan will organize such expedition in the days to come. Thanks-alot.

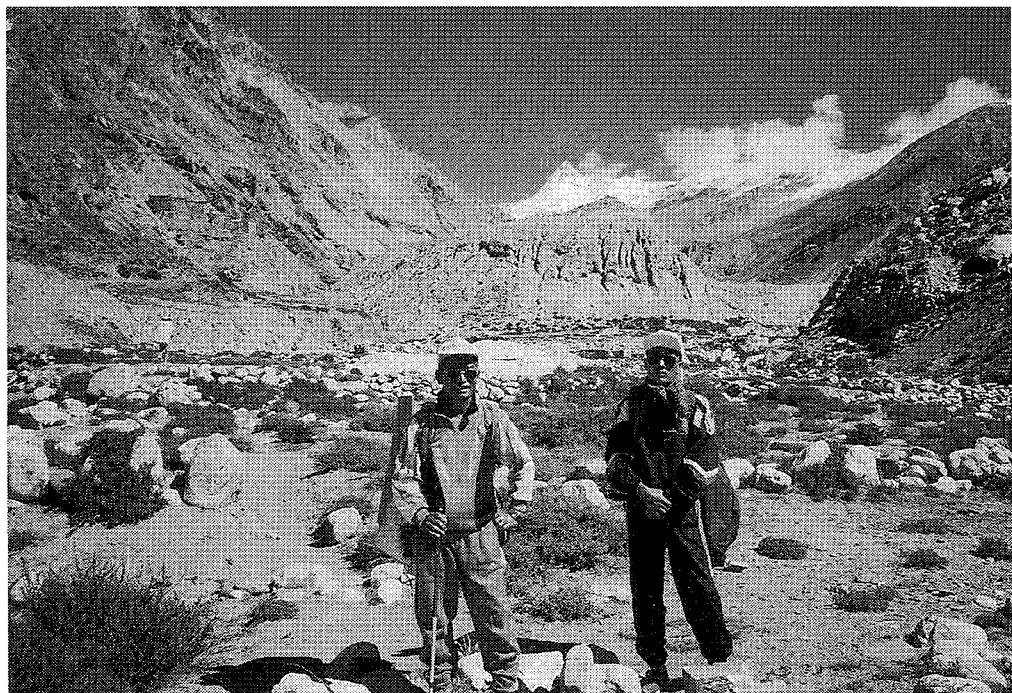
Liaison Officer

(Inspector,J.B.Nepali)

National Police Academy

Kathmandu

Date : 6 Nov. 1996



ブー・ガオン手前にてラナ隊長（左）とリエゾンオフィサー・ジャヤ隊員  
Mr.G.B.Rana (Leader of Nepal team) and Mr.J.B.Nepali (Liaison Officer)

## 信州大学学士山岳会へ

リエゾンオフィサー・国立警察学校警部

ジャヤ・ビシュヌ・ネパリ

私は、この報告書に一言申し上げる機会を与えて下さって心から喜んでいます。

私はベースキャンプに向かってキャラバンを行っている時や、他の登山隊員やスタッフ達と一緒にベースキャンプに滞在している時は、大変楽しい時間を過ごしました。

今回の登頂が成功した事を大変喜んでいます。又、登頂した隊員の皆さんに心から「おめでとう」を言いたいと思います。

皆さんのご協力、優しさと親切に深く感謝し、今後も信州大学とネパール警察の合同登山が続けられることを期待します。

(訳:信州大学農学部 マドウ・スダン・シュレスタ)

## 登山日誌より

澤田克彦

1985年3月8日 8:45 曇り、強風 ペテガリ岳（澤田、藤田）

コイカクシュサツナイ岳から来た。低温で手が痛い。嬉しい卒業記念になったが、ペテガリ、利尻、そしてヒマラヤ未踏峰へという計画は、6年間の在学中に実現出来なかった。ペテガリだけでも3回目だ。3週間もすれば会社員だが、仕事を続けながら計画の継続は果たして可能だろうか。一つの実験といえるだろうと考えながら小雪の舞う西稜を下る。

1987年1月1日 曇り 空木岳頂上 単独

社会人ともなると学生のような長期登山が行い難い。

1988年5月5日 雪、雨 鹿島槍 単独

爺ガ岳から縦走してきたがキレットで風雪になり視界効かずツェルトビパーク。長い夜を過ごし朝を迎える。

1990年1月3日 12:00 アンナプルナ内院BC4000m 雪 単独

降りしきる雪の中、帰りに寄ったヒンク洞穴でヨーロッパ人達が焚き火を囲んでいる。「もう帰るのか。ゆっくり晴天を待とうぜ」と誘ってくれるが、日本の短い休暇を説明し、1人下山する。

1991年4月30日 14:30 曇、利尻岳東稜（丸山、加藤、澤田）

ガスと強風の中、登頂。丸山君、加藤君との愉快な登山。次はヒマラヤだと思う。

1992年12月29日 10:15 曇り強風 奥穂高岳（今滝、澤田）

冬山らしい烈風の奥穂高頂上。ガスの切れ間に滝谷が凄い様相をのぞかせる。

1993年1月 穂高山荘 ヒマラヤ実行委員会

岩村君が「アンナプルナⅡ峰の計画があるらしい」と連絡してくれた。OB会とは疎遠になっていたし大登山隊は趣味ではないが、話だけでも聞きたいと思い参加。

1993年9月17日 11:00 晴れ後、曇り アンナプルナⅡ峰北稜下部岸壁横断バンド5000m

北稜へ上がる「2のガリー」を見つつ、憧れてきたものの自分には難しすぎると思う。

1994年10月20日 愛知県知多市にて

信大、ギャジカン初登頂の朗報を聞く。連中の顔が思い浮かび嬉しい反面、こちらは出向先のコンビナートで仕事に集中し全く山へ行かない1年を過ごす。もう未踏峰どころか国内登山さえ無理になっている。

1995年12月 実行委員会

ラトナチュリの許可が下りた。まさかと思ったが本当のようだ。即座に決心し隊員に立候補する。上司にも無理難題を相談する。好意的に聞いてくれるが、とんでもない部下である。

1996年1月3日 赤岳西壁 (田辺、澤田)

思うようにスピードの上がらない登攀であった。これではいけないと思う。

2月3日 赤岳主稜 曇り後、雪 (澤田、磯部)

現役の磯部君を連れて、すべてリードして登攀する。

4月1日 異動、引越し

思いがけず異動命令。新しい職場で登山どころではないのではと心配する。

6月1日 会社からの許可下りる

寛大なる許可が得られ、良かった。仕事が忙しく準備が出来ないので困る。トレーニングも余計な事を行わず毎日、深夜のランニングと週末の富士山だけに集中する。

8月25日 準備

先発隊から忘れ物や買い物依頼が次々に電話やファクシミリで連絡される。

仕事が終わってから買い物に行くので、すぐ閉店時間が来てしまう。仕事を何とか切り上げるべく、連日残業、休日出勤で、体調を壊さないように極力気をつける。

9月1日 後発隊出発 荷物234kg、RA412, 13:00、関西空港——カトマンズ現地時刻18:10着

前日の午前中まで仕事をしていたが、現実に出国できた。今までの束縛と緊張から急に解かれ脱力感におそわれる。インド上空から金色のガンジス河を眼下にしていると元気になってくる。なんと実験は計画通りに進んでいるではないか。

9月8日 くもり、気温30℃、キャラバン (トウレトゥレーボテオラ)

炎天下、マルシャンディ川に沿って点在する村々を通り、のんびり歩く。牛、アヒル、犬、子ども、大人、教科書を手に学校へと歩く女学生。小学生の質素な青い制服とネクタイがかわいらしい。

カトマンズの喧噪から離れて農村部へ来ると本当に落ちついた感じである。

電気のない自然の生活がよいなどと軽々しくは思わないが、質素な食事、厳しい労働、川で洗濯している親の横で泳ぎ回っている大勢の子どもを眺めるにつけ、日本の生活というものの方について考えざるを得ない。

### 9月22日 晴れ 高山病

今日は5200mのベースキャンプへ地元のラマ僧がきて祈祷をする大事な日である。ところが腹痛と頭痛で目覚め、朝食もほとんど吐いてしまった。もう、4500mのカルカ（放牧地）には順応しているはずなのにと思いながら出発する。

しかし、途中で呼吸が激しく、頭痛がひどくなり、5000mから1人でパングリ・カルカへ帰った。4500mにはまだ順応していなかった。自分の高度変化に対するリズムが判る。こんな所でこの状態ではと思うが先は長いと自重する。1人、テントで横になっているとガレさんが親切にも紅茶を大量に持ってきててくれた。

### 10月9日 晴れ 前進ベースキャンプ～C1～C2 Bパーティの高度順化（L・澤田、金子、小林、ジョシ、フル）

本日はAパーティのアタック日である。我々Bパーティは荷揚げ、高所順応を兼ね6600mの西峰を越え、高所キャンプ（C2）入りする。

天候もよく、C2から頂上直下に黒点4つが見える。まさしくAパーティの田辺、内田君等である。登頂は時間の問題だと嬉しく思う。果たして自分はあそこまで行けるのか。Bパーティも全力を尽くす以外にない。Aパーティの健闘を祈りC1へ下った。

30分ほど歩いたところで、「ただ今より下る、ザイルが足りない」とAパーティとBCとの交信を傍受。先程まで本日が初登頂と思っていただけに不可解に思う。

### 10月14日 Aパーティサポート C2～頂上アタック

悪天などで、3回目の計画変更。Aパーティのサポート隊としてC2入り。我々、Bパーティはサポート隊として分割された。高所順応、休養のリズムも狂い、日数的にも、再度アタックできる可能性はないが、今はまず第一次登頂隊をサポートして、とにかく登頂者を出さないといけない。

夜半、少し降雪あり。テントの上から積もった雪に頭と足先が圧迫されて夜中に目覚める。どんよりとした頭痛がする。学生時代、豪雪に苦しんだ剣北方稜線のことなどが思い出され、あまり眠れない。

午前3時30分、起床。外に出てみたが風が強くネパール側も行動の気配なし。

5時頃、ドゥルガ隊員が声をかけてくる。彼らも登る気だと明るい気持ちになる。しかし朝焼けが不気味だ。天候がよくない事を示しているが、風が弱まるまで待機する。

5時半定時交信。「期待しているが無理するな」と渡部さんより返事。

風が幾分弱めになってきたので、7時にテントを出る。

カメラを2台もって行くべきか迷う。少しでも軽くしたいが、記録係の責任もあり結局、一眼レフとコンパクトカメラをザックに入れた。

地吹雪の中、出発。まず西峰（6600m）と主峰の間にあるコルへ降りる。最後尾から写真を撮りながら行ったので先頭から100mほど離れてしまった。最低コルは烈風

の通り道のようで雪煙があがっている。

日本の冬山では、どんなに寒くとも30分も歩けば体が暖まってくるが、いくら歩いても体は温かくなっこない。酸素が薄いので発熱量も小さいのだろう。

頭が痛くなってきた頃、先頭のツル、田辺に追い付いた。頭が痛いのは寒さのためとも思い、高所帽の下に目出帽をかぶることにする。目出帽を出そうとしてザックを開いている時、オーバー手袋の流れ止めが切れ片方が飛ばされた。予備の手袋を出してはめる。

目出帽を飛ばされると致命的になりそうな気がして、ツエルトをかぶり目出帽を慎重に取り出し、高所帽の下に被り衣服を整え一息つく。頭が温かくなり、あと4ピッチくらい登れると確信し再度出発する。

田辺が何か怒鳴っている。トランシーバーの電源が切れていた。

青空が時折、見えるが相変わらず吹雪いている。そのうち、ドゥルガ隊員が頂上だと叫んでいる。おかしい、あと2ピッチあるはずだ。しかしツル隊員はピッケルをあげている。そこは頂上だった。南北に約10m程の雪稜のような。

もう登らなくてよい。遂に来てしまった。ネパール・チベット国境上である。

トランシーバーでは「みさなんありがとう」としか言えない。これまでの糺余曲折、妻の事、渾然となった感情で茫然としてしまう。

強かった風も若干弱まり、時折、開ける視界の中にダウラギリ、マナスルなど話や写真でしか知らなかつた8000m級の山々が青くみえる。

また、チベット側は対照的に赤茶けた高原が広がり所々に青い池も見える。ルンボカンリが見える。あの奥にH. ハーラーが滞在していたラサがあるのかと思う。

旗を立て写真を取つたりしているうちに60分がすぐに経ってしまった。名残惜しいが体も冷えきり早く帰りたい。あまり視界の利かない中、黙々と下降する。

プラトーに再び戻った頃、周囲は完全にガスで見通しも利かず風も強くなってきた。

C2までの登りはいつもの冬山ならせいぜい30~40分といった距離であるが、2時間もかかって登り返した。

ヒマラヤでは登頂できても下りでの事故が多いという理由が実感できた。やはり帰りの体力も綿密に計算しないといけないと感じながらC2に着いた。

「お祝いの日本酒が飲みたいな」等と田辺と話をするが、食欲もなく緑茶を飲み、せんべい2枚を食べただけでシュラフにもぐり、幸福な気持ちで寝てしまった。

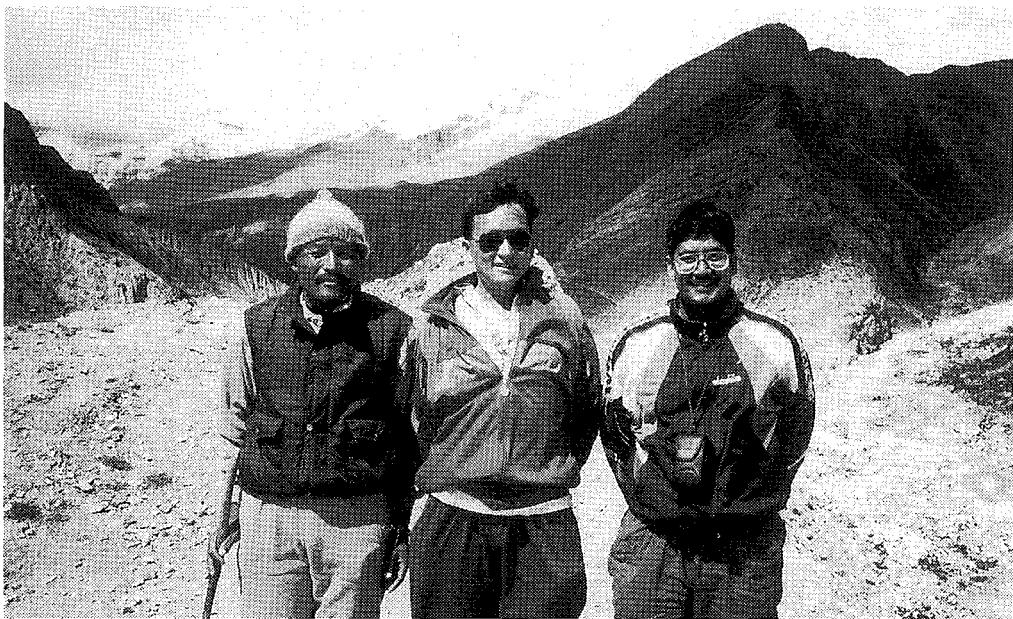
学生の時からヒマラヤの未踏峰へ行ってみたいものだと思っていましたが、12年後に実現できた事は本当に嬉しく、隊員の皆さん、実行委員会の諸先輩、オーバーシューズを製作してくれた鷹取君、お守りをくれた三野君、参加を認めて下さった勤務先の上司、同僚、後輩の方々、そして家族に感謝いたします。



ラトナチュリ頂上の澤田。十数年前の寮祭の手ぬぐいを持ってきた

## गीत

- १) पहिलो सलाम हे लई लई विरेन्द्र राजालाई  
दोस्रो सलाम हे लई लई आरोही दादालाई  
एडभान्स बि.सि.क्याम  
काम सफल भो अब भने जाउँ
- २) नेपाल पुलिस हे लई लई जापान दुई मिलेर  
बाटो बन्यो हे लई लई फिक्स रोपले खिलेर  
एडभान्स बि.सि.क्याम
- ३) रत्नघुली हे लई लई समीट गरेर  
जान्छौं हामी लई लई मोटरमा चढेर  
एडभान्स बि.सि.क्याम
- ४) वान क्याम टु म्याम हे लई लई उकालो चढेर  
फर्क्यो टोली हे लई लई समिट गरेर  
एडभान्स बि.सि.क्याम
- ५) अल मेम्बर हे लई लई स्टयाण्ड फर दिएर  
बडा साहव हे लई लई प्लीज डान्स दिएर  
एडभान्स बि.सि.क्याम  
काम सफल भो अब भने जाउँ



ブー・ガオン村の裏山にて、左より、フル (HAP)、  
アルジュン (メイルランナー)、シュレスタ医師  
Mr.F.B.Rai (HAP), Mr.A.B.Gurung, Dr.V.Shrestha

## 歌

アルジュン・バハドゥール・グルン

- 一 第一の挨拶、ほいほい、ビレンドラ王様に  
 第二の挨拶、ほいほい、登山隊長に  
 進もう、ベースキャンプ  
 登山が成功したら帰ろう
- 二 ネパール警察と日本、ほいほい、協力しながら  
 道が出来た、ほいほい、フィックスロープで繋いだら  
 進もう、ベースキャンプ
- 三 ラトナチュリ、ほいほい、登山しながら  
 帰る我々、ほいほい、車に乗りながら  
 進もう、ベースキャンプ
- 四 ワンキャンプ、ツーキャンプ、ほいほい、坂を登りながら  
 帰ってきた登山隊、ほいほい、登山が成功したら  
 進もう、ベースキャンプ
- 五 立ち上がりう、皆さん  
 さあ踊ろう皆さん、隊長と一緒に  
 進もうベースキャンプ  
 登山が成功したら帰ろう

(訳:信州大学農学部 マドウ・スダン・シュレスター)

## 雜 感

内田 健一

もしかすると私は、ラトナチュリ登山隊の隊員としてふさわしくない人間であったかもしれない。

私はただ山が、ヒマラヤが、とても好きなので、7000mの未踏峰か、楽しそうだな、と思って、個人的には大いにヒマラヤ登山を楽しむつもりで今回の遠征に参加してしまった。

しかし、ネパール警察との合同登山隊であり、ネパール警察・信州大とともに組織の威信を懸けた今回の登山の中で、私のような個人の道楽が許されるはずはない。

この点、そういう面において鈍感な私は、出発するまでに、こんな簡単なことに気がつかなかった。現役時代の冬山合宿の長期間のようなものだろうと思っていた。私にとっては冬の北アルプスに、20日分の食料や装備を背負って入山する冬山合宿は、最高に楽しい山行だった。

そんな私だったので、遠征中は隊員の皆様に迷惑をおかけしたと思う。又、私自身もかなりやりきれない気分になってしまったことがあった。

これからはもう、今回のような大部隊での遠征は参加できないかも、と思うが国内での雑用など私に出来ることがあれば何でも手伝わせて欲しい。

今回の遠征を陰で支えて、成功へ導いてくれた方々に感謝したい。

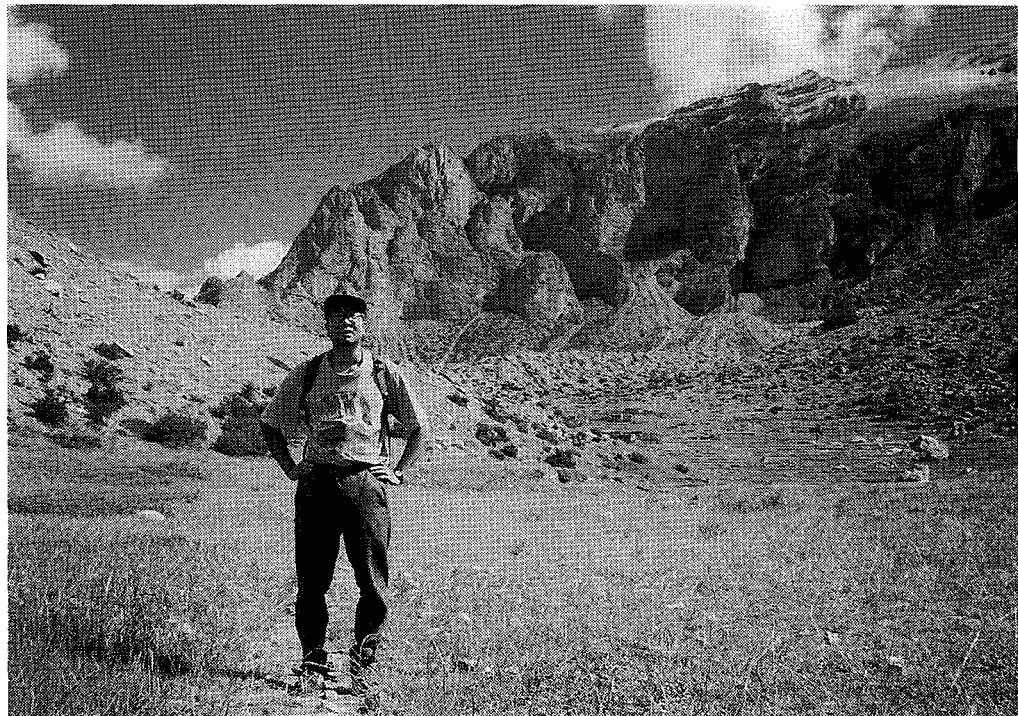
こんな遠征だったが、もちろん楽しいこともたくさんあった。田辺治登攀隊長モデルの巨大雪ダルマは我ながら傑作であったし、第三次アタック隊のリーダーをさせていただいた山頂も実に爽やかであった。

そして何よりも国籍や年齢を超えた良き友人を得られたことを感謝したい。

目を閉じるとヤクの糞から立ちのぼる青い炎と、山の娘さんたちの歌声が聞こえてくるような気がする。

「ヘシシメーパニーマ……」なんて……。

また遠くない将来、ヒマラヤに行きたいな。今度は思いっきり楽しむだけのために。



雨季も終わり、久しぶりの青空を喜ぶ内田隊員、後方はピサンピーク東面

## これからの自分を考える

花 谷 泰 広

ラトナチュリ遠征を終え、帰国してはやくも4カ月という月日が流れた。信大山岳会のチーフリーダーになったのはついこの前。がむしゃらにヒマラヤにとりついていた頃は考えもしなかった事だ。そしてチーフリーダーの初仕事として、2月～3月にかけて南アルプス光岳～北岳間の縦走を行った。17日間という長い山行は、僕自身経験がなく、体力的に不安だったが、全コースをトレースできた時の喜びは、ラトナチュリを登った時以上のものだった。自分の未熟さ故に完全燃焼できなかったヒマラヤに対し、南アルプス全山縦走は100%自分の力をぶつける事ができた。

その17日間で、僕は、自分に合っている登山というものを常に考えていた。将来どのように山に向かい合ってゆくか。ある時は田辺さんのようなバリバリのヒマラヤ登りを考えたり、またある時は小学校の恩師と登った山を思い出したり……自分の中でもはっきりしていないようだ。たった1回の遠征では何も分からぬ。おそらくあと2～3回行けばだいぶん見えてくると思うのだが、少なくともこの2～3年はヒマラヤに登る機会はないだろう。

しかしなぜ日本ヒマラヤ協会の「20000mを越えた男たち」のリストを見るとゾクゾクするのだろうか？ 僕は志水哲也さんのような登山がしたいのに、体育会系な性格のせいだろうか？ 上に人がいると妙にライバル心を持ったりして……表面では「俺は危険なヒマラヤ登山はもうやらない」と言っていても、心のどこかでの雄大な山々がおいでおいでしているような、そんな感じがするのだ。でもヒマラヤ以外で私を引き付けているものもある。

それは山以外の事もかかわってくるが、総合的な野外活動だ。スキー、スケート、スノーボード、スキーパーバダイビング、パラグライダー、スノーモービル等。やりたいことが山ほどある。どれも山と同じかそれ以上の魅力を感じる。山しか知らなかつた僕の視野を広げてくれた。この野外活動を子供たちに伝える、いわゆる野外教育指導者にもなりたいのだ。

しかし今はとりあえず、自分が満足する山登りをしていこうと思う（実はそれが一番難しいことなのだろうが）。大学現役の残りの年月は国内の山々を後輩を教えなが

ら登ろうと思う。また、後悔しない大学生活を送りたい。そのために、学業にもしっかりと力を入れるつもりだ。

そして大学を卒業する時、あるいはそれよりも先になるかもしれないが、答えが出るはずだ。自分は何を目指すのか。自分の学業として専攻している野外活動の指導者か、あるいは……。

最後にこの遠征を成功に導いてくれた多くの方々に、そして僕を登頂させてくれた隊員の皆様、ネパール側スタッフ、部員不足で大変な時に快くヒマラヤに送り出してくれた現役の先輩、同輩、後輩、遠征の参加を理解し、許可してくれた両親に感謝します。ありがとうございました。



キャラバン出発時にネパール警察学校生徒から見送りを受ける花谷、フル隊員

## ラトナチュリ・パーソナルバランスシート

小林茂幹

嬉しかったこと	辛かった事
飛行機に乗れた	床屋ですごくぼられた
床屋でぼられた金が戻ってきた	早朝、起きなければならない
「ほとんどチベット人」に会えた	ヤギの首が僕の方へ飛んできた
全員登頂できた	泥棒宿に泊まった
馬に乗れた	ヤクのミルクで腹をこわした
アンナプルナ、ダウラギリ等を見られた	南京虫に悩まされた
出発前、彼女ができた	登頂時、内田さんに遅れをとった
「ほうとう」が好評だった	ストレス発散方法がうまくなかった
様々な人に会えた	雪中のバックキャラバン
下山後の空気がおいしかった	帰国すると彼女が心変わりしていた
ヤクの糞で焚き火ができた	空気が薄かった
田辺さんの美女巡礼のお供ができた	会計の収支が合わなかった
美人郷の位置がわかった	やせることができなかった
酒がうまかった	ビールがいつもぬるかった
いきなり7000m級未踏峰に登れた	宴会芸がなかった
みんな無事だった	



登頂後、前進ベースキャンプ(5500m)へ帰還した小林、後方は内田



## 5 おわりに



マルシャンディ街道、ベシ・サハールの小学生

## 実行委員を代表しての謝辞ならびに今後の展望

信州大学学士山岳会会长  
信州大学ヒマラヤ遠征実行委員長  
信州大学農学部助教授

宮崎 敏孝

ここに「1996年 信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊 ラトナチュリ登山報告書」を刊行する運びが整いました。

この登頂計画の実行に様々な立場からご支援いただいた皆様に報告できるようになったことを嬉しく思います。

諸般の事情・状況より実行委員会を代表する委員長を私が引き受けことになりましたが、登頂計画と実行委員会の経過は、この報告書の第2章、および3章に記述されているとおり、1996年秋の信州大学・ネパール警察のギャジカン峰初登頂の過程で既に「レールが敷設されていて」何ら委員長らしき行動を必要としない形で、「成功の栄」に浴することになりました。

実行委員長の立場から、次の方々に改めて心からの謝意を申し上げます。

1) ネパール王国と中華人民共和国（チベット）との国境稜線上に聳えるラトナチュリ峰への登山を「超特別の配慮」によって許可されたことについて

①ネパール王国政府、及びネパール観光省

His Majesty's Gaverment of Nepal & Ministry of Tourism of HMG

②ネパール警察庁関係者一同

Nepal Police Head Quarters

③ネパール警察登山探検財団関係者一同

2) 信州大学創立45周年記念ヒマラヤ登山を呼びかけ、計画・実行を担当し、主体的に当計画の「レールを敷設した」小川勝氏、扇能清氏、御子柴三男氏、渡部光則氏、藤松太一氏、田辺治氏

3) 当計画の推進、各種支援について

①第5章に明記された法人、団体、個人

②信州大学学士山岳会

③物品寄贈、寄付を鋭意推進した森田稻吉郎氏、今関貞夫氏

4) 当計画の実行について

①当実行委員会委員各位

## ②登山隊隊員、並びにご家族各位

このラトナチュリ峰（7035m）の初登頂・全員登頂は、ネパール警察登山探検財団にとっては、6000mを越えるヒマラヤ登頂の12番目に当たり、1994年秋、ギャジカン（7038m）（信州大学と合同）及び1995年秋、ギビゲラ（7350m）（東京農業大学と合同）に続く3カ年連続の初登頂になりました。

2回の初登頂をともに実現できたことを大変嬉しく思います。

私ども信州大学学士山岳会、信州大学山岳会にとりましては、4番目の初登頂を記録したことになりました。

現役部員として参加した花谷、小林は「ヒマラヤに登山したいから信州大学を受験した」と個々に語りましたし、他大学入学後に改めて信州大学を受験し入学を果たしてきている山岳部員がいることも知りました。

「日本の屋根」北アルプスの麓にキャンパスをおく信州大学の活動の一翼として「登山活動」や「野外活動」を思考する受験生が相当数有ることは、「地の利を生かす」特色ある妥当な行為の1つとして大方の理解を得ることを考えます。

近時、諸般の情勢から「財政再建・行政改革」の一端として、国立大学のあり方・改革が話題とされ、評価の検討が叫ばれつつあり、地方大学はその「特色・独自性」を国民の共通認識として膚炎・浸透させる義務が生じつつあると感じます。

大学の社会における使命の1つは、様々な分野における「未知への挑戦」であり、次世代を担う若者に「未知への挑戦」の楽しさ、嬉しさ、喜び、厳しさなどをその実践を通して伝達してゆくことでしょう。

一方、21世紀の地球規模の環境問題を主題とする諸課題に対して、開発途上国の諸条件の中で生活・活動しうる能力を捨てし、先端技術の移植・展開を担う若者を育成・教育・派遣することは先進諸国の使命になっています。

国際協力事業団・海外青年協力隊に参加・活躍してきた信州大学の卒業生は、250名余に達し国立他大学の2倍以上の数になっています。意識されたガイダンスや特別な講義が開講されていないことを考慮すると、各自の在学期間中の「学生同士の雰囲気」と「信州の風土」により培われた要素が強く作用してきた結果なのでしょう。視点を変えれば信州大学の「特色・独自性」の一端であると捉えることができます。

わが信州大学の活動の一翼として「高峰への、未知・未踏への、そして困難さへの挑戦」を課題とする「登山活動」を持続・展開することへの更なる支援とご援助をお願いして、実行委員長の挨拶といたします。

## 寄付、寄贈、ご協力いただいた方々（敬称略 五十音順）

### 1、一般、企業関係

(株)アイビー化粧品、旭松食品(株)、(株)飯島商店、池上正之、伊那食品工業(株)、(株)上野屋、大塚製薬(株)、(株)クラレ、国際航空サービス(株)、コスモトレック、(株)サクセン、佐山スポーツ、信濃毎日新聞社、JICAネパール事務所、信越放送(株)、信州ハム(株)、セイコーエプソン(株)、(株)テザック、東京農業大学山岳会、東芝(株)、東芝電池(株)、東レ(株)、(株)日さく、日通航空(株)名古屋支店、同松本営業所、日本大使館（在ネパール）、日本ヒマラヤ協会、原田智弘、ヒマラヤ観光開発(株)大阪支店、フジエンジニアリング(株)、藤沢薬品工業(株)、ヘキスト薬品工業(株)、(株)マミヤ、丸子中央総合病院、三井物産(株)カトマンズ事務所、宮崎小里、明星食品(株)、明治製菓食品(株)名古屋支店、(株)モンベル、横河工事(株)、ロイヤルネパール航空

### 2、個人、隊員関係

青嶋伸二、浅岡敏明、浅田哲郎、芦原英司郎、阿部廣史、石井尋成、一井信之、市川敏夫、伊藤清文、伊藤太郎、伊藤寛親、今田和男、上原 修、上原文夫、薄井玉尚、宇田川隆一、江原文男、大久保浩司、大津昭宣、大津二三子、奥富稔雄、貝原 登、梶川康男、加藤雅史、金谷正男、金子綾子、金子紘一、金子茂男、金子誠二、加茂一郎、川北司郎、河原 勇、河原 齊、北川俊司、清杉睦雄、草間孝志、Udaya Bir Gurung、黒川行康、小池清彦、後藤規夫、小西和彦、小林民雄、小林紀之、米谷慎二、小山征夫、桜井弘幸、讃岐康博、澤田昭志、Madhu Sudan Shrestha、Deepak Man Sherchan、篠田和男、篠宮市子、城野玄房、杉村勲明、枚本正信、滝沢伸二、武田誠一、竹中昌一、武長憲二、田代恵美子、田中信治、田中喜一郎、田中 豊、谷川和夫、谷村スエノ、月原光明、津山繁明、寺尾幸子、寺田博昌、寺中裕子、東上恒彦、Arjun Sing Tulachan、Hiroko Tulachan、Mohan Sing Tulachan、中西三郎、中野慶太、中原淳一郎、那須野幸明、夏目光尋、西原春人、西星匡博、丹羽五郎、S.K.Battachan、橋本 修、橋本憲明、羽子岡爾郎、馬場禎造、濱 博和、菱田 智、樋村昭子、檜山義光、平野久仁一、福田征夫、古田富保、古旗喜代子、古路 聖、細井義弘、細谷基行、堀江邦幸、堀 哲、堀松正芳、前田紘道、槙島正和、松本剛一、松本 弘、御子柴光春、溝上 猛、宮下 信、村山康男、森岡英敏、諸岡 哲、山下康成、山田健太郎、山田靖則、山本英輔、山本 強、横山 篤、吉田典子、渡辺庄一郎、渡辺敏明、和田 智

寄付、寄贈、ご協力いただいた方々

### 3、信州大学関係

小川秋實、小林 詩、信州大学医学部付属病院薬剤部、(財)信州農林科学振興会、  
山下拓郎、山田哲雄

### 4、信州大学学士山岳会員

秋本一浩、東良 明、池内寛征、池内寛幸、石川悦子、井関芳郎、板谷真人、市川 豊、  
市野文明、今関貞夫、岩村孝之、上原金四郎、丑山寿子、牛山寿宏、内田貞夫、浦 正直、  
浦山大介、大西道夫、大林 健、大安徽雄、岡崎 猛、岡田 要、緒方邦夫、小川 勝、扇能 清、  
奥秋 仁、奥島啓志、小栗恒人、小根田一郎、小林広紀、小林盛男、小原 武、笠原敬一、  
河西貴史、葛西正美、主計勤也、加藤正幸、加藤喜章、金松直也、川崎 誠、川原 修、  
川原 洋、木内宗甫、菊池宮人、北村正弘、木下哲雄、向後利彦、小久保陽介、後藤紀彦、  
小林元紀、小林盛男、駒井 浩、小松英夫、小松幸雄、小柳津次清、坂西澄子、佐藤邦彦、  
猿橋孝雄、塩谷貞夫、清水一治、下田 章、新谷 剛、杉本恭二、関 圭三、平 邦彦、  
鷹取秀雄、竹ノ内秀実、田島 守、忠地文昭、立岩 剛、田中誠司、茅野文利、塚田幸子、  
出島五郎、東京地区O B会、飛田泰彦、豊田浩太郎、内藤精二、中込弥男、永島春治、  
長島妙子、中嶋岳志、中田 茂、中村和夫、中村貴士、中村幸典、西郡光昭、新田輝夫、  
橋口 徹、長谷川聰貞、樋口清明、久田千成、藤井卓也、藤松太一、藤本正二、藤元治郎、  
星野安雄、堀 勝彦、堀内芳次、牧瀬敏裕、松尾武久、松本穂高、丸山岳人、御子柴三男、  
三野和哉、宮内宣雄、宮崎敏孝、百瀬斐敏、森 光、森田稻吉郎、師田信人、柳沢勝輔、  
矢野想之輔、山田和彦、山田正弘、吉沢範子、吉田秀樹、吉野英夫、米倉幸夫

## 信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊 '96実行委員会組織

実行委員長：宮崎敏孝

副実行委員長：山田哲雄、氏原輝男、堀勝彦、百瀬斐敏、西郡光昭

事務局長：藤松太一、中村貴士

事務局員：御子柴三男、扇能清、渡部光則、吉田秀樹、田辺治、三野和哉、小久保陽介、柳沢勝輔、野村昌男、金子鉄男、澤田克彦、内田健一、花谷泰広、小林茂幹、磯部達哉

実行委員：木下哲雄、小林喜芳、葛西正美、山田和彦、松尾武久、平邦彦、岡村知彦、新井陽一郎、望月映洲、藤本正二、武藤一郎、山下泰弘、井関芳郎、小根田一郎、高橋雄治、中田茂、三井和夫、中嶋岳志、師田信人、牧瀬敏裕、岩村孝之、牛山寿宏、森 光、藤元治朗、角谷道弘、豊田浩太郎、中村幸典、長谷川聰貞、植垣健太郎、河西貴史、橋口徹、伴野達也、松本穂高、伊藤勇太郎、山内哲文

会 計：小久保陽介

企画専門：小川勝、森田稻吉郎、野村昌男、向後利彦

募金担当：山田哲雄、百瀬斐敏、野村昌男、今関貞夫、金子鉄男、小久保陽介

## 遠征隊員紹介



野村昌男 (55)

総隊長 (General leader)

1965年工学部電気工学科卒／自営業

1995年春 ネパール／ジョモソン トレッキング

1996年秋 ラトナチュリ (7035m) 初登頂

初めての海外遠征高峰登山で高年齢にもかかわらず見事、二次アタック隊として登頂に成功。遠征期間中に初孫誕生と喜びが二重になる。

遠く土佐の中村から参加。思考が自由で柔らかく、渉外とタクティクスを経験豊かな隊長と登攀隊長に一任し後に控えて大所高所より登山全体を見守った。



グプタ・バハドゥール・ラナ Gupta Bahadur Rana (56)

ネパール側隊長 (Nepal team leader)

Deputy Superintendent of police

1978年 ガネッシュヒマールIV峰 (7102m) 初登頂 (日本・ネパール警察合同隊)

1994年 ギャジカン (7038m)・ネパール側隊長 (信州大学・ネパール警察合同隊)

1995年 トウインズ (7350m)・ネパール側隊長 (東京農大・ネパール警察合同隊)

1996年 ラトナチュリ (7035m)・ネパール側隊長 (信州大学・ネパール警察合同隊)

ネパール警察登山探検財団の責任者で今回のネパール側隊長を務めた。人望に優れ、ネパール隊員だけではなく日本人隊員からも圧倒的な信頼を受けた誠実な人。

1976年のネパール警察登山隊の創立からのメンバーで豊富な登山経験に基づき今回の合同登山も成功に導いた。



渡部光則 (46)

日本側隊長 (Japan team leader)

1976年農学部林学科卒／森林開発公団

1973年秋-74年春 ネパール／ガネッシュヒマール偵察、ナヤ・カンガ  
(5846m) 登頂 (信大隊)

1980年春 ネパール／ガネッシュヒマールⅢ峰 (7111m) 副隊長 (信大隊)

1990年夏 旧ソ連／ハン・テングリ (7010m) 隊長 (信大隊)

1996年秋 ラトナチュリ (7035m) 初登頂

ヒゲの隊長で親しまれた。1973年、ヒムルンヒマール山群の山を偵察した時から夢に見てきたラトナチュリ峰は「渡部の山」と言っていた。その山に二次隊で見事登頂し夢を果たした。堅実で、隊員の信頼も厚く、ネパール語を流暢に話しネパール人からも慕われていた。ベースキャンプでは、お茶を点てるなど風流な面もあり余裕があった。



ギタ・バハドゥル・ジョシ Gita Bahadur Joshi (44)

ネパール側登攀隊長 (Nepal climbing leader)

Sub Inspector of Nepal police

1980 (ネパール暦2037) 年 チョオユーヒマール (ネパール・日本合同登山隊)

1982 (ネパール暦2039) 年 キャリオルンヒマール登頂 (ネパール・日本合同登山隊)

1984 (ネパール暦2041) 年 サガルマータ・クリーニングイヴェント登山  
(ネパール警察隊)

1985 (ネパール暦2042) 年 アンナプルナⅣ峰 (ネパール警察隊)

1990 (ネパール暦2047) 年 ガンченボヒマール (ネパール警察隊) 初登頂

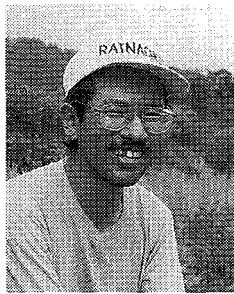
1991 (ネパール暦2048) 年 チェオヒマール (ネパール・日本合同隊) 初登頂

1994 (ネパール暦2051) 年 ギャジカン (ネパール・日本合同隊) 初登頂

1995 (ネパール暦2052) 年 ギビゲラ (ネパール・日本合同隊) 登頂

1996 (ネパール暦2035) 年 ラトナチュリ (ネパール・日本合同隊) 初登頂

日本人メンバーに人一倍、気をつかってくれる人格者。誠実な人柄が皆から慕われる。使い込んだ装備が物語る豊富な登山経験を持ち第二次アタックで登頂。子煩惱で、フランス留学中の息子が一時帰国したため一足先にカトマンズへ戻った。好物はウニのビン詰めでアタックの時もベースキャンプから1瓶持参していた。

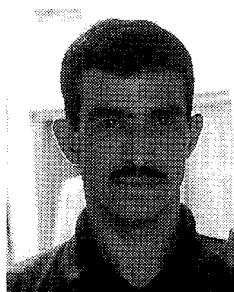


田辺 治 (35)

日本側登攀隊長 (Japan Climbing leader)

- 1984年農学部農芸化学科卒／登山ガイド  
 1982年秋 ネパール／ガネッシュヒマールⅢ峰 (7111m) (信大隊)  
 1987年秋 チベット／ラプチエカン (7367m) 初登頂 (HAJ隊)  
 1989年秋 チベット／チョモランマ北壁 (8848m) (HAJ隊)  
 1990年夏 パキスタン／ガッシャブルムⅡ峰 (8035m) 登頂 (イエティ同人隊)  
 1991年春 インド／カンチエンジンガ北東稜 (8556m) (HAJ隊)  
 1991年夏 旧ソ連／コルジエネフスカヤ (7105m)、レーニン (7134m)、  
                   コミニズム (7495m) 隊長、三座登頂 (東海山岳会隊)  
 1991-92年冬 ネパール／サガルマータ南西壁 (8848m) (群馬岳連隊)  
 1992年秋 ネパール／アンナプルナⅡ峰第一次偵察隊、隊長 (信大隊)  
 1993年夏 パキスタン／ブロードピーク (8047m) 隊長、登頂 (東海山岳会隊)  
 1993年秋 チベット／チョーオユー (8201m) 登頂 (群馬岳連隊)  
 1993-94年冬 ネパール／サガルマータ南西壁 (8848m) 冬季初登攀 (群  
                   馬岳連隊)、8000m峰3座同年連続登頂  
 1994年秋 ネパール／ギャジカン峰 (7038m) 初登頂、登攀隊長 (信大隊)  
 1995年春 チベット／マカルー東稜から北西稜 (8463m)、初登攀 (日本山岳会隊)  
 1996年秋 ラトナチュリ (7035m) 初登頂、登攀隊長  
 1997年夏 パキスタンK2 (8611m) 西稜から西壁初登攀、隊長

著名なヒマラヤ登山家で累積登行距離では日本第3位の記録を持つ。穏やかで気さくな人当たりだが、全員登頂を成功させた緻密な計画と実行力は全員が尊敬するところであった。普段はプロガイドとして日本と世界の山々を飛び回っている。新婚家庭を営んでいるが、趣味はネパール奥地の美人郷の探索らしい。



### ラムカジ・シヴァコティ Ramkaji Sivakoti (36)

Asistant Sub Inspector

1994年秋 ギャジカン (7038m) 初登頂

1995年秋 トゥインズ (7350m) 登頂

1996年秋 ラトナチュリ (7035m) 初登頂

登攀力、体力ともに優れ優秀、精悍な感じと愉快な雰囲気が渾然となっている不思議な人。アルコールも強く飲めば楽しい酒となる。

往路のキャラバンでは風邪で体調を崩していた花谷隊員に付き添って別動隊長として活躍していた。第三次登頂隊員として登頂。



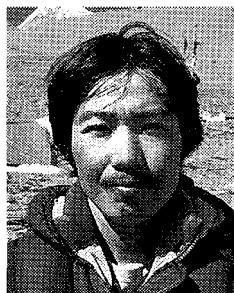
### 金子鉄男 (51)

装備・梱包輸送担当

1970年工学部土木工学科卒／横河工事(株)技術部

1996年秋 ラトナチュリ (7035m) 初登頂

その名のとおり鉄の意志、鋼の身体、そして抜群の金策力を持つ不思議な技術者。装備、梱包、輸送、電気、電子機器、計測関係を一手に引受け「さすが技術部長」と皆を感心させる。年輩ながら、いつも一番重いザックを背負い第一次アタックの強力なサポーターとしても大活躍した。製作を担当したデジタルビデオは素晴らしい出来栄えであった。第三次隊で登頂。



### 澤田克彦 (38)

会計・医療・気象・記録担当

1985年農学部農学研究科(応用微生物化学専攻)修士了／日研化学(株)開発部

1990年冬 アンナプルナ内院トレッキング

1992年秋 アンナプルナⅡ峰第二次偵察隊(信大隊)

1996年秋 ラトナチュリ (7035m) 初登頂

一度、自分で決めたことは、最後まで完全にやり遂げることをモットーとする。強い意志力は、マネージャーの役にうってつけで、隊員からのいろいろなおねだりや誘惑をあっさり断り健全財政に貢献した。ベースキャンプでは哲学書を読みながら、高所順応を楽しむという妙な特技をもつ。第一次登頂隊のサポートメンバーで、そのまま登頂を果たした。



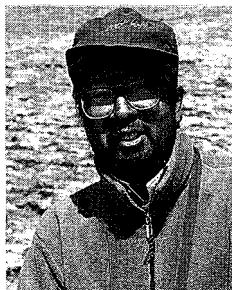
サンタ・バハドゥル・アレ Santa Bahadur Ale (30)

Head consteader

1994年秋 ギャジカン (7038m) 初登頂

1996年秋 ラトナチュリ (7035m) 初登頂

ネパール登山探検財団の若手ホープで、ラナ隊長の信頼も厚い。将来、財団を背負って立つ人物の一人。抜群の体力を持ち、一次アタック隊員として初登頂を果たす。いつも目をくりくりさせて微笑んでいるが、根性はたいしたものだ。



内田 健一 (28)

食料・環境保全担当

1995年農学部農学研究科（森林科学専攻）修士了／林業

1989年春 ネパール／コンデ・リ (6187m)（信大隊）

1993年夏 パキスタン／ブロードピーク (8047m) 登頂（東海山岳会隊）

1996年秋 ラトナチュリ (7035m) 初登頂

いつも冗談を連発し周囲の雰囲気を明るく盛り上げてくれる人。食料、環境保全を担当した。カトマンズでは準備の過労から体調を崩したが、キャラバン中に見事に復活し、ルート工作など先頭を切って活躍。第三次隊で登頂を果たした。

ベースキャンプでは巨大雪だるまを作り、数々の不滅のギャグを隊員に浸透させようと心から努力し、ネパール側からも「日本隊には一人だけ変わった人がいる」と不思議な評価を受けていた。陽気で騒がしいようだが、繊細な一面もある期待の若手。



花谷泰広 (20)

食料担当

教育学部生涯スポーツ課程・野外活動専攻 2年

1996年秋 ラトナチュリ (7035m) 初登頂

食料担当、いつも笑顔の明るい性格。体力は自他共に認めるところ。先発隊で体調を崩しキャラバン中に復活したが、この時、ネパール料理に過剰適応し、ダルバートを緑唐辛子で食べるまでになってしまった。

しかし、キッチンスタッフと共に巻き寿司、そば、天ぷらなど、おいしいものを作ってくれた。1997年度の山岳会リーダーを務める。第二次隊で登頂を果たした。



小林茂幹 (19)

会計・記録担当

人文学部人間情報学科・文化生態学専攻 2 年

1996年秋 ラトナチュリ (7035m) 初登頂

ベースキャンプでは毎日、手紙を書き、細かな会計計算を根気強く行っていた。どんなことでもいやがらずやる性格。文化人類学を研究分野とし、プレー・ガオンに残って越冬し調査したいと研究意欲もあり久々の学術的隊員である。

何時でも食欲旺盛で「小林 = 食事」というイメージを定着させた。又、メイルランナーから手渡される手紙の数は圧倒的に多く皆の羨望を集めていた。



ヴィシュワナス・シュレスタ Vishwanath Shrestha (32)

医師 Medical Doctor

Birendra Police Hospital

優しく温厚で誰にでも愛される人柄で日本人隊員からも慕われていた。

キャラバン開始直前にネパール警察病院から上司の命令で参加。キャラバン中は地域住民の病気や怪我を熱心に見ていた。

登山経験は全くないが高所順応しながら、ベースキャンプに到達し全日程を登山隊員と共にした。

帰りのキャラバンでは、雪の山道で、スリップ、転倒し不幸にも足首を複雑骨折し半年の入院をするはめになった。留学、結婚を控えていただけに、その後の幸多かれと祈る。



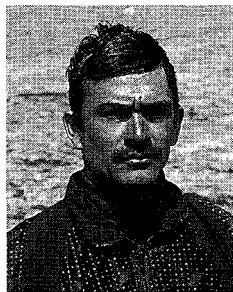
ジャヤ・ビシュヌ・ネパリ Jaya Bishnu Nepali (40)

連絡将校 Liaison Officer

Inspector of Nepal police

ネパール警察警部で、ポリスアカデミーの教官を務めている。事務能力に極めて優れ、ネパール警察との合同という事もあるが、日本側に対して友好、協力的であった。

イギリス留学の経験もあり明るく、スマートでしかもインテリジェンスを感じさせる点では両国隊員の中では一番であろう。職務上でもラナ隊長が直属の上司であり気をぬく隙がなかったようだが、酒席では渡部隊長と大いに意気投合して飲んでいた。



バブ・ラム・パウダル Babu Ram Paudel (32)

無線通信技師 Wireless Operator

Asistant Sub Inspector of Nepal Police Headquarter

キャラバン中は、カトマンズの警察本部との定時交信のみならず、登山隊内の非常時の通信に尽くしてくれた。又、ベースキャンプでは発電機によるバッテリーの充電、電灯による照明と活躍してくれた。

通信士の仕事に専念するだけではなく、隊に積極的に溶けこみ良き仲間となってくれた。

又、踊りが好きで、正統的なものから珍妙極まりない踊りまで出来、歌のあるところに必ず出現し皆の期待を裏切ることなく爆笑を誘っていた。



ヌル・シェルパ Nuru Sherpa (38)

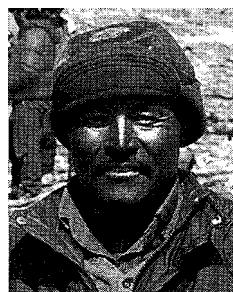
サーダー Sirdar

Consteader

1994年秋 ギャジカン (7038m) 初登頂

1996年秋 ラトナチュリ (7035m) 初登頂

体力抜群、ダウラギリ等、登山実績も豊富で明朗快活いつも冗談で周囲を笑わせている。しかし、サーダーとしての実務遂行能力も抜群でポーターを確実に掌握し面倒な給料の交渉などを一手に引き受けていた。登山後、直ちにポーターの給料支払い明細書が出来ていたのには驚いた。信頼感に富む優れた人だが、アルコールが入ると一転して感傷的になる優しい性格である。



フル・バハドゥル・ライ Ful Bahadur Rai (43)

高所シェルパ High Altitude Porter

Sub Inspector

いかつい顔に似合わず物静かで誠実な人。ネパール警察の登山隊では登頂隊員としての役割が多いようだが、今回は高所シェルパの役割であった。「高所シェルパの仕事とは、どのようなものか身を持って示したい」との言葉通り活躍した。

多くの山歴があり、ジョシ隊員に劣らない使い込んだ装備で第二次隊で登頂した。

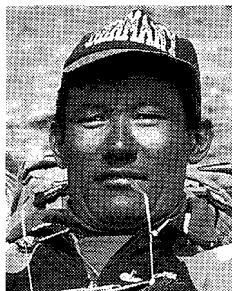


ドルガ・バハドゥール・タマン Duruga Bahadur Tamang (38)

高所シェルパ High Altitude Porter

Consteader

シェルパもできるしコックもできる、その要領のよさで得をしているのか、損をしているのか。下山途中に生活レベルの向上のため日本への出稼ぎを希望していたが、日本も不景気であり期待にそえなかった。

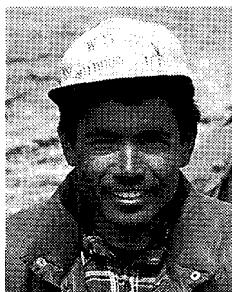


ダンバル・バハドゥール・グルン Damber Bahadur Gurung (34)

高所シェルパ High Altitude Porter

Consteader

豊富なヒマラヤ登山経験をもとに、高所では、安定した実力を示した。一見不敵な面構えだが、キャラバンではポーターの中に同郷の少女らを見つけるやブーのタシ・ゴンパへ案内し記念写真を撮ってやっていた。ベースキャンプでは「ギャンブルキング」の名を奉られていた。



ツル・バハドゥール・タマン Tur Bahadur Tamang (30)

高所シェルパ High Altitude Porter

Consteader

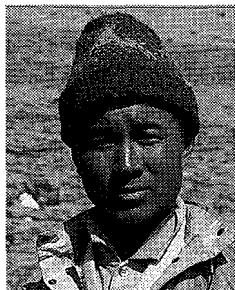
体力・経験・人柄とも、三拍子そろった優秀な高所シェルパである。従兄のドルガを尊敬しており、従兄の分まで人一倍働いてしまう性格をもつ。誠実で本当に頼りになる男である。第一次隊で登頂した。



ラジュマン・カバス Rajman Khabas (29)

コック Cook

今回の遠征のチーフ・コックであった。高所シェルパもできる多才で愉快な人間である。しかし登山や料理の腕よりも、女性に关心の重点がある様であった。服装と靴を常に気にする隊一番のスタイルリストである。



ナワン・ギャルツェン・シェルパ Nagwang Gyalzen Sherpa (26)  
コック Cook

カトマンズの日本料理レストラン「田村」で働いた事がある、日本料理に長けたコックである。ベースキャンプでは様々な工夫で我々の舌を楽しませてくれた。うどんを頼むと天ぷらを揚げはじめたのには脱帽だった。

隊員の中では、サーダーのヌル・シェルパとともに数少ない仏教徒である。誠実な人柄で読経が出来る。



アルジュン・バハドゥル・グルン Arjun Bahadur Gurung (30)  
メイルランナー Mail runner

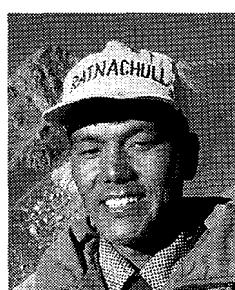
いつも影のようにラナ隊長に付き添い、「ボディガード」と呼ばれていた。

物静かだが、笑顔を絶やさない人。カトマンズのパーティでは背広姿がきまっていた。下界では有能な警察官なのだろう。



オンディ・シェルパ Ongdi Sherpa (24)  
メイルランナー Mail runner

日本語がよく出来るシェルパ。日本で働いていた事もあり、カトマンズでは旅行代理店で働いている。機転がきき、ビジネスに関心があり上昇志向の人だが、時に子供っぽい面も有り、笑いを誘うことも多々あった。



ペンバ・ツェリン・シェルパ Pemba Tsering Sherpa (25)  
キッチンスタッフ Kitchen staff

ギャジカン遠征に続いての参加。非常に気の利く男で、お茶をすすめてくれるタイミングも最高によかった。ベースキャンプで体調を崩してヘリでカトマンズに戻ってしまったが、その後元気を回復した。



ダナ・プラサド・ツムルク Dahna Prasad Tumbruk (26)

キッチンスタッフ Kitchen staff

いつも朝早く、モーニングティーを配る彼の声で一日が始まる。

キャラバン中はネパール側隊長のラナ氏の付き添いとして歩いていた。

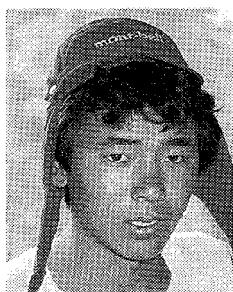
物静かで口数も少ない彼が、キッチンテントの奥でふかしイモを黙々と食べている姿などは少々無気味だったが、温厚で人当たりの優しい、明るい笑顔をもつ楽しい男だった。



アイテ・ガレ Aite Ghale (34)

キッチンスタッフ Kitchen staff

ギャジカン遠征に続いての参加。その人柄の良さ、働きぶりは全員の好感を買っていた。彼の作る料理は恐ろしく辛いが、味は最高だった。ツムルクとともに、どんな天気の時もモーニングティーを配りに来た。素直に「また一緒に山に行きたい」と思える男だった。



テンジン・シェルパ Tengen Sherpa (21)

キッチンスタッフ Kitchen staff

おとなしいが表裏なくよく働き信頼できるシェルパ。プラカスとともに年少のため皆に冷やかされて照れ笑いする事も多く学生といった感じ。帰りのキャラバンでは骨折したシュレスタ医師を背負い下山した。カトマンズでは親類の経営する旅行代理店で働いている。

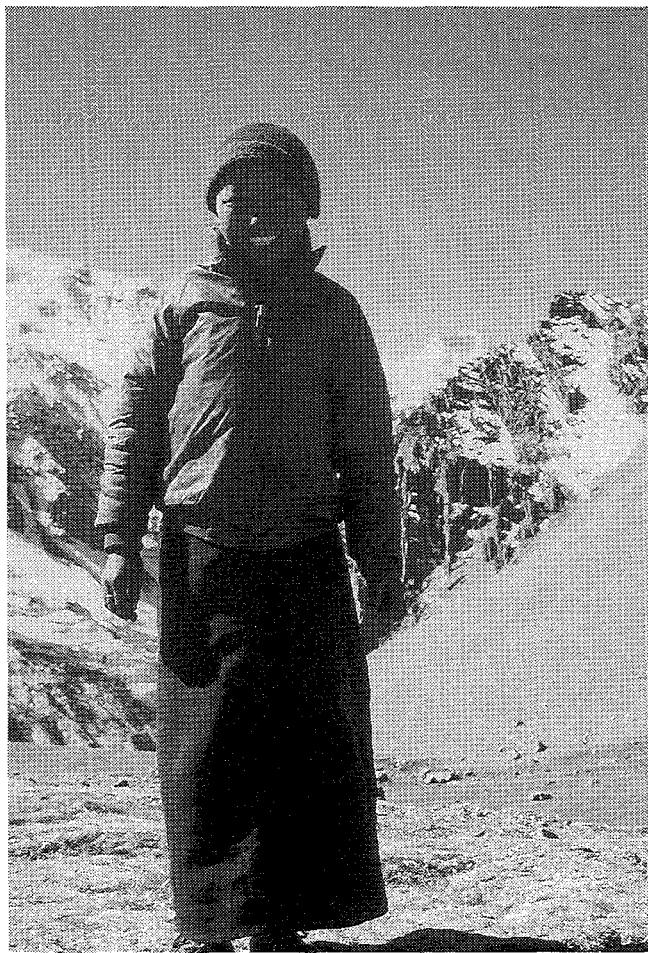


ジャヤ・プラカス・ライ Jaya Prakash Rai (19)

キッチンスタッフ Kitchen Staff

ネパール側スタッフの中で自称最年少。本当の歳は結局教えてくれなかった。いつも明るく、また小柄な体格からは想像もつかないような体力で、いつもキッチン道具を満載した巨大なドッコ（竹カゴ）を背負い山道を走っていた。

## 6 Summary



タシゴンパの少女

The First Successful Ascent of Mt.Ratna Chuli (7,035m)  
Report of The Nepal Police - Shinshu University Joint  
Himalayan Expedition 1996

By Mitsunori Watanabe

This expedition was organized by The Academic Alpine Club of Shinshu and Nepal Police Mountaineering and Adventure Foundation. Members were as follows;

General Leader: Masao Nomura (aged 55)

Japanese Leader: Mitsunori Watanabe (46)

Japanese Climbing Leader: Osamu Tanabe (35)

Japanese Members: Tetsuo Kaneko(50), Katsuhiko Sawada(38), Kenichi Uchida(28), Yasuhiro Hanatani(20), Shigemoto Kobayashi(19)

Nepalese Leader: Gupta Bahadur Rana (56)

Nepalese Climbing Leader: Gita Bahadur Joshi (44)

Nepalese Members: Ramkaji Sivakoti(36), Santa Bahadur Ale(30)

Sirdar: Nuru Sherpa(38)

High-altitude porter: Ful Bahadur Rai(43), Damber Bahadur Gurung(34), Durga Bahadur Thamang(38), Tul Bahadur Thamang(30)

Medical Doctor: Biswa Nath Shrestha (32)

Liaison Officer: Jaya Bishnu Nepali (40)

Wireless Operator: Babu Ram Paudel (32)

Cook: Rajman Khabas (29), Nawang Gyalzen Sherpa (26)

Kitchen Staff : Pemba Tsering Sherpa(25), Dahna Prasad Tumbruk(26), Aite Ghale(34), Tengen Sherpa(21), Jaya Prakash Rai(19)

Mail runners : Arjun Bahadur Gurung(30), Ongdi Sherpa(24)

#### Preface

The year of 1994 and 1996 were both commemorative for fellow members of The Academic Alpine Club of Shinshu University.

We accomplished two successful ascents of virgin peaks over 7,000m at Nepal Himalaya. One was Mt.Gyaji Kang(7,038m) in autumn 1994 and another was Mt.Ratna Chuli(7,035m)

in 1996.

We started to research our next Himalayan Expedition in 1992 and our first target was the north ridge of Mt.Annapurna II, the most difficult variation route.

The reconnaissance and trial climbing in 1992 and 1993, however, showed the danger of frequent rock falls and avalanches at the approach in the lower slopes.

At the same time, we also studied the other Himalayan mountains located around the entrance of the Phu Khola (the Phu Chu valley) which is the upper stream of the Nar Khola, one of the branch streams of the Marsyangdi River. They are to the northwest of Himlung Himal massif and the area of Peri Himal. These mountains lay on the watershed range between the Ganges in India and the Tsangpo in Tibet. No climbing parties have been here since a Himalayan pioneer, H.W.Tilman, made an exploration in the region in 1950. We found that the Hokkaido University party (The Academic Alpine Club of Hokkaido Exp. autumn 1992) succeeded in the first ascent of Himlung Himal (North Peak, 7,126m) at the time of our reconnaissance in 1992. It was one of the peaks we submitted application for at that time. They published their report, "Another Himlung Himal" that made the condition of the area widely known.

Thus we proposed the joint expedition with the Nepal Police Mountaineering and Adventure Foundation (NPMAF) that had several climbing activities to initially climb both Mt.Gyaji Kang ("Himlung Himal West Peak" on the former application form) and Mt.Ratna Chuli (Peri Himal MainPeak).

After several communications with NPMAF, the joint-climbing parties were formed through the detailed meeting between them and our dispatched delegates, Ogawa and Watanabe, in late 1993. First the Nepal Government granted us permission to climb Mt.Gyaji Kang only. We could not get permission to climb Mt.Ratna Chuli due to the delicate problem of the national boundaries.

Again, we continued to ask for permission after our success with Mt.Gyaji Kang in collaboration with NPMAF in autumn 1994. Finally, we got permission for one attempt. The Nepal Police did their utmost to realize success in the first step of our goal to climb Mt.Gyaji Kang., and their efforts will not be forgotten.

We also appreciate any help that several sections of His Majesty's Government of Nepal gave us.

## 1. Approach

Four members of the expedition team from Shinshu University left Kansai International

Airport and entered Nepal on August 21, and another four on September 1. We landed at Kathmandu on the evening of the same day, where we were warmly greeted by the Nepal Police. We passed through customs and immigration very easily, and we were able to use the Nepal Police Academy gymnasium to pack our loads for the expedition. Muggy monsoon conditions kept us in a sweat as we worked on our packing. We also busied ourselves visiting local authorities and making appropriate greetings.

On September 6, at the Police Academy, the Chief and officers of the Police gave us a send-off party to cheer up the members of the Joint Expedition Party. We left Kathmandu the same day in three buses (two of them for the porters) and two trucks. On the way we discovered that monsoon rains had flooded a river which washed out the highway, making it impossible to drive any further than Dhumre.

On September 7, we put together a caravan made up of 178 porters. We left Besi Sahar on September 10 and caravaned along the Marsyangdi River in the monsoon rain.

We arrived at Koto, the entrance to the Nar Khola, on September 14. We were able to spend the night in the lodges located along the Marsyangdi Road so far.

On September 15, we replaced some of the porters and marched into the Nar Khola. The lower stream of the Nar Khola becomes a very steep valley, Landslides and the collapse of the rocky base of the path blocked our entrance to the gorge. Because falling rocks could be dangerous, we were all under great stress when we passed through the gorge.

On September 18, we arrived at Phu-gaon at the altitude of 4,000m. We were surprised to see homes standing at the very end of an overhanging terrace on the right side of the river. It was a very unusual sight. On elevated ground on the other side of the village stood a temple of the Nyingma sect called Tashi Gompa. We all worshipped at the temple, where the priest's family recalled the Gyaji Kang Expedition and welcomed us warmly. They gave us good-luck amulets and prayed for our safety and success.

On September 19, we passed the end of the Panguri glacier which flows from both Mt. Gyaji Kang and Mt. Nemjung (the largest main peak in the Himalayas, 7,139m) which was first successfully ascended by the Hirosaki University Exp. who scaled its southeastern end through Duh Khola in autumn 1983. In the same day we reached Panguri-kharka (4,600m) on the left shore of the Phu Khola.

On September 20, we set up our Base Camp (BC, 5,200m) at a tableland located on the right shore of the Phu Khola left branch.

On September 22, we asked a priest from Tashi Gompa to come up to our BC and conduct "Phuja" according to Lamaistic religious rituals. The altar was made up at the base of the

Nepalese and the Japanese flag, our club's and NPMAF's one, hoisting so many Tarchho (religious banners). We prayed for safe climbing while burning incense sticks and Shuppa (a kind of incense made of Himalayan shrub).

Most of the Japanese members set up relay bases at Phu-gaon and Pangurikharka where they did acclimatization exercises.

On September 25, the Japanese members regathered in good health at the BC for the climb.

## 2. Challenges to the summit

We had a close view of Himlung Himal (North Peak, 7,126m) on one side of BC.

A party from Hokkaido University accomplished the first ascent of this mountain.

From the top of the moraine (5,400m) just above the BC, we could see the entire figure of the graceful Mt.Ratna Chuli.

We followed the moraine and an abrasion valley on the right shore of the leftside glacier and established the Advance Base Camp (ABC, 5,500m) at a point where the glacier met another one from the col on the south ridge of Ratna Chuli's western peak. By September 26, we had almost completed carrying our loads up the ABC. On the next day, however, snow began to fall and it didn't stop until September 29. We utilized this forced 3-day stay for doing more acclimatization exercise. Meanwhile, at the BC Pemba Tsing, our kitchen helper, became paralyzed on his right side. Although we called for a helicopter to take him down, adverse weather prevented him from being picked up until October 1. Fortunately, he made a good recovery and came to see us in good health on our return to Kathmandu.

On September 30, we attempted our first climb to the summit. The six climbers of the first summit party were: Tanabe (leader), Uchida, Ale, Nul, Dulga and Tulu.

Before returning to the ABC, they had climbed up the south ridge of the western peak, creating a route through a vast snow field spreading on the col of the ridge where we planned to construct C1. It took 5 pitches of fixed rope between ABC and C1. Other members carried the loads up to ABC and C1.

On October 1, after setting up C1, the first summit party made the route to the western peak (6,600m) along the south ridge. This south ridge required 19 pitches of fixed rope.

On October 2, they reached the western peak (6,600m). When this work was completed, the party descended fixing 3 more pitches of rope from the western peak pointing toward the main peak and reaching the spot where we had planned to set up C2, using snow-bars all through. The party then returned to C1. Because the weather began to deteriorate on October 3, they decided to postpone the first attempt. They left C1 and returned to BC. Bad

weather continued through October 5 with snowfall even at the BC.

Although the storm ended and the weather recovered on October 6, we refrained from doing any activity, taking into consideration the fresh, heavy fallen snow.

On October 7, the same party once again challenged the summit. They climbed up to C1 through the ABC, and on the next day set up C2 (6,550m). October 9 looked fine despite strong winds. Still the party waited until 7:00 A.M. before leaving C2 to descend the steep slope leading to the main summit col (6,400m) on the west ridge. At the steepest part, 3 pitches of rope had been fixed. The col itself was a wide plateau. Fixing ropes on a hard, crusted snow wall, the party ascended from col toward the main peak.

When the party was within 100m of the summit, the physical condition of a member (Uchida) became bad and rope was shortage. The Nepalese members were reluctant to climb in staccato (one at a time climbing) and insisted on returning. Thus, the second challenge was repulsed.

We know the third attempt would be our last opportunity since time was running out for us. We could afford to make no mistakes on our last attempt. We had divided into 3 parties so far (each party's leader: Watanabe, Tanabe, Sawada). But, when it came to this point, we decreased the members of the first summit party (leader : Tanabe, Ale and Tul), and chose six members to act as support. Among six supporters, Sawada and Durga were in charge of supporting the summiters above C2. Because no problems developed, these two members were able to join the first summit party.

The rest of the members gathered at C2, so each could join either the second or third party to make the summit.

The fine weather continued until after October 6. On October 11, at C2, we watched the passage of migrating cranes. We were deeply moved by the cranes flying in various formation against the shining azure sky above.

On October 12, the first summit party and support party left the BC. They climbed up to C1 via ABC on October 13.

On October 14 at 7:00 A.M., 5 members (Tanabe, Ale, Tul, Sawada and Durga) left C2 and successfully made the summit at 12:10 P.M. under strong winds. It took 3 pitches of rope from the spot where they had given up the ascent to the summit last time. (Total 18 pitches of fixed rope between C2 and the summit) Thus, they were standing on the top of Mt. Ratna Chuli, a jewel peak of which we had long dreamed. The summiters returned to C2 at 15:30, and returned to the BC on October 15.

On October 16, the second summit party (leader : Watanabe, Nomura, Hanatani, Joshi, Nuru

and Ful) successfully ascended to the summit. The weather was in our favor; it was fine and the wind was mild. In the far north the view of Mt.Loinbo Kangri (Lungpo Gangri) in Trans Himalayas could be seen, and to the south four mountains of Himlung Himal massif on the other side of the valley of the Phu Khola could be seen. Behind them were the majestic figures of the Great Himalayan Mountains, including Mt.Manaslu, Mt.Annapurna and Mt.Dhaulagiri.

On October 18, the third summit party (leader : Uchida, Kaneko, Kobayashi, Sivakoti and Damber) succeeded in ascending the summit. With this ascent, all members had climbed up to the summit of Mt.Ratna Chuli.

On October 19, we demolished C2 and returned to the BC. The next day, C1 and ABC were demolished. We carried unused ropes, foods and garbage down to the BC and completed all the mountain climbing activities.

### 3.Way back to Kathmandu

On October 22, we shut down the BC. We saw clouds flying very fast in the upper sky. We were afraid of the bad weather. We made up a returningcaravan of 15 porters with mainly yaks and horses (27 head) from Phu-gaon.Because we had to negotiate with them almost half day, we had to only set off at around 4:00 P.M..We stayed at Pangurikharka.

On October 23, the anticipated bad weather and snowfall began. We had a lot of hardships, but finally arrived at the snow-covered Phu-gaon. Because we were not able to cross over the Kang La pass due to snowfall, we went back the same way. As packhorses or any animals were not available to go on the path through the gorge in the lower part of the Nar Khola, we often had trouble with the porters. We were fed-up of our constant negotiation with them. Their strike caused us a shortage of food and fuel.

Nepalese medical doctor ( The Police Hospital's doctor), Shrestha, had a bad fall on a slippery snowy path and suffered compound fractures of the ankle. We carried him down in the snow. We went on the Marsyangdi Road as if we had been evacuating people. We reached Koto on October 27. On October 28, the chartered helicopter came to take him down from Chame to Kathmandu.

On October 29, we replaced the porters and made up the new caravan with donkeys. After that, things changed completely and we enjoyed a pleasant journey.

On November 1, we chartered buses and trucks at Besi Sahar.

On November 3, we finally arrived at Kathmandu.

With a marchingband leading us, we had a parade in the city and attended the welcoming

party held at the assembly hall of the Mahendra Police Club. We reported our success. We spent the following days packing and unpacking our loads, visiting local authorities, and doing many other things, include visiting our hospitalized medical doctor, and so on.

On November 7, we held the celebration dinner party at the Hotel Shankar.

Having so many guests as well as his Excellency the Minister of Home Affairs, the party was also a great success.

After those ceremonies, we left Kathmandu to come back to Japan separately on November 9, 10 and 13.

## 編集後記

この報告書は単に、1996年のネパールヒマラヤ・ラトナチュリ峰初登頂の記録というだけでなく、ここ数年にわたる信州大学山岳会・学士山岳会の海外登山活動の一連のまとめでもあります。

そのために、1992年からの同会ネパールヒマラヤ実行委員会の活動、アンナプルナⅡ峰偵察登山、及びギャジカン峰初登頂の記事も含めて編集してみました。

それらを概観すると、単に海外の高峰へ登るだけではなく山に対する憧れをエネルギーに様々な活動が行われ、学士会員や学生会員には大変良い勉強になったと考えています。

又、この活動の牽引役として快適な会合場所・穂高山荘とおいしい料理を常に提供して頂いた小川勝氏、扇能清氏、種々の実務でお世話になった井関芳郎氏に大変感謝しております。

本書の編集方針として、海外登山の初步的な参考書になればと思い、できるだけ細部まで書く事としました。しかし編集作業は遅々として進まず、約2年を費やしてしまい、ネパール政府との登山議定書、登山ルート詳細などの貴重な資料も予算と時間の関係から割愛した内容も多く、満足出来るものではありませんが、これにて出版といたしました。

出版が遅くなってしまったために、誠に残念ながら山田哲雄先生、御子柴三男氏には本報告書を見て頂くことができなくなってしまいました。

出国前、松本での壮行会で山田先生、御子柴さんは異口同音に「登頂は田辺や内田に任せて、おまえは学生の小林、花谷を必ず連れて帰って来て欲しい」と小生に仰っていたことが忘れられません。又、仕事をしながら如何にしてヒマラヤへ行くかという事をよく相談した二俣勇司氏にも報告したかったと思います。改めてご冥福をお祈りいたします。

本書の編集後記を書きながら、多くの方々の熱意と御好意で登山活動が成り立ち、無事帰還できたのだと改めて感じております。

関係各位に隊員一同より改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、本報告書の作成にあたり、信州大学農学部留学生のマドウ・スダン・シュレスタ氏にはネパール語の翻訳で、朝日新聞出版サービスの小泉欽司氏、伊藤祐子氏には予算をはじめ全体のとりまとめで、それぞれ大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

1999（平成11）年2月6日

信州大学山岳会・ネパール警察合同遠征隊

ラトナチュリ登山報告書編集責任者

澤田克彦

1996年信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊  
ラトナチュリ初登頂報告書

---

1999年3月31日 第1刷発行

編著者 信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊  
ラトナチュリ登山報告書編集委員会  
〒399-0045 長野県上伊那郡南箕輪村8304  
信州大学農学部森林科学科砂防工学研究室気付  
電話 0265-72-5255(内線451)

発行者 信州大学山岳会・信州大学学士山岳会

制作 朝日新聞出版サービス  
〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2  
電話 03-3545-0131代

装 帧 内藤寿美子

印刷・製本 (株)日刊スポーツ印刷社

---

©Shinshu University Alpine Club 1999 Printed in Japan

NEPAL HIMALAYA  
EXPEDITION 1996

RATNACHULI

SHINSHU UNIVERSITY

1999年3月末日

『1996年 信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊  
ラトナチュリ初登頂報告書』の刊行・お届けにあたって

信州大学ヒマラヤ遠征実行委員会  
委員長 宮崎敏孝

年度末、年度始めにあたり、皆様方には何かとご多忙のなかご清祥のことと拝察いたします。彼岸から清明への季節の移ろいは“新たな出発”への誘惑を強く感じさせる時節でもあります。

さてここに、去る1996年にご支援を賜った皆様方に、『1996年信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊ラトナチュリ初登頂報告書』をお届けし、ラトナチュリ峰初登頂・全員登頂の全貌をご報告し、責の一端を果たすことができる段階になったことを、隊員・実行委員ともども嬉しく感じます。

登山活動終了後、2ヶ年半を要することになりましたが、隊員諸兄の想いを“かたち”に完結できたことで、“善”といたく思います。部的な内容が濃いかとは感じますが、対象山域が当分の間、入域禁止地域の扱いに置かれることを踏まえれば、“記録”の意義も相応に付隨するものと考えます。

実行委員長の立場からは、“もう2年早く！”との意いはありますが、「未知への挑戦」の一端を、より大勢の方々に、また今後、同様の活躍を展開してくれるであろう後輩に伝えるひとつの手段であることに代わりはない、とも考えます。

われわれの活動に、暖かいご理解のもとにご支援をお寄せいただいた皆様方に、初登頂の雰囲気、心意気が伝わらんことを願いつつ、感謝の辞といたします。

敬具  
関係者各位

## ごあいさつ

ラトナチュリ登山隊総隊長

野村 昌男

春たけなわの良き日に、私たちが登りました「ラトナチュリ登山の記録」を出版することができ、たいへん嬉しく思います。

早いもので、すでに2年半が過ぎました。その節は皆様にたいへんお世話になりました。物心両面から多大のご援助をいただき、心より厚く御礼申し上げます。ここにささやかでございますが、本書をささげお礼の一つにさせていただきます。

昔から、登山の記録はたくさん書かれてまいりました。中には文学作品を凌ぐ名作が出版されました。モーリス・エルゾーグの「処女峰アンナ・ブルナ」やジョン・ハントの「エベエレスト登頂」やハインリッヒ・ハラーの「白い蜘蛛」など、少なからず僕の人生観に影響を与えた作品があります。これらは、文学作品といつても過言でありません。

一方、本書のように、大学山岳部を母体とした純然たる記録を主体に書かれたものがあります。堅苦しく、記録主体ですので、読む人によっては、関係なく面白くもなくつまらないと思うかもしれません、後世に記録を残しておくということは意義のあることかもしれません。特に、今回の登山は処女峰であったことと、今回限りで閉山される山であるのでなおさらです。記録を残しておくことは、私たちの義務でしょう。

出版にあたって2年半の長丁場を乗り切ったことに、編集長の沢田君をはじめ隊員諸兄とともに祝意を表したいと思います。

平成 11 年 3 月 27 日

信州大学学士山岳会 会員各位

1996 年信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊  
隊長 渡部光則

拝啓、松本平から眺める西山も光みなぎる春山のシーズンとなりましたが、皆様方におかれましては、益々お元気で御活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、皆様方の御協力、御援助により、1996 年ネパールヒマラヤのラトナチュリ峰 (7,035m) の初登頂に成功致しました記録が完成し、大変遅くなりましたが、皆様方のお手元にお届け出来るようになりました。我々隊員一同が彼の国にあって、どのように行動し何に感動したか、また喜びを分かちあえたか、御批判、御感想を賜れば幸甚に存じます。

本遠征の後も、来春ネパールヒマラヤへの遠征計画が動きだしております。1980 年、'82 年に敗退しましたガネッシュ・ヒマールに再び出かけ、今度こそその登頂を期しております。成功を祈りたいと存じます。

本報告書を出版するに際しましては、ネパール人ドクターの骨折、ネパール人スタッフの発病による、二度の救助ヘリコプター費用、円安、装備費用等思わぬ出費で、100 万円強の不足となりました。つきましては、大変心苦しいのですが、1 冊 3,500 円（送料込み）の実費を頂戴致したく、伏して、お願い申し上げます。

送金につきましては、同封致しました郵便振替の払込票にてお願い申し上げます。